山水行脚

坪谷水哉著

明治
44. 7. 26

自序

一枝の萬年筆と一個の暗箱、有たが病ひの旅行癖、下手の横好の寫眞道樂、衣服は着のみ着た切り雀、御宿は何所と定め無く、東西南北氣の向く所、日本全國は言ふに及ばず、清韓歐米の各國を、股に懸けること、玆に二十餘年、見聞くが儘に書きつけゝるもの、積で數十編の中から、日本本國の紀行が此の山水行脚と爲りぬ。五畿八道は勿論、琉球臺灣まで編入したれど、合併前の朝鮮行脚は、筆頭で合併し難き故、他日海外行脚を出版する中に收めんとて省けり。書中の諸編、今から見れば事情の異つたるが多きも、過去の日本は此んなものと、慰さみ半分に研究する一助となれば

可なり。若しまた幸ひに旅行の栞か避暑の友ともなるを得ば、編者の本望之に過ぎずと云爾。

辛亥七月上浣

坪谷水哉識

目次

日本海沿岸週航記……一頁
七尾の旅宿に炬燵の優待＝和倉温泉に一夜の遊浴＝鰯を追ふて鰐の徘徊＝古今の史蹟に富む敦賀港＝丹後の宮津も財布は無事＝別仕立の汽船で松江往來＝境港外風浪の大危難＝濱田の古城址に閑丁の一喝＝門司碇泊中に太宰府參詣＝全然日本化したる釜山港＝露國化し易い元山港＝海面の氷結せる浦潮斯德＝ニコリスク夜半の大マゴ附き＝飛雪紛々たる北海道＝港口を覗いた許りの新潟港＝昨日は風雪滿天今日は櫻花爛熳

初冬の榛名湖……二八
妙義山の鐵鎖……三四
利根の若鮎……四五
多摩川水源探檢記……五一
東京市民の生命＝水道の泉源＝探檢隊の出發＝多摩川と富士川の分水嶺＝泉水谷製炭事務所＝牛首谷と水晶谷＝丹波川と多摩川
草津入浴記……六七

白根山の噴火口……七七
滝壺探検失敗記……八八
探検を思ひ立たる序幕＝探検失敗前の小成功＝愈いよ探検大失敗の幕
日光足尾記……一〇〇
満目緑野の汽車の窓＝徹夜聞き明かす日光の杜鵑＝空間を走る鐵索の貨物輸送＝細尾峠特有の悲悲心
島＝山中の別天地足尾の銅山＝満山禿赭の鑛毒の惨狀＝足のある淺摩の跋扈＝愚なる哉寫眞禁斷境
房總キザ栗毛……一一三
北國めぐり……一二九
招待受けたる避暑旅行＝善光寺如來と米山藥師＝北越名物美人競進會＝佐渡に横たふ天の河＝追分ぶしに樽きめた＝船中より見たる富山の大火＝海中から温泉の和倉＝福井の月見亭に月見の小宴＝敦賀港内の入船出船
北越遊記……一四八
妙高山腹の赤倉温泉＝春日山の故城址＝石油と米田の沃野＝十年目の歸省＝新潟名物の美人
箱根めぐり……一六二
湯本＝塔ノ澤＝宮ノ下＝底倉＝堂ヶ島＝木賀＝小涌谷＝蘆ノ湯＝湯ノ花澤＝二た子山＝元箱根＝姥子＝大涌谷＝仙石原＝强羅＝箱根宿＝十國峠＝熱海温泉
二た子山登り……一八三
箱根の關址……一九〇
伊豆遊記……一九七
伊豆西海岸跋渉記……二一一
風雨を覺悟で沼津出發＝木戸松菊が土方人足で働いた舊蹟＝船に醉ふて犬も大へド＝激浪中に目覺しき小船の奮闘＝荷運人夫の達者な婆さん＝茄子畑の端に露天の水風呂＝伊豆半島最南端の絶景＝海中の巖窟に三尊の彌陀＝吉田松陰就縛の古跡
東海道汽車栗毛……二二八
月下の汽車＝牛臥の旅館＝興津の海水浴＝修善寺の温泉
駿河のゆきゝ……二三九
國府津の旅館＝東海道汽車＝地方人士の眞ごゝろ＝わが袖の記＝文士の墓の隣に武將の廟
木曾のかけ橋……二四七
飛驒栗毛……二五六

淀河源流跋渉記……二七一
花時の保津川舟遊＝加茂川堤の徜徉＝疏水の乘合船＝宇治川堤の櫻狩＝木津川岸の登臨＝三十石船の淀河下り
奈良寫眞紀行……二八六
吉野の花見……二九九
十津川越……三一九
落花滿地の吉野山出發＝回想す賀名生の古行宮＝暮雨蕭々天忠組の古戰場＝西國順禮の一行と同宿＝花笑ひ鳥啼く天の川岸＝想ひ起す大塔宮の潛行＝桃源郷の十津川村＝幾回か膽を冷す天嶮の跋渉＝鍛線渡し空間の曲藝＝柔櫓輕く漕で南紀に入る
瀞八丁……三四二
熊野巡り……三五一
杉の下みち……三六〇
吉野口から一群の都人士＝其の目的は林業視察＝吉野林業を水源經營の模範＝先づ眼に着く澄み切た川水＝愈いよ分け入る吉野の雲＝五社峠の三本杉＝五右衛門風呂に按摩の三助＝林業界の泰斗の居村＝吉野林業發達の大原因＝何所まで行ても杉林＝都人等の眼球を抜く田舍人
高野詣で……三八二
海内無雙の靈境＝登山の順路＝登山のしるべ＝山上の別天地＝奥の院＝日牌月牌の追善
養老の瀧……三九七
瀧の箕面……四〇〇
東山陰道紀行……四〇六
淵戸の日和山で車夫の忠告＝天然の妙工玄武洞＝流汗淋漓の城崎見物＝豐岡驛長の人力車斡旋＝出石町の鵲の巣籠り＝醫者となりまた繪師と爲る＝櫻峠から橋立の遠望＝岩滝港内水邊の一夜＝成相山から殿觀きの橋立＝縞の財布も宮津で無事
天艸洋の半日……四二七
九州から四國へ……四三四
紅葉の時節門司へ上陸＝耶馬溪の奇勝一日の遊覽＝宇佐神宮の大急ぎ參拜＝日出町に稀世の大蘇鐵＝別府溫泉に地獄の泉源＝道後溫泉で露探の嫌疑
琉球の舊王城……四五二
臺灣縱貫記……四六五

漂着く浪＝古府のかたみ＝砂糖黍の戦ぎ＝囚徒の手わざ＝未成品の新市街＝島人の手ぶり＝全島の首府＝送り迎ひの雨

挿畫……

一、日本海沿岸の一
能登の和倉温泉＝敦賀の氣比神宮＝丹後の宮津港＝石見の濱田港

二、日本海沿岸の二
朝鮮の官妓＝釜山市街に朝鮮貴族の輪＝朝鮮下等社會女の水汲み＝浦潮斯德港全景＝小樽港

三、關東の山水
妙義山の第一石門＝榛名湖＝榛名山の葛籠岩＝利根河の白帆＝草津温泉、熱の湯＝多摩川上流の碧潭

四、日光と足尾
日光陽明門＝日光の神橋＝足尾銅山

五、越後名物
新潟白山公園の雪景色＝新潟藝妓の盆踊り＝柏崎附近の石油坑＝赤倉温泉より妙高山を望む

六、箱根巡り
玉垂れの瀧＝宮ノ下温泉＝曾我兄弟の墓＝箱根神社＝関所の址

七、豆相の温泉
湯河原温泉＝伊豆山温泉＝伊豆山神社＝熱海温泉の全景＝熱海海岸横磯の濱

八、伊豆の西海岸
田子の浦亀の甲島＝妻良灣＝下田港

九、信州の山水
乘鞍嶽頂上より御嶽を望む＝御嶽の遠望＝木曾の寝覚

一〇、京洛の名所
京都祇園の櫻＝男山八幡宮＝保津川舟遊＝宇治鳳凰堂

一一、奈良みやげ
猿澤の池＝春日神社＝大佛殿の仁王＝藥師寺の三重の塔

一二、吉野の勝地
藏王堂山門＝村上義光墓＝後醍醐帝行在所址の吉水院＝後醍醐帝の山陵＝七曲り坂の櫻＝吉野川の筏

一三、熊野近傍
瀞八丁＝那智の瀧＝熊野の那智山妙法寺
一四、南紀の勝區
和歌浦觀海樓＝高野山の大門＝熊野新宮＝熊野新宮の古城址＝熊野勝浦灣＝熊野新宮秦の徐福の墓
一五、山陰の奇勝
天の橋立＝城崎溫泉の玄武洞＝津居山港の日和山
一六、九州から四國へ
耶馬溪の奇生の洞門＝同羅漢寺＝宇佐神宮＝別府溫泉の砂湯＝道後溫泉の公園
一七、琉球みやげ
首里城正殿＝首里の城門＝尙家御殿前の龍潭＝那覇通堂街＝琉球婦人
一八、臺灣風俗
臺灣神社＝淡水溪＝打狗港＝明延平郡王森福松の廟＝牛車の運搬＝貴人の轎＝婦人の盛裝

目次終

敦賀の氣比神宮

一の岩沿海水口

泉溫介和の登能

淺田濱の見石

丹後の名所

山水行脚

坪谷水哉著

日本海沿岸週航記

七尾の旅宿に炬燵の優待

『まだ彼岸前だ。海の浪が荒いから、二三航海待たら宜からう。親友や家族は皆な斯ぅ云ふて止めたが、余は意を決して終に能登の七尾から、日本海週航の汽船凱旋丸の初航海に乗り込だ。

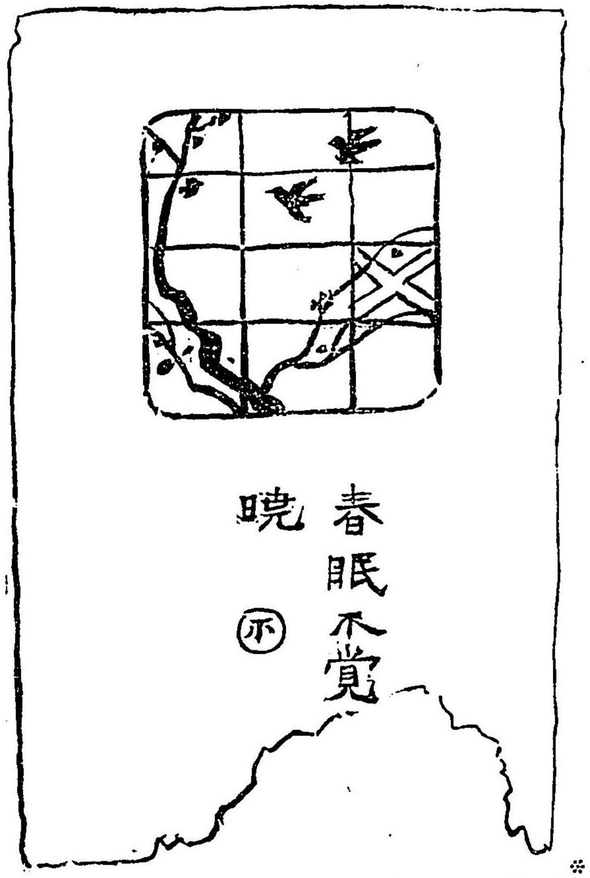
其頃西比利亞鐵道が全通して、對岸の浦潮斯德が最も重要の地と爲たので、我が政府は大阪の大家七平氏に補助して、二隻の汽船で我が北陸山陰の沿岸から朝鮮と浦潮

斯德を經、北海道まで廻航させることゝした。其の汽船の一隻が凱旋丸で、三月十七日に七尾を出帆し、西へ廻つて初航海を始めるのだ。

出帆の前の日、余は七尾へ往く。霜滿三軍營二秋氣清、數行過雁月三更と、此所は上杉霜臺公の詩で名高い地だが、前年の大火で全市が焼け、能登第一の都會も甚だ寂しく、殊に越中の立山が未だ全たく雪に包まれ、影を富山灣の海面に映すを見ては、ゾッとする程氣候寒く、宿屋の座敷には皆な炬燵を備へてあるが、空しく其所に一日待ち暮すも興が無い。幸ひに七尾から西に二里の和倉の溫泉には、遠く新潟や京阪からも入浴者が集まる所と聞き、着た翌る朝、人力車を和倉へ走らせた。

和倉溫泉に一夜の遊浴

能登は風折烏帽子の様な形の半島で、日本海へ突き出て富山灣を抱き、半島の内側に大きな能登島が横はり、島の蔭が七尾港で、七尾から西へ屏風崎を廻れば和倉溫泉だ。七尾と和倉の間には、衝立島、机島、猿島などが散在し、島は皆な小松を冠つて、風景は奥の松島に似て居る。毎日數回小蒸汽船が往來する故、陸上には行人稀で、人力車も奇らしいと覺しく、※薪負ふた馬が、驚いて跳ね出した。



和倉溫泉は海岸で、余が行た和歌崎樓の浴室の窓から、小蒸汽船の走るのが見える。

樓上からは近く辨天島の小松林や、能登島の蜑村漁落まで、手に取る樣に望まれて、海山の眺望甚だ好い。巖谷一六翁が此地の風景を賞して、山圍仍水抱、別闢二一乾坤一、靈泉可レ延レ壽、何必問二仙源一と、詠じたのは、能く眞景を盡す。慨むらくは余に時間乏しく、僅に一泊して歸つた。

鰯を追ふて鯨の徘徊

元來何の目的も無い旅行とて、寫眞機一と組の外には荷物も無いが、外國まで行くのだからとて、七尾警察署では、旅行の目的と携帶する旅費の金額まで尋ねられ、稅關では行李も檢査せられ、先づは事無く一等船客室に入る。同船者は七尾の樋爪某氏一人だ。

纜を解いたのは午前十一時、海上波穩かで、白鷗群がり飛び、一千七百九十噸の船内に、客も荷物も甚だ少ないので『案ずるよりも海が易い』と洒落つゝ、漸く進んで半島の最北端なる祿剛崎燈臺の前を過るとき、岸に近く鯨が噴水の如く潮を噴く。『今は鰯の漁期で、鯨は鰯を追ふて來て、鷗の飛ぶのは鰯の集つた證據です。で、漁夫は鰯の大漁を喜んで、鯨には手を出さんから、彼奴陸近くにあんな氣樂な眞似して居ます、

とは船長矢野倫貞氏の說明だ。頓て能登名產の漆器に名高い輪島の沖を過る頃、日は全たく暮れて、翌朝汽笛に眼を覺せば、船は既に敦賀港の内に碇泊す。

古今の史蹟に富む敦賀港

敦賀に上陸して、先づ停車場前の官幣大社氣比神宮を參拜す。是れ上古仲哀帝が、始めて三韓を征伐せんとて神功皇后と共に兵船を集め給ひし地、不幸にも帝は崩御して志を遂げさせ給はざりしも、後に皇后は之を實行し給ひし故、此所には仲哀帝と帝の皇子應神帝と、神功皇后とを併せ祀つて、今も皇室の尊崇最も嚴かなる靈地であ

る。更に轉じて町の東端の手筒山の上に、官幣中社金ケ崎宮を參拜す。此所は新田義貞が後醍醐帝の皇太子恒良親王と、第一の皇子尊良親王とを奉して北國に下向し、深雪の中に此の金ケ崎の城に籠りて、賊の大軍に圍まれ、惡戰苦鬪の後、守兵八百、殆ど皆な戰死して城は陷いり、尊良親王は自刄して薨じ給ひ、皇太子は賊軍に囚はれ、後に毒を呑でまた薨じ給ひし悲劇の故蹟で、明治の御代と爲てから、新たに兩親王の英靈を祀つた所だ。神社の背後なる鴎ケ崎の山上から望めば、敦賀港水陸の全景は、一々指點して瞰下さる。次に町の西端なる松原公園に往けば、珠を敷たかとばかりに白き海邊の沙の上に、四方五六丁餘の松林は、播磨の舞子に比べて松こそ若いが、面積は彼れより廣く、其の林間に正しく並ぶ三百餘基の墓石と、傍なる松原神社とは、近世史上に名高い水戸藩士武田耕雲齋、藤田小四郎等を祀る。其頃水戸藩は、天下に率先して尊王攘夷の大義を唱へ、幕府の施政を非難したる爲めに甚だしく幕府の憎惡を受け、後には藩士中に正義を唱ふる面々を、亂臣と稱して、征討の軍をさへ向けられければ、其等正義の徒は、武田耕雲齋を首將に戴き、京都に出でて衷情を朝廷に陳べんと欲し、故さらに道を上州より信州に採り、中仙道から北陸道に迂廻し、途中で及向ふ諸藩の兵は、片端から擊破りて、疾風の枯葉を拂ふが如くに過ぎたが、斯かる勇將猛卒も、北國の風雪には敵し難く、力盡きて加賀藩の軍門に降りしに、幕府の命で、其徒三百餘人は盡く此の松原で自刄したのだ。

實に敦賀は古今の歷史に大關係ある古蹟多きのみか、其地理上の位地は、北陸第一の良港で、古來東西の船舶集まり、琶琵湖の水運と連絡して、北國と上方地方とに、貨物運搬の要地であつた。況て方今は、露領浦潮斯德に最も近く、海上僅に四百八十浬を隔つるのみとて、直航の汽船は二晝夜以內で到着する故、敦賀の人々は自ら對露貿易の率先者を以て任じ、浦潮斯德に通ふ凱旋丸の船員歡迎會は、町の萬象閣で催された。余は水上警察の小蒸汽船で、灣內の海上一里餘の常宮神社を訪ふた。山に倚り海に枕みて風景奇に、豐公征韓役に戰利品の古鐘が頗る珍らしい。

丹後の宮津も財布は無事

敦賀を前夜出帆して、翌る朝は宮津に着く『二度と行くまい丹後の宮津、縞の財布が空になる』と、古來歌はれたる地で、殊に一里の近くに日本三景の一なる天橋立がある。上陸するや否や、余は先づ人力車を橋立に走らす。此所は與謝海の中央へ、北から長く一條の砂洲が橋の如くに出て、宮津灣と岩滝灣の内海とを區劃し、其砂洲は盡く老松を以て掩はれ、遠く望めば蒼龍の海を渡るが如く、また天然の橋かとも疑はるゝので、偖は天橋の名を得たのだ。天橋盡る所、内外の兩海を接續する一條の水路を、文珠の切戸と名け、其の南岸なる天橋山智恩寺の境内に名高い文珠堂がある。寺に詣で、堂を拜し、切戸を渡船で越して天橋の上に立てば、長さ一里、幅の廣き所三十間、狹きは十間ばかりの長洲は、總て京都府の公園で、一帶に數百年を經たる老松並び、松間に道路あり、左右に近く海を眺むるに、不思議にも松林中に湧く磯清水は、毫も鹽味が無い相だ。天橋を北に渡り盡せば、北端の山麓には、官幣中社籠神社あり。神社の背後なる成相山に登り、山上なる傘松の下に立ら、腰を屈めて股間から天橋を望めば、最も美觀を極むると聞くも、時間無れば匆々に歸り、宮津町の歡迎會で、丹後縮緬の友禪模樣美くしき美人を數人見たれど、根が他人の御馳走なれば、縞の財布も無事に本船へ歸り、此夕纜を解けば、翌る朝は伯耆の境港に碇泊す。

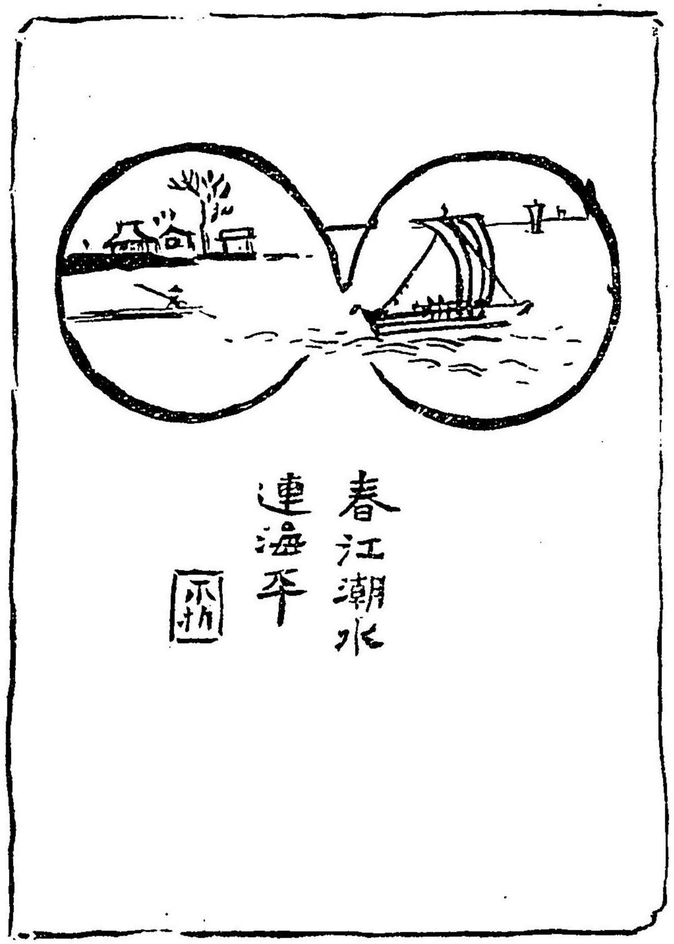
別仕立の汽船で松江往來

雲伯二州に跨がる中海の外面に、長堤の如く東西に横はる半島が伯耆の弓ケ濱で、其の西端、出雲の美保關と細い海峽を隔てゝ相對する市街が境港だ。で、境港には風浪を避ける海灣無く、凱旋丸は、遙かの沖に碇を下し、解舟で上陸して見ると、境と美保關の間は、宛から德利の口の如く細いが、其所から内の中海は、周回三十餘里の廣さで、一大湖水の如く、沿岸には出雲の松江伯耆の米子の兩郡會を首として、數

多の市街村落がある。去れば境、松江、米子の間には、一日五六回づゝ乘合小蒸汽船が往來して、水上の交通甚だ便利だ。

境町からも歡迎會に招かれたが、余は此の一日間に、松江と米子を一巡せんと企てた。シカシ乘合船では今夜八時の出帆までには歸られぬと聞き、電報で特別仕立の汽船一隻を松江へ注文し、先づ乘合船で、外江、大根島を經て、馬潟まで行く。馬潟は中海と宍道湖との間に通ずる大橋川の河口で、其所から汽船は川中を漕ぎ、二里ばかり進んで、宍道湖の口が即ち松江市だ。

出雲、石見、隱岐の三國を管轄する島根縣廳の所在地で、山陰道第一の大都會なる松江は、大橋川の兩岸に跨がつて、宍道湖に臨み、市街は甚だ立派だが、市民の言語は頗る明瞭を缺き、『私しや雲州平田の生れ』と云ふべきを『ワタサオンスウフラタノオマレ』と云ひ『十里二十里三十里』と云ふべきを『ヅールネヅールサンヅール』と訛り、通譯無れば聞取れぬことが多い。が、今は其等を研究する暇無く、湖畔の臨水亭に憩ふて午餐の準備を命じ、直ぐに後押附人力車で市中を一巡し、歸來午餐の箸を措くや否や、豫て用意の別仕立汽船で、大橋川を下つて中海に漕ぎ出し、安來と米子の兩市街を巡航せよと命じた。



『安來千軒名の有る所、社日櫻に十神山』と、雲伯二州

で歌はるゝ安來町の、其の有名な十神山が、高等文官大禮服の帽子の樣な形して、山上の松が一本づゝ數へらるゝほど近づくと、生憎風起りて浪高く、小さな汽船は、右に左に傾むいて、時々浪が船中に注ぐので、危險なる爲に針路を轉じ、安來と米子行を止めて、代りに美保關へ行く。

境港外風浪の大危難

美保關は、小さい海灣だが、古來和船の避難所で、船頭連の豪遊を縱まゝにする所今も平時には兒守や雜巾懸けを働らく藝妓が澤山居る相で、旅館小料理屋も數軒ある。余等は上陸して美保神社へ參詣し、愈〻汽船を境へ回航する頃、風浪益〻荒く、船は進行自由ならず。途中で日が暮れたから、其儘本船へ漕ぎ寄せよと命じても、內海通ひの小蒸汽で、トテも沖へは行かれぬとて、終に境へ着けた。時は最早七時、本船の出帆は一時間の後に迫り、船員は皆な歸り去り、便船は全く絕えて、猶豫せば置去りとなり相だ。スハこそ一大事と、急に艀舟を雇ひ、倔强の舟子四人で櫓を漕がせ、逆捲く怒濤の沖合遙かに、螢の樣な一點の燈光を目的とし、一浮一沈左傾右斜、身は船中で顚びつ轉げつ、手に汗握つて氣を揉めど、船の進行は甚だ鈍きに、郵便御用を奉ずる彼方の汽船は、定刻には是非とも碇を上げねばならぬので、促がす如くに頻りに汽笛を鳴らせば、余は殆ど氣が氣で無く。

『賃錢は幾らでも增す、早く彼の船に漕ぎ着けろ』

と、且つ命じ且つ勵まし、辛くも舷側に漕ぎ寄せると、船員は總懸りで、繩を下すやら、提灯を差しかざすやら、恰かも遭難船を救ふほどの騷ぎして、余が身體を本船中へ搔き上げたのは、八時前僅に五分。余は疲れて其後の事を知らぬ。

濱田の古城址に園丁の一喝

眼が覺れば最早石見の濱田港、境から一夜の中に到着したのだ。矢篦島と馬島の蔭

で、外海の風浪を知らぬ。此所は中世には鴨山と稱し、毛利氏の驍將吉川元春が、寡兵を以て織田氏の大軍と對戰して、勇名を輝かしたる名舉の地、近世幕府が長州を征伐したるとき、長州からは大村益次郎等の兵が逆さまに石州口へ進擊し、眞先に此の濱田城を攻めると、城兵支へ兼ね、自ら火を放ち城を燒いて逃れ去た不名舉の地だ。舊城址は今も舊藩主松平氏の所有で、濱田町民は借りて公園と爲す。丘陵に據て海に臨み、春櫻秋楓の林樹多く、庭内には菊水と云ふ酒樓あり。其所の歡迎會へ臨むに庭中の池に屋根船が浮ぶ。余は靴の儘で舟中に入ると、船は松平子爵の有な相で、園丁一喝、

『靴穿いて船に這入ることはならぬぞッ』

門司碇泊中に太宰府參詣

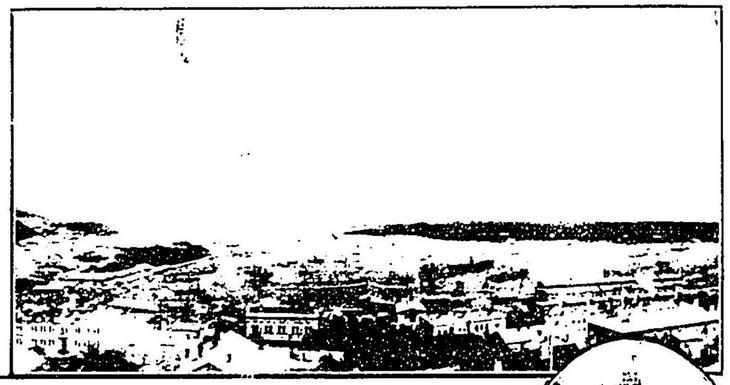
濱田を例に因て夕刻發し、翌る朝は門司港に入る。船は石炭を積む爲に二日間碇泊すると聞き、上陸して太宰府まで天滿宮參拜に出發す。此年は菅公一千年祭を三月二十五日から太宰府で擧行せらるゝと聞き、まだ數日早いが、操觚者の守り神として、余は參詣を思ひ立たのだ。

門司から

は小倉、博多の二大市を素通りして、二日市驛に下車すれば、其所から太宰府まで、三十丁の間、新たに馬車鐵道開け、天滿宮の境内には、京都から筑紫へ飛で行たといふ南苑と北苑との梅花は既に散て、彼岸櫻は綻び始めた。菅公の詩で名高い觀音寺の鐘聲は聞かねど、都府樓の古瓦を見て、光澤麗はしき銅製の臥牛の脊を撫でつゝ、徐ろに一千年前の昔を偲び、二日市からまた汽車で、天拜山は車窓から望み、此夜は博多に泊りて、翌る朝は箱崎八幡宮に詣づ。想ふ昔、弘安の秋、神風一たび起つて蒙古十萬の海軍を塵殺したるは乃ち此所。再び汽車で門司の船中に歸り、此夕入浴中に船は纜を解く。大里、小倉などは浴室の窓から覗き視、浴後寢臺に横はつて陶然快眠すれば、翌る朝は最早韓國釜山港。

全然日本化したる釜山港

韓國とは言ひ、釜山は二百餘年來の日本人居留地で、市街は全然日本人ばかり。時



浦潮須德港全景

小樽港

朝鮮の官妓

釜山市街に朝鮮貴族の橋

朝鮮下等社會女の水汲ノ

時白衣の韓人が徘徊する外には、日本に在ると異らぬ。しかし港外に聳ゆる絶影島は、韓國の特色を發揮して、樹木は一本も無く、また日本人町を出て韓人部落に入れば、剝ぎ立ての牛の皮を大道に展げて通行人の踏むに任せるもあり。住居は何れも藁葺屋根の掘立小屋で、家屋といふよりは巣といふ可く、顏の長いヨボが、長い烟管を口に咬へて居る。

釜山から一里、小山一つ越たる草梁まで行き、工事中の京釜鐵道を見て、其所の韓國郵便局に就て、切手や葉書を買はんとすれば、案内したる友人は、

『止し給へ朝鮮の郵便は、何時着くか分らん』

と止めたが、余は切手とスタムプが奇らしいので、立ちながら葉書を五六枚書て托した。

釜山京城間に通ずる京釜鐵道も、まだ釜山には手を附けぬ。將來は草梁、釜山間の山を崩して海を埋め、釜山まで延長する相だが、竣工までは前途遼遠に見えた。

露國化し易い元山港

今迄は毎夜睡眠中にのみ航行して、晝間は何時も碇泊したが、釜山から元山まで三百九浬の海上は、三十時間餘りかゝるので、前夜から航海するに、生憎海上浪高く、終日終夜船室中に籠城して、粥と梅干か鷄卵雜炊で腹を慰め、元山港へ着たのは、三月二十七日の朝だ。

元山は、日清戰役の劈頭、平壤を包圍攻擊すべく、佐藤大佐が豐橋の第三十七聯隊を率ゐて窃かに上陸し、所謂元山枝隊の運動を起したる地で、韓國でも最も早く開かれたる開港場の一だが、三方に山また山が遠く連なり、一面は海で、交通は甚だ不便なる上に、まだ日本へ直接に通信する電信も無い。が、露領浦潮斯德に近いので、一中隊の我が守備隊を置かれ、日本も露西亞も領事館がある。同じ韓人でも、此邊りの北韓人は、中々氣骨あり、且つ露領と往來が多いので、兎もすれば露國に依賴して、日本に反抗し相な氣風が見ゆる相だ。また日本領事館では、本國から櫻の苗を取り寄せて、幾たび植ゑても木が萎けて、トテも芳雲爛漫といふ花を開かぬといふ。此地方の産物は、砂金と、生牛と、冬季海上で夥多く捕れる明太魚といふ鰞で、韓人は明太魚を雪の上で凍らせながら乾し、年中時へて四方に賣出し、朝鮮全國到る所、冠婚喪祭の料理には、何時も必ず用ゐる相だ。

朝鮮名物の虎は、他の地方には殆ど無くなつたが、咸鏡道の山中には、まだ大分棲み、雪中には人里へ出て馬を捕て喞へ去ることもある。で、曾て我が守備隊で、虎狩りして豹を一頭獲たこともあるといふ。

海面の氷結せる浦潮斯德

元山は釜山と浦潮斯德の殆ど中央で、釜山へ三百九浬、浦潮斯德へ三百三十浬だから、またも北海の荒浪を漕ぎ分け漕ぎ分け、愈々浦潮斯德の港外に到着して、檢疫も

港務部員と税關吏との臨檢も濟で、大埠頭に横着けに繋いだのが三月三十日だ。港内の奥の方は、海面まだ全たく氷結して氷上には馬車が往來す。港も四五日前までは碎氷船を用ひて、汽船が出入した相だ。幸ひに余等の汽船は、其の面倒は無かつたが、寒氣はまだ強く、夜間は零度以下に下ることがあつた。

山を負ふて海に臨み、後方次第に高く、我が神戸に似たる市街、新開地ながら、町幅が廣い上に、海軍鎮守府や露清銀行の大建築と、獨逸人クンストアリベルスの百貨商店などは、日本ではまだ類の少ない大仕掛けで、往年露國皇太子が、日本へ來遊中、大津で津田三藏の爲に傷つけられ、直ぐに東京へ往かずに北の浦潮斯德へ上陸せられたとき、海岸に立てたる歡迎門を、今も凱旋門と名けて保存す。

元來軍港だから、日本では領事の代りに貿易事務官と名けて川上俊彥氏が居り、日本人の領袖には、杉浦龍吉氏の商店があり、其他にも多くの日本人は、北京街の附近に集つて居る。杉浦主人自から余を案内して、馬車で市中を一覽した。

ニコリスク夜半の大マゴ着き

浦潮斯德からの鐵道は、一方は北に黑龍江岸のハバロフスクまで通じて、之を烏蘇利線と名け、一方は烏蘇利線のニコリスク、ウスリスキーから分岐して、北滿洲に入り、更に西比利亞を通過して歐羅巴に連なるので、滿洲に在る線を東清線と呼び、西比利亞にあるを西比利亞線と呼ぶ。で、何れも西比利亞大鐵道の一部であるから、余は少くも其の鐵道の一部に乘て見たいと思ふたが、露語は話せず、殊にまだ開けたばかりの半成品なる鐵道で、日本人と見れば軍事探偵と疑はるゝ故、如何なる間違が生せぬとも知れぬ。此れには頗る當惑して居ると、杉浦氏の好意で、特に店員一人を添へて、八十九露里を隔つるニコリスク、ウスリスキーまで案内せらるゝことに爲た。

まだ消え淺る路傍の雪を、汽車の窓から眺めつゝ走るに、鐵道は露國一流世界無類

なる幅五呎の廣軌式で、客室内は天井高く幅廣く、室外には廊下も通じ、日本のに比べて總てが大陸的である。が、汽車の時間表は毫も當てにならず、途中の大驛では、三十分も停車することがある。其等の驛では構内の料理店で、食事が準備せられ、汽車の着く前に、熱いソップを大皿に盛て卓上に並べ、ソップの中には大きな肉が幾臠も横はつて、小刀で切て喰べるなど、何所までも露國式だ。

汽車は遲れに遲れて、ニコリスク、ウスリスキー驛に着たのが夜の十一時、シカも停車場は市街から十五六丁離れて在る故、馬車で市街に着くと、何所も寂靜まつて、豫め心當てにした同地の日本人は、何處に誰れが居るか毫も知れぬ。彼方此方へマゴつきつゝ、頻りに馬車を乘り廻せば、夜は次第に更け、新市街の家並も疎らに兵營ばかり多き部落とて、所々で大には吠えられる、時々路傍に立つ巡査には白眼まれる、其のまた巡査に物を尋ねても、一向に要領を得ぬ。辛ふじて同地日本人の領袖株なる田川金吉といふ人が、寫眞屋と女郎屋を兼業することを思ひ出し、女郎屋ならばまだ起て居るであらうと、馬車を遊廓へ走らせ、田川氏の店を尋ねると、幸ひに主人はまだ起て、快く余等の宿泊を諾し、

『僕の家の二階は、女子供を入れぬ所で綺麗だから、其所へ御寢みなさい。其れに夜更けて腹が飢たで御座いませう。今パンを燒かせます。』

と、親切に世話せられ、地獄で佛の思ひして、愈々寢臺に横はつたのは午前一時過ぎだ。

飛雪紛々たる北海道

兵營以外に見るもの無き、ニコリスク、ウスリスキーの市街は、翌る朝の間に見物を了して、其日の夕刻浦鹽斯德へ歸り、露西亞名物の蒸風呂へ赴くと、番頭から『女は呼ばぬでも宜いか』といふ奇拔な問を受け、頗る面喰つたが、後に聞けば此所は婦人と混浴する、一種の樂園な相だ。

其の翌日北海道の小樽へ向けて出帆すると、二日間の航海には、吹雪と風浪とで甚だしく避易したが、小樽に着ても頻りに雪が降る。市街の中央なる天狗山の高所に登つても、紛々たる飛雪に眺望利かず。此れでは此先の船中も思ひやらるゝので、汽船が小樽から函館へ回航する間、余は陸上を汽車で迂廻するに決し、途中札幌に一泊して、岩見澤から室蘭に出て、其夜日本郵船會社の汽船で函館へ渡ると、凱旋丸は最早前日に此所へ廻航したので、余は函館港を一巡してから、再び元との船中へ戻つた。

港口を覗いた許りの新潟港

函館から新潟へ行くには信濃川口が危險で、直航しても碇泊が出來るか否か分らぬ故、順序として先づ佐渡の夷港に着く。果して新潟は浪が高くて這入られぬと云ふ電報ゆゑ、一晝夜間用も無く夷港に滯在す。其所は加茂湖と海と接續する細い川口で、川の一方は夷町、一方は湊町、兩方合せて兩津町と稱し、三方を陸で圍まれ、灣内靜かで、風浪には甚だ安全なれば、新潟港へ碇泊したる汽船は、風浪起れば皆な此所へ逃げて來る。新潟の俚謠に『來いと云ふたとて行かりようか※』近海廻り汽船は、大抵四時間で到着す。

※佐渡へ佐渡は四十九里波の上』と云ふも實際は海上十八里で普通の

翌る日は風も稍や静まつたれば、碇を抜て新潟に向ひ、信濃河口に達すると、前日來の雨雪で、信濃河の水量増し、水勢激しく波浪高く捲き、船は容易く入る能はず。頓かて上流から救助船と稱する一隻の傳馬船が、左右に六挺づゝの櫓を漕で、激浪の間に見えつ隠れつして近寄り來る。漸くにして余等の舷側に着くと、北海道から新潟へ歸る老婦人の三等船客が、此の浮沈する船を見て、

『己らマア眞に如何しようばノー』

と、幾たびも二の足踏だが、船員總懸りで、辛ふじて其人を救助船の中へ投げ込むと、續いて五六人の船客、目を閉ぢ念佛を唱へながら、救助船に飛び込み、最後に凱旋丸の事務長も乘込だ。新潟は余が郷里だが、上陸せば再び乘船が困難しと聞て見合せると、本船は直ぐに再び佐渡へ引返した。

昨日は風雪滿天今日は櫻花爛漫

此夜風浪未だ止まず、郵便船の時刻は迫る。今は止を得ず新潟寄港を見合せ、事務長を上陸させたる儘、置去りにして、凱旋丸は夜半に纜を解き、風雪を冒して發す。翌る朝見れば、甲板の上には積雪三寸餘りある。其日の夕、越中の伏木港に着た。此所は二十六日前に、余が此船で乘り出したる能登の七尾港とは、海上僅に十哩を隔て、同じ富山灣の内に在る。

斯て日本海沿岸も無事に一週し了つたので、船中では三鞭の盃を擧げて送られ、目出度く上陸して其夜は高岡市に泊り、翌る四月十二日、金澤市の名高い兼六公園に遊べば、恰かも櫻花滿開の日曜で、貴賤老若狂するばかりに群集し、衣香扇影春正に闌はである。

凱旋丸は其の翌る年も、同じく日本海の週航を續けしに、不幸にも浦潮斯德と小樽との間で、難破し、船中備附の寫眞帖には、余が寫眞も挿まれたる儘、海底の藻屑となつた。（明治三十四年）

初冬の榛名湖

前橋停車場前の旅舍から、店頭の霜を履で早朝に立ち出で、澁川行馬車鐵道の一番發車に乘る。陸軍特別大演習陪觀後、伊香保溫泉に行て一日の靜養を得んとて、昨日鬼怒川の岸で最後の休戰喇叭が鳴るや否や、直ぐに歸路に就き、前夜遲く前橋まで駈け着けたのだ。

小春の空は隈なく霽れて、右に赤城、左に妙義、中央に榛名の、所謂上毛の三山が互に山容の奇を競ふて立ち並ぶ中にも、最も近き榛名は、頂上の三峰雲を衝き、一は峰頭尖り、二は稍や圓く、關東の平野を瞰視す姿は、巨人の睥睨するが如く、雄々しく見上げられ、山麓からは數しば眺めるが、未だ山上に登臨した事が無いので、今日伊香保へ行く序でに、此の好晴を利用し、登つて見んと思ひ出しては、疲勞も靜養も何の物かはと、澁川町へ着くと、直ぐに綱附人車で伊香保へ走らせ、坂路二里を一

時間で登つて、伊香保へ着たのが十一月十日の午前十時。

仰ぎ見る榛名の腰を鳥渡る

普通の客ならば、座敷へ通ると先づ衣服を更め、直ぐに湯殿へ飛び込むべきを、余は辨當と草鞋と案内者とを命じたので、旅館の番頭は忠告して、

『エー今日の空では變り易す相で、直に降て來ますかも知れません。其れに此處から湖水まで二里、更に榛名神社まで半里、往復五里の山道で御座いますで、些と御出懸が御遲い樣に思はれますが……』

と親切に言て呉れたが、此機を外してはまた何時と期し難いので、何でも好いから準備をと命ずる間に、變り易い山上の秋の空は、忽ち曇つたかと見ると、頓て樓上から眺める山々は、雲に包まれ、辨當の出來た頃には、最早ポツ〳〵と大粒な雨が降り出した。で、更に一枚の油紙を求めさせ、外套の上から着て、洋傘を翳して出たのは午前十一時、雨は熾に降り出した。

階段の様に傾斜の急な伊香保の市街を離れ、七曲り坂を登ること約半里、左右の樹の葉は、深紅淡黄、いろ〳〵の眺め美しきも、半ば既に落ち散て、道を埋むるを踏みながら登れば、稍や平坦の地に一軒の茶屋がある、鷹の巣平と呼ぶ。渓を隔てゝ對ふ側の山腹に、小屋が見ゆるのは、伊香保温泉の泉源で、天然の蒸風呂があると聞けど今は訪ふ暇なく、更に十丁ばかり行くと、また急坂で、山には林木なく、風は横さまに雨を吹て、着たる油紙は頻りに煽られ、油断すれば忽ち洋傘も奪はれ相ゆゑ、壘んで杖と爲し、突き立て突立て登るに、雨と汗と、一時に額から流れて、滿面盡く濡れ、頭上の烏打帽子も、搾るばかりと爲ても、また如何ともし難い。勇を鼓して頂上の茶屋まで達し、就て憩まうと思へば、空屋で固く戸を閉す。此所は海拔三千七百尺、伊香保よりは二千尺高い相だ。

此れから山上の平原、一里ばかり連なり、秋は千草の花美しいと聞くも、今は唯だ枯尾花が風の爲に起伏するばかり。時に見る左方に近く並ぶ二つ岳、男嶽は尖り、女嶽は圓く、更に一の相馬嶽は、最も高く、佛手柑を逆さに立てた様な頂上に華表がある。登れば關東八州は目の下で、東京の隅田河を漕ぐ船の帆まで見ゆる相だが、鐵の鎖りを攀て登るので、今日の様な風の日には危険ない上に、曇つて展望が利かぬと案内者の説明に、登臨を見合せ、更に數丁行くと、黑き巖石の重なり合うて、其の間に洞門の開けたる覗き巖と云ふがある。チョッと覗いてまた行けば、平原盡きて湖水の岸に出づ。

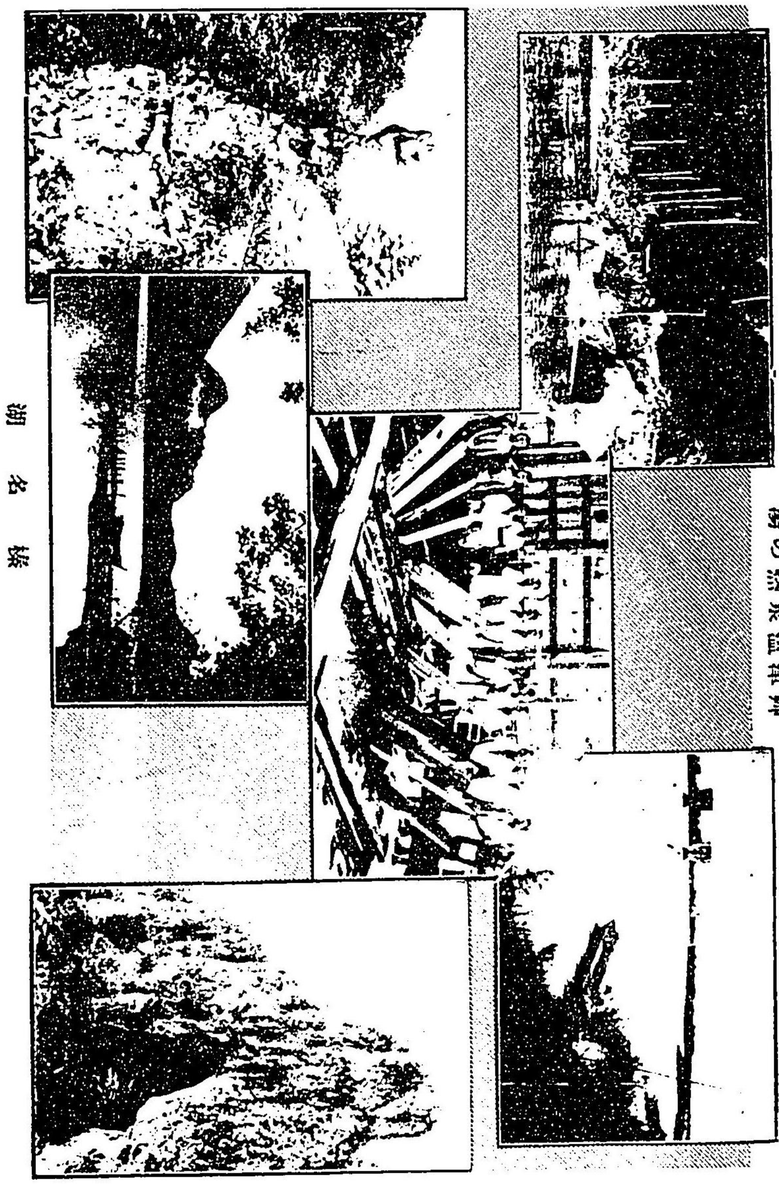
湖岸には、林樹盡とく落葉して、道を埋むる中を歩けば、ゴソリ〳〵と聲がする。湖は周圍約一里半、對岸には榛名富士が、摺鉢を伏せた様に峙ち、向つて其の右には氷室山、摺碓岩、左には烏帽子嶽、鬚櫛嶽、硯岩、掃部嶽などの小山が、湖を繞つて並び、此方の林の端には、二軒の旅舍兼料理店がある。新しい氣の利いた氣なるを湖畔亭と云ひ、家の背後には、數隻の小艇が横はる。山水の眺めに前年余が蘇格蘭で見たるスコットの湖上の美人を歌ふたカトリン湖に似て、湖畔亭はトロサックホテルの

位地だが、今は歌ふべき美人も無く、また余にスコットの詩才も無いので、僅に呻り出た一句

榛名湖や落葉ふみ行く沓の音

湖畔亭で携へたる辨當を開くに、坂路を登るとき暑かつたのが、静止すると急に寒く、爐邊に多く炭を燻べさせ、草鞋の儘に踏み込で煖を取る。時既に午後一時、餓えて且つ渇いて、辨當と麥酒が頗る美味く、一粒の飯も餘さず喫べ了る頃、幸ひに雨は霽れた。で、三脚を湖岸に立て、湖上の景を數枚寫す。枯林の中から榛名富士を望む景は、斯かる時節で無ればまた得られない圖だ。

湖岸から坂路三丁ばかり登ると、頂上に榛名社の一の華表あり。左右に一軒づゝ茶店がある。湖水の全景は、此所の眺望が最も好い。其所から坂路を前方へ降ること十丁許りで、突如として左りの山腹に一奇岩が、龍の昇天するが如くに立つ。高さ十丈餘り、頂上大にして頭の如く、腰は細いので花魁の立姿に見立る者もある相だ。



榛名湖の流上三國峠

榛名湖の遠景

榛名山の奇岩

榛名湖

榛名山の奇岩

土人は之を葛籠岩といふ。數千年の風雨に侵蝕せられ、骨ばかり殘つたのだ。

葛籠岩から三四丁で、老杉森然晝も小暗き林間に入れば、また赤き華表がある。潜りて進めば、石段の上に美しき樓門が聳え、其の内の石段を躋れば、上には丹楹紫欄所々に金色を雜へ、而かも多く剝落して、古色は殊に神威の莊嚴を加ふるかと見ゆるは、是れなん榛名神社だ。茲に最も奇なるは、鉾石とて、樓門の前、石段の傍、直立十丈ばかりの巨巖、全身灰色にて、形は傘袋の如きが老杉と高きを競ふて立つ。之と相對して祠殿の背後にも、偉人の立てるが如き形の巨巖が、儼然と祠殿を擁く。土人は之を榛名の御神體の權化なりとて、御姿石と呼ぶ相だ。實にや葛籠岩、鉾石、御姿石の三大巖は、雄大怪奇、天工の妙を極め、榛名湖の秀麗と相俟て、有數の眺めだ。

鉾石や頭隠して時雨雲

再び歩を旋して一ノ華表の高所に戻れば、湖面晴れて周圍の山影を水に映し、身を轉ずれば、妙義、秩父、遠くは甲信の山々が指顧の中に在る。（明治四十二年）

妙義山の鐵鎖

汽車を松井田驛にて出れば、小春の空は隈無く霽れ、二三日以來異狀ありと傳へられたる淺間山は、熾んに烟を噴て東に聳え、北には近く妙義の三峰が、仁王の拳の樣な形して並び、其の中の最も近く頭上を壓して見上げらるゝのが白雲山、其の蔭から半面を現はすのが金洞山、一に中の嶽とも呼び、また左方に少しく離れて並ぶのが金雞山、以上の三峰を併せ稱して妙義山と呼ぶ。其の妙義山と別に榛名赤城の二山とを併せて、上毛の三山と稱し、何れも奇拔な山容が、高崎、前橋、兩市の東北方に對立するので名高い。其の中に最も怪奇峻峭なるが妙義山だ。榛名と赤城とには、山上の湖水で、風景の美を賞せらるゝも、妙義は唯だ磊々落々たる大巖石のみ宛から大丈夫が肩怒らして白眼んだ樣な奇拔な所が天下一品で、上毛三山の中で最も廣く天下に知らる。余は其の妙義に登るべく、今朝東京を發して此所へ來たのだ。

松井田停車場は、碓氷川に近く白雲山の麓にある。鐵道の橋を渡れば對岸は最早白雲山の腰だが、鐵道橋は危險で、普通人の渡るを許さねば、グルリと松井田の市街を廻つて、谷底に下り、今年の秋の洪水で、流れて亡くなつた假橋を渡り、再び坂を登れば恰も停車場の川向ひだ。其間の距離が十二丁ばかりとは、ナンテ馬鹿らしいんだらうと言ひたくなる。

『車屋さん、妙義の紅葉は今日あたり如何だらうか』と尋ぬると、

『旦那、モウ紅葉は遲かんべえ。先の日曜が盛りで、一番餘計人が登つたゞよ。シカシ紅葉は遲くつても、妙義の山は何時行ても日本一の眺めでがんすよ。一體今年は前橋の共進會を廻つて、エライ澤山妙義へも來ましたよ。』

此の車夫の車で、爪先上りに登ること一里と五丁、妙義町の菱屋旅館に着いた。町と言ふても驚く勿れ、戸數は僅に五六十戸だ。

黑門坂の上に、兩側へ一丁ばかり並ぶ妙義町、之が町とは甚だ可笑いが、妙義、中、

里、行澤、菅原、諸戸、岳、大牛、古立の近傍八部落を合せて、それを支配する役場があり、百姓ばかりの町會議員が、山を越え、谷を越えて集まる所である相だ。勿論舊時は妙義山も神佛混淆で、江戸の上野東叡山の宮樣の御隱居所とて、白雲山石塔寺といふと、其の頃は頗ぶる威張たもので、隨つて現時の黑門から奥が其の境内で、人家も多く、立派な市街を爲し、靈地に不似合な女郎屋なども軒を並べて賑ふた相だ。維新以來寺院は取り拂はれ、妙義神社のみとなり、市街は一旦大いに衰へたが、妙義三峰の奇勝が、近來再び大いに世に知られ、夏時には學生や教員達が、夏期講習會を此の地に開いて、一時に滯在する者が三百人以上に上るも、菱屋と東雲館と云ふ二軒の旅館に其等の多人數を收容して、綽々として餘裕があると聞けば、山中ながら如何に旅館の壯大なるかゞ察せらる。

余が菱屋に着たのが午後一時、裏二階の一室で眸を放てば、關東平野は眼下に瞰下され、先刻通過した鐵道は、高崎市より松井田驛に連なつて、百足蟲の樣に走るのは汽車、東南に離れて遙かに白く見ゆるが前橋の共進會場な相だ。シカシ余は其等を委しく眺める暇が無い。一人の案内者を雇ひ、脚半甲懸けの草鞋ばきに身を固め、今日中に金洞山の絶頂まで登つて歸るのだから、忙しいこと夥多しい。寫眞機と、果物と、サイダーとを携へて直ぐに出かける。

妙義神社の石段を躋ると、華表の側の茶屋で、木の枝を直ぐに削つて、妙義山の燒印捺したステッキを賣る、直段を聞けば僅に三錢、一本買ふて杖にして先づ神社に參拜せんとすると、『マア之を御覽なさい』と指さゝる〻一大老杉、是は妙義七本杉の其の一本で、七百年以上の星霜を經たりとて、高さ三百尺、周圍四丈二尺八寸と書いた標札が傍に立つ。

老杉から更に百六十餘階の石段を攀ぢ躋ると、妙義神社の古色蒼然たる神殿、祭神は日本武尊で、畫も小暗き老杉の森の中に鎭座ましまし、打つ柏手の聲が、四方に反響して、天地の寂寞を破り、一段の神々しさを增す。其所を出て、杉林の中の間道

を横切り、清水の流れる巖陰の路傍へ出ると、案内者は、

『サア仕舞つた。直ぐ來ますから、暫時此所で待て下さい』

と言ひ棄てゝ一散に坂路を走り下る。如何したのかと聞けば、菱屋の店先へサイダーを忘れて來たのな相だ。無ても好いのだが、彼れは急いで駈け下つたから、暫時待つ間に四方の山々を眺めると、腰から上は山骨盡く露はれて、踞のぎした仁王の樣だが、半腹から下は、木々の紅葉がまだ盛りで、濃き紅ゐは燃るが如く、淡く黄なるは錦を織るかとばかり、餘りの美くしさに見惚れて、ボンヤリと立つ間に、案内者は早くも袋に入れたサイダー二瓶を脊負ふて來た。

更に十町ばかり登ると、山腹を拓いて葡萄園が培養せられ、路傍に一戸の茶店がある。縁側へ腰かけると、直ぐに盆に載せて來たのは、茶で無くて一瓶の酒を、コップに一盃ついである。山上の茶屋で梅酒を飲ませるとは豫ねて聞たから、『ハヽア之れだな』と合點して、コップの酒を味へば、味淋の中へ青梅を浸して、其の酸味と苦味を

秋山の
しみぢみ
をめでし
時は
さきつゆ
鎖へ
けり

沼田
海鶴

酒に含ませたゞけの物だが、渇いた喉には舌觸りが好いので、モー一盃ついで飲み、立つとき茶代を十錢置くのに、此家の亭主は、不足と思ふたか、但しは見附けなかつたのか御定まりの『有難う』を言はなかつた。

其所から上が七曲り坂、登る道すがら、今を盛りの紅楓を折りかざして、山を下り來る人に數〻ば逢ふ。坂は登るに隨つて眺望廣く、山々の紅葉が夕陽に映つて、何とも言へず美しい。偶ふ山を下る人に隨て來た一匹の黑犬が、余を見ると、忽ち歩を旋し、宛から一見舊識の如く、馴々しく前になり後ろになり、時には脚に戯れたりしてヅン〳〵山を躋る。案内者に聞けば、

『此奴は宿の熊といふ犬ですが、何時もお客樣に隨いて、山へ行くと、ビスケットやパンの御馳走になるもんですから、何方にも斯うでサア』

また四五丁登ると、路傍に一老婆が、木の枝から藥罐を吊し下げ、茶を煮て客を待つ。暫時傍らの木の根に腰かけると、此所は中の岳、乃ち金洞山の半腹で、山を脊にして南に向へば、右に金溪山の筆頭岩が、溪を隔てゝ筆の尖頭の如くに尖つてニヨキと立ち、左には白雲山が、頭上に落ちかゝるかとばかり突兀として聳え、頭を廻して背後を望めば、金洞山の坂路の頂上なる一本杉が、天を指して立ち、其の上に列なる山骨露はなる峯巒が、覇王樹の樣に並ぶ。案内者は一本杉を指して、

『彼地まで登ると茶屋があります。其れから第一石門まではモー譯はありません』

一本杉まで坂路を登り盡せば、成るほど其所に茶屋がある。此の杉も妙義七老杉の一で、殊に山頂にあるので遠く十里の外なる新町、富岡町邊りの汽車中からも望み見らるゝ相だ。宜なる哉其の下なる腰懸けに憩へば、南東には遠く赤城、日光、筑波の諸山が、淡く濃く雲際に峙ち、利根川の長流は蛇の如く、蜒蜿として山間を出で、關東平野の間に流れ、西北には甲州信州の山々が、重疊として波濤の如くに並び、西南は是れ關八州の大平野、青きは桑園、黄なるは稻田、黑く簇がるは村落であらう。茫漠として遙かに雲烟の間に連なる。下方は皆な紅葉の錦で包まれた山も、此所へ登れ

ば木は皆な落葉して、山は全然骨を露はす。試みに身を轉ずれば、茶屋の背後に、怪石奇岩の重なり並ぶもの、其の形の類似を以て名けて、柱の上に巨燈を載せた樣なのが燈籠岩、二つ並んだのが夫婦岩、人の帽子を冠りて坐せるが如きは惠比須岩など、風景更に奇を加い來る。此所で携へたる梨子とサイダーを一瓶平らげ、頭上に並ぶ奇岩を見上げながら、金洞山の半腹を一丁ばかり行 と、忽ち見る自然の一大石門、高さ十間幅五間の大アーチを爲し、門を過ぎて顧りみれば 門の厚さ三間、其れが全く一個の巖石から成る。恰かも何物か一大斧を役し、巨巖を削つて此の門を造つたかと思はれ、徐ろに自然の力の偉大なるに驚ろく。是が第一石門で、妙義の奇勝は是れから始まるのだ。

第一石門を過ぎ、更に巖角の間なる細徑を右に轉ずると、名を聞てもゾッとする蟹の横這ひといふ難所、古來登山者の爲に設けられた鐵の鎖に縋り、最初は巨巖の腹を渡り、次にはまた鐵鎖を掴んで巨巖の脊を攀ぢて登る。手若し一たび鎖を離せば、身は數丈の巖の下に落ち、忽ち粉碎を免かれぬ。今は一生懸命で、鎖を緊乎と握り詰め、馬の脊の樣な巖角を一歩づゝ踏み占めて、登り詰めると其所にまた第二の石門がある。第一石門に比べて三分の一ばかりの小なるものだが、其れを潜れば再び鐵鎖で、今度は縋つて降るのだ。登りは唯だ上をのみ見て恐怖の念も少ないが、降りには遙かに下方の蟯确たる巨巖が横たはるを見て、若し落ちたらばと考へると、覺えず肌に粟を生じ、忽ち眼が眩み相だ。

鐵鎖を下り盡して、ホッと一と息して兩脇の流汗を拭ひ、再び巖と巖との間の嶮しき細徑を辿り、左方に第三の石門を見上げつゝ、直ちに第四石門を指して登る。此所は門の高さ第一石門より低きも、幅は遙かに廣く、其地位は四石門中の最高所に在る。門を潜つて巖の腰を傳ひ、其の南端に出でゝ岩角に踞すれば、眼下の第一石門を右方の横さまに見て、恰かも一個の大石板を側面から見るが如く、其の一枚岩の内に、彼れの如き門があらんとは、實地を見ざるときは思ひもよらぬ。それに反して第二の石

門が、此方に向つて穹窿形に開けて立つ。更に左方を望めば、一段高き峯の巓に、動き岩、大砲岩、屏風岩、蟻のとわたり、虎岩、などが並んで、其所にも攀て登るべく鐵鎖が下つて見ゆる。更に其れと並んだ峯の頂上には、岩上にまた圓き岩を載せて、觸れば落ちんばかりに立つのが天狗の鏡岩と呼ぶ。其他にまだ四方の峯にも谷にも千狀萬態の奇巖怪石が、互ひに累々と重なり並んで、一々名を聞ても之を記憶するに堪へねば、渴いた喉をサイダーで慰さめ、梨子も殘らず嚙り盡すとき、

『旦那、葡萄園まで明るい間に降りませう』と案内者に促がされ、他かぬ眺めの後ろ髮、曳かるゝ思ひを辛抱して、巖と巖との間を降り、第一石門の外に出で、一本杉に歸れば、夕陽は既に沒し、葡萄園の茶屋まで、旅館から、迎ひが來た。

此夜菱屋に宿つて、晩食の後、下女が二階の緣側で、

『御客樣、前橋共進會のイルミネーションが見えますから、出て御覽なさい。』

と勸めたが、疲れて其れを見る勇氣も無つた。（明治四十三年）

利根の若鮎

柳櫻の錦織る、都の春も色褪せて、氣早の江戸ッ子は、喰つたかと問へば初松魚と合點し、聞いたかと尋ぬれは杜鵑と領解する新緑の時節、一たび歩を郊外に移せば、遠山々々の佐保姫は、霞の衣脱ぎ棄てゝ、時に殘んの雪の層も見せるあり。此の寒からず暑からぬ、一年最も遊ぶに樂しきとき、武州北崎玉郡羽生町の有志諸子から、東武鐵道線の新たに利根河岸なる川俣驛まで開通したるを機とし、船を長江に浮べて、堤下の四ッ手網に若鮎を漁どり、即席に料理して馳走すべければ、五月三日の日曜に、吾妻橋驛發の一番列車にて來れとの案内を受く。下た地は好きなり御意は好し。遊びと聞ては何時も二の足を踏まざる余、重ね返事に承諾して、約束の當日は未明に起き出で、牛込の僑居から眠い眼を擦りつゝ、車を走らせ、本郷壹岐殿坂を登るとき、朝日は正面なる上野の山から昇りかけしも、淺草を過ぎて吾妻橋を渡る頃、常には隅田川

を横行する十數隻の一錢蒸汽も、未だ何れも橋下に繫がれて、汽烟を吐く氣はひだに無し。枕橋を渡りて業平町を過ぎ、東武鐵道吾妻橋停車場に駈けつけたるは、午前六時前二十分。

前後して到着する市内各新聞社の舊知己新知己總て十五六人

羽生町から迎への爲に來りし某々二氏を東道として、汽車は薩摩守何がしといふだけ、櫻に緣ある白鬚や、鐘ヶ淵の停車場を瞬く間に過ぎ、北千住から先は、紫雲英の盛んに咲き出でたる田の面を左右にして走るに、頰冠りしたる老農夫の、口に喞へた烟管から、斜めに烟りを立ち登らせて、見上げる先の雲雀の行方に、淡く半輪の晝間の月を發見するなど、田舍の景色見るとして物珍らしからぬは無し。遮莫今朝早起した結果は覿面、凭りかゝりながら忽ち華胥の境に入り、草加、越ヶ谷、粕壁の諸驛は、何時通り過ぎたか白河夜舟『オイ君――どうしたのだ』、と搖り起されて眼を覺ませば、思ひがけ無く代議士の堀越寛介氏が、今日我等の一行が氏の居村なる川俣に遊ぶとてワザ〳〵此所まで來り迎へたるなり。之れより車中は一層賑かに、加須驛から先は、數日前僅に開通したる所、各驛の停車場は、建築未だ半ばなるもあり。一同は導かれて羽生驛に下車し、同町の主要物産なる青縞の製造地を見る。無地紺色の織染木綿、東京にては目くら縞と呼び、法被、股引、足袋等の原料と爲すもの、其製産地の本場

所は、此の羽生町にて、此所では青縞と稱し、一ケ年の産出額大約二百五十萬反、買繼問屋は二十餘軒あり。高橋辰五郎、鈴木文右衛門、增田清助等の諸氏は其の重なるものにて、青縞商總代吉田順夫氏は、實に今回余等の一行を招ぎたる會主なり。組合事務所に小憩して、青縞の種類を示され、染屋と機屋の工場まで案内せられたるも、余等は元來此の道には、矢張り目くら縞黨なれば、匆々にして過ぎ、羽生町から川俣まで、僅に十丁許りなれば、堀越代議士の宅まで歩してまた其所に小憩し、氏の家を出れば邸外は最早川俣停車場、其の後ろは利根河堤なり。河には渡津あり。對岸の上州もまた川俣村と呼ぶ。余等の爲に別に準備せられたる小舟を艤し、川俣にて新たに加はりたる有志と共に、一行二十餘人、一舟に乘り込み、漫々たる坂東太郎の長江を舷を叩きて放談しながら溯れば、風を孕む輕帆は舳艫相啣んで去來する彼方には、上毛の山々横さまに翠黛を曳きて、さながら美人の眉に似たり。上流に漕ぐこと約八丁許、河の左岸、所々に小屋を懸けて、中から大なる四ッ手網を垂れ、時々曳き上げて魚の有無を檢す。是れ昨今利根の河中に育ちつゝある若鮎を漁するにて、今後數日を過れば、鮎は盡く上流に溯ぼり、また此の邊りに徘徊するものなしとぞ。鮎の大さ二寸乃至三寸、殆ど白魚に似たり。而も多く漁するときは一小屋一日の間に數百尾を得ると云ふ。小屋の前を過ること四五回の後、利根河に架したる船橋の下流に至れば、岸上には紅白の幕を張りたる休憩所を設く。船を其の前に繫ぎ、上陸して中に入れば、卓の周圍に椅子を配置し、麥酒、日本酒は既に並べられ、やがて船橋に近い丸田屋から持ち込むは、潑剌たる鯉の洗ひ、肉尚ほ皿の中に跳るかと疑はれ、同じ鯉こくの椀盛りは、幾たびか舌を鼓するに堪へざらしむ。既にして若鮎のフライを運び來るに、今は珍――妙――絶――美――とあらゆる讃賞の語を並べ盡して、何か新しき種子を得んものと、近きあたりの網小屋に入れば、今しも老漁夫が曳き上げたる網の中には、柳葉の如き若鮎の、白く光りて小刀かと疑はれつゝ跳ね廻るに、漁夫は攪網を伸ばして之を掬ひ捕る。四ッ手網は、大にして方二間餘なるも、車を用ゐて輕く曳網を卷き

または緩め、網の上下に力を勞すること少なく、漁夫は隻手に烟草を燻らしつゝ、隻手自在に操縱す。一糸の網、一枝の竿、閑に風月を友として、人間また名淵利海の何物たるを知らざるが如し。日夜奔走に暇無く、席の煖かなる能はざる我が徒は、殊に漁夫の境遇の羨ましきを感じぬ。

同行の齋藤紫白子と共に、堤上堤下數枚の景を撮影し、午後は一行と共に車を驅り、船橋を渡りて上州に入り、館林に名高き花山の躑躅を賞じ、歸路は茂林寺の文福茶釜を觀て、渡津により再び河を渡り、午後六時四十分川俣發の汽車に乘れば、吾妻橋驛に着きしは九時半頃なりき。（明治三十五年）

葬から月叩き出す水雞かな　水魚

水魚止んで鶉啼きけり垣の外　同

九年母の色づく空や渡り鳥　同

多摩川水源探検記

東京市民の生命――水道の水

恐れ多くも宮城内の、日々の御飲料水や、御庭の池水を首として、東京全市の家々で、飯も炊き、湯も沸かし、顔も洗へば、洗濯にも用ゐ、朝から晩まで半時間も無くてはならぬは水道の水である。斯く貴重なる水が、近來兎角減り勝で、殊に兩降るごとに濁り易い。東京市民は年々増すばかりなるに反し、飲料水は年々減るばかりでは由々しき大事である。棄て置かれぬとて、東京市役所内に臨時水源經營調査委員といふが設けられ、數人の市參事會員や市會議員と、宮内省、内務省、農商務省、東京府、山梨縣、農科大學等の林業に經驗深き博士、技師等を顧問に請ひ、水道水源の多摩川上流に、今後施すべき方法を研究する爲、其等の一行が、愈々多摩川水源の山々を跋渉して、實地を視察することゝ爲た。

水道の水源――多摩川の流れ

東京市水道の水源は、武藏の多摩川の流れを羽村の堰から導いて、花に名高き小金井の櫻堤の下を流れ、東京市の西の端、淀橋村の貯水池に貯ひ、幾たびも沈澱ませて濾して澄した後、喞筒で汲み揚げ、鐵管で全市へ配るのだから、茶碗に一杯飲む湯でも、容易ならぬ費用と勞力が要るので、其の實際を知ると、水道栓の口を開つ放して、濫りに水を流し棄てるなどは、勿體ない事が悟らるゝが、今は先づ其の水道の水源なる、多摩川の流れに就て、略ぼ說明して置く必要がある。

多摩川といふ名は、全國に多く、世に六多摩川と稱する其中で、東京市水道水源は武藏の多摩川で、一に調布の多摩川と稱し、東京市中の道路普請に用ゐる多摩川砂利も、其の川岸から運び、夏季に都人士が多く出懸ける多摩川の鮎漁も、其の川筋に行くのだ。川は水源を甲斐の北都留郡の萩原山から發し、谷間の溪流數條を合せて、始めは丹波川と呼ぶ。甲斐名產の水晶を產する水晶谷も、其の水源の一である。

甲斐の丹波川は、武藏の西多摩郡に入り、日原川を合せてから、始めて多摩川と稱し、青梅町に至つて漸く關東の平原に出で、東京市水道取入れ口の羽村は、青梅の下流二里許りの地である。鮎漁の多摩川も、砂利の產地の多摩川も、千鳥の名所の多摩川も、總て青梅から下流、立川を經て調布村附近までで、畫にも歌にも名高き、月下に砧搏つ調布の多摩川は、其の邊りだ。其の下流は六郷川と稱し、東海道鐵道の川崎附近を流れ、羽田に至りて海に注ぐ。往昔新田義貞の二男義興が、數しば足利の大軍を破り、後に矢口の渡津で賊の爲に乘船を覆されて溺死したる芝居で名高い「神靈矢口渡」に脚色れたのもまた此の川だ。

探檢隊の出發――騎馬で檜木笠

中央東線の汽車で東京を發し、小佛や笹子の大隧道を過ぎて、甲州の鹽山驛に立ち

現はれたる面々は、尾崎東京市長、角田同市區改正局長、本多林學博士、江崎帝室林野管理局技師、菊地東京府技師等の外、市參事會員、市會議員、水道課長等、同勢總て十五六人、槍笠で馬に跨がり、武者振り勇ましく出發したのは、五月二十二日の午後だ。中に加はつた余に一句あり。

つはものゝならぶや甲斐の青あらし

日露戰役に從軍の功で、勳八等を授かつたといふ威勢よき馬子の從軍談を聞きながら、青梅街道を爪先上りに登つて、裂石といふ地の茶屋で憩ふ。其家の背後に、高さ二間、幅三間ばかりの巨石が、中央から眞ッ二つに割れてある。聞けば往昔此の石の間に生えた木が、數百年を經て、生長るに從ふて終に石を割たので、某老僧が其の木で佛像を刻み、一寺を創建して其所に納め、寺を裂石山雲峰寺と名けたのが、後に武田氏の祈願所となつた。裂石といふ地名は其れから出たので、雲峰寺は今も其の近所に在て、武田氏の威武を燿かしたる軍旗の「疾　如レ風、徐　如レ林、侵　掠　如レ火　不レ動　如レ山」と、孫子の語を書たのや、武田菱の馬標が、此寺に納まつてある相だ。時に茶屋で、皿に盛て出した茶菓子が妙だと熟く視ると、獨活の胡麻あひだ。

斯かる所へ注進あり。後れた一行の中で、馬が暴れ出し、荷馬は鞍を覆し　客には落馬したるもありといふ。スワ大變が起つたと、後方へ人を出さんとする所へ、更に追々到着する人々に由て聞けば、本多林學博士の騎つた馬は、昨日鹽山で人を嚙んだと云ふ小荷駄の荒馬に襲はれ、跳ね返して棹立ちになり、馬上の人はアハヤ落されんとしたが、馬術に堪能なる博士は、危ふく免かれて無事なるを得たるのみならず、小荷駄の荷物も、鞍は覆したが、破損は無いとの確報を得て、一同始めて安心した。

裂石山雲峰寺を右傍に見て、一昨年八月の大洪水に、山々崩れて溪流溢れ、甚だしく破壞して修繕僅かに成れる道路を行くこと暫時で、東京府有林裂石貯炭所あり。海拔三千四百五十尺と標記す。其所の背後の山頂から谷を隔てゝ空間遥に鐵索を架設し山上で燒きたる炭を其れに吊し下げ、七俵づゝ一時に運び下すに、宛から蜘蛛の糸に

羽蟲が懸りたる如くに見ゆるが、其の飛び來ること自動車よりも早い。此所の貯炭所からは馬車で鹽山へ出すのだ相な。

多摩川と富士川の分水嶺――寺尾峠

裂石貯炭所を過ぎてから、縣道を進めば柳澤峠に登り、更に右に轉ずれば大菩薩峠の間道となるのだが、余等は多摩川水源の東京府有林泉水谷に赴く爲に、兩の峠の中央なる間道の寺尾峠に躋る。道路といふは幅二尺位、馬の背の樣な峯續きを、馬士は馬の轡を握り、後方を顧りみながら、歩々相戒しむ。坂路は頗る急で、前なる馬の脚は、後なる馬の頭上にある。蟻の戸渡りといふ邊、左右遙に溪底を眺め、一歩を誤れば人馬ともに數十仞の底に落つるので、手に汗握りながら、鞍壺を緊乎と攫んで躋る。

山は躋るに隨つて眼界廣く、林間の躑躅は今を盛りと咲き出で、燃るばかりに紅を吐き、其の下には、早蕨のまだ拳を開かざるも多く、山蔭には山櫻の盛んに開くあれば、谷間には鶯の頻りに啼くもあり。俯せば下界の樹々は青葉して一面に綠りに、仰げば山上の木の芽は、未だ春信を傳へずして、枯木の如くに立つ。春か春にあらず夏か夏にあらず、山中の天地、氣候全たく人間に異なり。登り登つて山頂に達すれば、冷風面を吹て冬の如し。其所は正に分水嶺で、東は武州多摩川流域、西は甲州富士川流域だ。泉水谷製炭所から、數人の技手と、製炭工夫の小兒等數人來り迎ふ。傍に標示あり、寺尾峠　頂上海拔五千五百四十尺と。余等は裂石から一直線に二千百尺躋つたのだ。氣候が遽に變るのも無理は無い。馬を降つて石上に腰かけながら、途中の矚目を互に示し合へば、

夏山や五六騎つゞく檜の木笠　夢豪（江崎）

鶯も櫻も山の五月かな　竹冷（角田）

山の夏、櫻、鶯、ほとゝぎす　水哉

尾崎行雄君は和歌で、

西ひがし何所を見ても山なるを
　など山なしと人の言ひけん

と戯るゝに、好し、余もと、狂歌で

寺尾山、前後に小佛、大菩薩
　法華經と啼く鳥もありけり

と故事つけた。馬を還して、此所から一同歩く。

泉水谷製炭事務所――山上の一宿

寺尾峠分水嶺の東方、見渡す山も谷も皆な多摩川の水源、山は概ね赤裸々の禿山だ。谷間々々の渓流は、東に走つて丹波川となるのだが、何れも山梨縣の管轄内で、而かも其の一半は泉水谷と稱し、東京府の府有林で、他の一半の萩原山は、帝室の御料林だ。東京府有林は、去明治三十六年來、本多林學博士を顧問として、天然林を伐て炭に燒た跡へ、追々に落葉松や檜を植ゑて、風向きの宜き部分は、落葉松の伸びて六尺位となり、蒼く地面を掩ふ所も多く、今も年々苗木を植付けて造林中だが、御料林の方は、未だ造林に着手せず、山は荒廢に任せてある。其れは入會山とて、林木を伐り出すときは、必ず其の地方の人民に賣らねばならぬ慣習で、土人が買はぬときは、如何に造林しても收入を得る道が無い。で、帝室の御料林は、他にも全國に夥多しくある故、斯かる收益の望なき山林は、未だ手を下す暇が無いのな相だ。が、斯く水源の森林が暴れると、山は崩れて水は濁り、また泉源も涸れ易いので、東京市水道の爲には、何とか方法を考へねばならぬとは、何人にも先づ氣が附く。

此夜は一行皆な泉水谷山上の東京府有林製炭事務所に泊る。其所は海拔五千五百尺で、山上に鐵軌を敷き、事務所の傍から、下方遙かに裂石の谷底まで、鐵索を通じ、鐵軌の上を運んで來る製炭を、谷底へ下すのだ。鐵索の長さ千二百十六間、直徑半里

ばかりだが、歩けば三里ばかりの山路を、鐵索では僅に五分時間で達す。其の製炭を下方へ下すとき、反對に下方から米や味噌などを鐵索で運び上ることも出來る。で、此の人跡全たく絶へたる山間に、今夜は十五六人の客が來たのだから、豫め準備して寢具も食料品も遺憾なく運び上げ、尙ほまた數丁下方の谷間から、水を汲み上げて水風呂を沸かし、山間で採り立ての椎茸と蕨の馳走に、一同舌鼓打ち、圍爐裡へ炭を山の如くに焚て、夜の更るまで賑かに語り合ふ。翌る朝起き出れば、霜は高く屋根を掩ふて、地上の霜柱は深さ一寸ばかり立つ。殊に軒端の外に近く白玉の如き富岳は、霽れて朝日に映じ、波濤の如き連峰の上に、巍然として群を拔く。眼に入るもの盡く奇らしい。前夜の夜半に杜鵑を聞き、余は句あり。

杣小屋に聞きあかしけりほとゝぎす

水哉

製炭工夫は、妻子を伴ふて山間の小屋に住み、夫は炭を燒き、妻は苗木の培養に從ふ。斯かる家族は山々に一二組づゝあるが、其の小兒を敎育する爲に、事務所附屬の敎育場を設け、一里以上の山路を越て、毎日集まる兒童が三十人ばかりある。敎師一人、科目は尋常小學一年級より三四年級までを合級組織で敎育す。昨日寺尾峠まで出迎ひたるは彼等で、山路を上下するの敏捷なるは猿の樣だ。

牛首谷と水晶谷――山々跋渉

今日は終日山間を跋渉するとて、草鞋脚半で身を固め、泉水谷の丸川といふ地から牛首谷といふへ下る。其所は前年まで事務所があつたが、一昨年の洪水で、夜間に押し流され、數人の死者を出したる所。此の邊りは本多博士が指揮の下に、植ゑつけたる落葉松が最も能く生長し、此日も現に數十の人夫を使役して、苗を植ゑつけるに、十數人が一列に並び、高所より次第に地を堀り苗を植ゑつゝ下るは、早乙女の田植に似て居る。

谷を越れば御料地で、山蔭の水晶谷は、舊時水晶を採た所とて、今も氷砂糖の樣な

結晶石が、山腹に多く散在す。其等の峰を越え谷を過ぎ、上下數回してまた青梅街道の縣道に出れば路傍に人家あり。時は今五月の末だが軒端に桃花盛んに開く。＊

地で、茶店あり。就て午餐するに、例に依て生椎茸と蕨が旨い。

此れより後、丹波川の溪流に沿ふて下り、左右の傾斜極めて急なる山腹に、所々に往くこと數丁で落合といふ所に着く。此所は牛首谷の溪流と、高橋川の流れが落合ふて丹波川となる

木を伐り根を燒き、新たに畑を拓くもの多く、之を燒畑と呼ぶ。水源を濁すことの最も甚だしきは、主として此れだ。愕堂君之を見ていたく嘆き、

燒畠をつくる里人心せよ　愕堂

千代田の奥の水にごるなり

と詠み出ると、口惡き竹冷君は、一行中に疲れて跛ひく者あるを嘲つて、

水源を江戸のお方が足曳の山また山でおつかれのさま　竹冷

此夜は丹波山村の旅舍に宿る。此所は青梅街道中、稍や人家多き村落で、唯だ一軒の旅舍だが、本多、江崎兩氏の定宿とて、豫め準備して待ち、晩餐には蕎麥、朝食には薯蕷汁の料理が、一同の大稱賛を博した。

翌る日は丹波川沿岸を下り、更に親川といふ枝流の水源に分け入り、溪流の岸で、石に腰かけ、清水を掬んで辨當を喰ふ。此の美味は、トテも東京の紅葉館や帝國ホテ

ルでは味はれぬ。其所の水源に、近年檜を植ゑた東京府有林を視て、山を越れば、小袖川といふ溪流の岸に出づ。其の邊りの谷間に、姫うつぎ盛んに咲く。川の西は山梨縣、東は東京府だ。川の名も花の名も優美なれば、好材料ござんなれと、競ふて詠み出づ。

沼ならで誰か深山の姫うつぎ　人まちがほに咲いづるかな　愕堂

本をもれて落る日影や姫うつぎ　竹冷

姫うつぎ瀧のあほりにそよぎけり　夢豪

川の名の小袖も床し姫うつぎ　水哉

姫うつぎ都の風に吹かれけり　水哉

本多博士は、竹冷君が名けた見返りの紅葉に題して、

青葉をも尙ほ見返りの紅葉かな　如水（本多）

此夜は小袖川の口なる素封家酒井某氏方に宿る。晩餐に丹波川名產の山魚を、膾と椀盛にして饗せられた。

丹波川と多摩川――雨の爲に濁る

第四日目は、また丹波川に沿ふて下る。沿道は東京府管内で、道路平かに修められ人力車も走る。川水は水晶の如く澄んで、兩岸なる青葉の影を映じ、湛へるときは瑠璃一碧の淵となり、巖に激する飛沫は、白く雪を散らすかと疑はれ、窄く迫つた左右の山々の、蒼きが中を紆餘曲折して流るゝは、一匹の淺黄縮緬を曳き展べた樣だ。岸の巨巖の上に、長い竿を握つて山魚釣る漁夫が起つ。

途中小河内といふ地の溫泉には、浴舍二三戸ある。水に臨みて二階建の稍〻大なる家に憩ひ、一浴を試みるに、湯は滑かにして熱度低きも、夏時は暑を避け來り遊ぶの價あり。再び發して正午までに氷川村に着く。此所は日原川の丹波川に來り注ぐ所、

此所から下は多摩川といふ。村は山間の稍〻賑かな村落で、三河屋と呼ぶ旅舎あり。疲れたれば其家に宿る。

此夜また多摩川といふ題にて歌よむ、余が檜の木笠の裏に、一行總てに請ふて合作す。

大君のめし給ふ水と知らざらむ　愕堂
多摩の川邊にすめる鄙びと
石の上ふるきはしらず調布の　竹冷
多摩の川原にやまめ釣る見ゆ
にごりなき多摩の谷間の川水を　水哉
なゝての人のこゝろともがな

其の翌る日、雨を冒して青梅まで人力車、そこから汽車にて、東京に歸る。

（明治四十二年）

草津入浴記

二夕聲、三聲、白根神社の杜の邊りに啼く杜鵑に、曉の夢を破られ、耳を清ます枕に近く、藥師堂の鐘が、午前四時を報ずると間も無く、早發の客が、前夜に注文したる澁川行きの人力車、澤渡や澁溫泉行きの駕籠、輕井澤行きの馬など、早くも準備して旅館々々の店先に來り、聲高く呼び起せば、忽ちにして雨戸を開く音、蔀を上る音、ガラ〳〵と賑やかに、頓がて客の座敷へ帳場の番頭や女中の往來二三回ありて、會計も濟みだりと覺しく、縁側より押麿に乘物に乘り、宿の主人始め家の者大勢に、町端れまで送られて、威勢好く出發するは最も景氣好き客なり。乘物は有りながら、町端れまで空で曳かせ、宿の者も一寸店頭で挨拶する丈けなるは、歸り車か但しは同じ馬、駕籠を、廉價で談判したるらしく、股間の廢爛の治り切らざるを我慢し、脚の運びも緩く、全たく徒歩で出で立つは、旅費の殘りの財布の底、最早重からぬ客なる

可し。

忽ち聞く午前五時の時間湯を報ずる種々の鳴り物の中に、喇叭は熱の湯、鈴は松の湯、柏子木は白旗の湯なり。近く湯畑を圍んで鼎の如くに位置を占めたる浴場は、各各鳴物で浴客を招集すると、家々の客室から、浴衣の白きがゾロ〳〵と、左手に手拭またはタオル、右に柄杓を携へ、まだ昨今到着したるは元氣好けれど、十日乃至二週間も經たるは、股間、腋下など、激しく糜爛れて、歩行自由ならねば、股を廣げて家鴨の行列の如く、各自に平生入浴する浴場にと來り集まる。最も多き熱の湯は、同時に三百人ほども集まり、他の松の湯も大抵之に匹敵し、白旗の湯は百人位に過ぎず。浴場に集まりたる浴客中、身體の激しく糜爛れたる者は、滯在の久しきだけ知己も多く、他の人々之を劬はりて、暫らく傍に眺め居れど、自餘の者は、浴衣脱ぎ捨て、各各に、浴槽の傍に備へたる幅七寸、長さ六尺許りの板押つ取り、片端を湯中に入れ、一列に並んで、ハア、コリヤコリヤ、ドッコイドッコイと懸け聲勇ましく、調子を揃へて湯中を攪拌す。湯は熱度百三四十度、直ちに手を入れゝば忽ち火傷すべき熱湯なる故、斯く攪き廻して熱度を冷まし、兼ねて皮膚の感觸を和らぐるので、斯かる作業の總指揮者には、何れの時間湯にも、湯長、俗に隊長と名くる者あり。浴客皆な其の指揮に從がつて動止を定め、前の者疲れゝば、後の者之に代り、其間に隊長は、數〻柄杓を以て湯を自身の頭に注ぎて熱度を試驗し、大約三十分時間を攪拌したる後、最早入浴に適すると認めたるとき、手を拍て攪拌を制止む。此時の熱度は大抵百二十度、隊長の頭は一種の寒暖計にて、柄杓で冠り檢して、一度でも其の熱の加減を誤まることが無い。

今まで湯の中を攪拌はす用に供した板は、急に浴槽の兩端に橋の如く列ねて架け、板と板との間は二尺ほどづゝを隔て、浴客は其の板の上に行儀よく並び坐し、タオルまたは手拭を蔽ふたる頭を低く板の間に垂れ、直徑三寸、深さ三寸、柄の長さ五寸ほどなる柄杓を以て、槽中の湯を汲んで頭に注ぐこと大抵百回乃至二百回、是で先づ熱

湯中に入るも逆上して瞑眩する危險を豫防し、斯くして一同の準備が出來ると、隊長は正面なる時計の下に立ち、號令して曰く、『御準備が宜しければソロ〳〵下りませう』

『揃つて三分――』之れが一同浴槽中に身を沈めたるとき、先づ隊長が下したる號令である。湯は攪拌したりとも百二十度の高熱なり。浴客皆な極めて穩かに、一生懸命と爲て兩手を左右の板に懸け、戰々兢々として身を下して脚を槽底に着けたるとき、是から三分間は、決して自由の行動を許されざる命令に接したるなり。勿論一人にても身を動かして湯を煽れば、他の者は熱に襲はれて堪へ難くなるなり。實にや人間は斯かる場合に社會的の秩序を重んずる者なり。一槽の中、一回約五六十人の浴客、大官、紳商、車夫、馬丁、貴賤平等、上下無差別、盡く隊長の號令に服從して、唯だ其の顏を板の上に現はし、一號令ごとに、『オーイ』と一齊に叫んで、之に和するのみ。頓て一分間經てり。

『改正の二分――』之れが隊長の第二の號令なり。浴客はまた一齊に『オーイ』と叫ぶ。暫らくして『限つて一分――』と號令す。さア其頃になると、浴客は皆な顏色が火の如く赤くなり、口を開いてホー〳〵と大息するもあれば、齒を喰ひしばつて氣を張り詰めるもあり、一呼一吸、氣息次第に困しむ。隊長ジッと見詰めて之を慰さめ、『ハアチックリ御辛抱！』、浴客の顏色は益〻赤く、呼吸は愈〻荒くなり、最早堪へ難きが如し。然れども一人輕忽に動かば立どころに一同の激怒に觸れ、如何なる制裁を受んも知れねば、今は絶體絶命と覺悟して、次なる號令を待てば『ハア辛抱の仕どこだッ』と叫んで未だ上槽を許さず。最早眼も眩むばかりとなる一刹那、『サア、そろ〳〵上りませう』と叫ぶ頃には、既に號令が何と云ひしか耳にも留まらず、一齊に兩手を左右の板に懸け、ザブリッと音させるや否や、湯出蛸の如く赤くなりたる老幼一同の身體は、忽ち皆な板の上に在る。

熱湯に茄でられて、疲れ切たる浴客は、浴槽の傍なる茶屋の疊の上に上り來れば

茶屋の女は甲斐々々しく乾きたるタオルにて全身を拭き、浴衣を上から懸ける。客は暫らく此所に憩ふ間に、前に第一組の入浴に除りて、浴槽の周圍に立てる浴客中、また前と同じく板の上に列坐して柄杓の湯を被ぶり、『準備が宜しければソロ〳〵下りませう』から『揃つて三分――』『改正の二分――』『限つて一分』の號令の下に、第二組、第三、四、五の各組、入り更り立ち更りて、總て三百人に近き浴客が、盡く第一回の時間湯を濟ます頃、客は次第に元氣を恢復し、柄杓やタオルを携へ、中には此等を茶屋の女に托し、例の家鴨に似たる怪しげの歩行にて、各〻其宿に歸る。

第一回の時間湯を濟まして後、始めて朝餐に向ふが浴客日課の一なり。此地の浴客は、皆な自炊制度にて、最も贅澤なるは一室に一人の定雇といふ下女を使役して飲食を調理させ、然らざるは數室共同にて一人の女中を使役し、飯を炊ぐ、惣菜を調へさせる、火鉢に火を起す、室内を掃除する。鐵瓶の湯も沸いて居る頃、客は室に歸り來る。其等の客室にも、身體の未だ糜爛れぬ者は、三階とか二階とか、眺望の好き所、廊下の往來少なき所、或は便所の遠い所などゝ注文すれど、身體糜爛れて、歩行困しくなれば、成るべく下層の室にて昇降の苦痛なく、時間湯の湯槽に近く、便所にも近い所を注文し、斯くなりてはまた不潔も雜踏も決して厭ふ者無し。

雇女は大概數室懸け持ちゆゑ、給仕は大抵手盛りで、朝餐を濟ます頃、仕出し屋、牛肉屋、鳥屋など、更はる更はる午餐の準備の御用を聞きに來る。續いて濱物屋、果物屋、貸本屋、楊枝、齒磨き、手拭、綿などの小間物屋、郵便物を配達する宿の番頭など、出入往來甚だ頻繁に、中にも濱物屋や果物屋などは、多くは中年增の婦人にて、二三回も買物すれば、其後は慣れ〳〵しく室に入り、火の消えかゝりたる火鉢には炭をつぐ、湯の減りたる鐵瓶には水を注ぐ、室内掃除の世話までもする。此時客の態度を見れば、寢ころんで新聞を見るあり。腹這ふて小説を讀むあり。但し新聞雜誌など未だ此地に賣捌所無き故、特別に發行地まで注文せねば配達せず。故に最も重寶がらるゝは貸本なるも、其の脊負ふて廻る種類を見れば、多くは近年新刊の小説にて、中

には宮本武勇傳、岩見重太郎傳などもありといふ。之を外にしての客が、片膝立てゝ下を望むは、脚の爪を切るなるべく、股を覗いて綿を抑むは、糜爛の手當らしい。對手あるは碁を圍み、將棋を鬪はせ、對手なきは出でて大弓の稽古所に行く。

トットット――の喇叭、チリンチリンの鈴、午前九時に第二回の時間湯開始を報ずれば、浴客は例の如く入り慣れたる浴場に集まり、規定の如くに浴し了つて室に歸る。此時最早正午に近く、午餐濟ましての散歩地は、市街の四方を繞らす高丘の中に、南に藥師堂、北に白根神社、西方には金比羅社、賽ノ河原などあり。然れども歩行に惱むほど糜爛れた者には、大抵一室に閉居して、唯だ雜談に時を消すばかりなるも、流石に溫泉の効能は顯著にて、糜爛の爲に半身不隨なる者も、元氣は極めて旺んに、食慾も甚だ進み、長き一日を五回の入浴と、三回の食事とを以て、唯一の課業と爲す者多し。

土地は海拔四千尺の高所、四面は皆高山で圍まれ、僅に信州の輕井澤口、同澁溫泉口、上州の澁川口の三方に通ずる外は、遁げるにも隱るゝにも路の無い別天地なれば、世間のハイカラ風は未だ此土地に侵入せず。千年以來の溫泉地といふにも似ず、客の待遇法は依然として十七八世紀頃と變化なく、總ての客は自炊にて、席料、夜具代、米味噌、油代、湯錢等の名目にて賄ふ制度なれば、避暑客遊覽客の爲には、不便を感ずること多きも、無用の經費は極めて稀に、シカも費澤を好めば、料理屋も數軒あり、藝妓も二十數人あり。近年東京羽田穴守稻荷の分靈を勸請したれば、狐や猫の眷族にして、客の信心淺からざる爲、狸の樣なる腹を抱へる者も多しとぞ。浴客の中には此等の眷族を、更にまた根曳して鄕里まで、勸請遷座し奉るもありと云ふほどにて、遊ぶには却々不自由を感ぜず。シカシ浴客の大部分は例の時間湯に入て、一生懸命に治療を專門とする湯治客にて、短かきも三週間、長きは七八週間も滯在するが多く、盛暑の候、最も浴客の多きときは、一時に三千人を普通と爲すとぞ。

時間湯は、熱ノ湯、松ノ湯、白旗の湯の外に、三四町離れて鷹ノ湯と地藏ノ湯とあ

り。また旅館は大抵家々に内湯を備ふ。其他に時間外の共同湯には、綿ノ湯、脚氣ノ湯、瀧ノ湯など、其數甚だ多く、湯量は極めて豐富に、何れも硫黄泉とて、湯の底には黄色の硫黄を堆積し、湯は多量の硫酸を含み、其の味は酸味を帶び、久しく浴するときは、身體中の皮膚柔かき部分に糜爛を生ずるなり。然れども此所へ來ては、糜爛の出ぬ間は、浴客として幅が利かぬ。故に浴客皆な成る丈け早く糜爛れんことを望み、泥龜や鰻を喰つたり、遠く白根山に登つたりして、滋養や運動に力め、知己の間にては『まだ出ませんか、ヘイ最ウ氣ざしましたか、ソレはお目出度う御座います』と、糜爛の始まるを祝し、家鴨の如き脚つきで歩いて、始めて大いに幅が利くなり。

滯在一週間許りなる余は、糜爛も發ねば、幅も利かず、畫は山に登り、大弓を引き、夜は燈下で時間を消すに困しみ、毎日見るまゝを此所まで書きつくるとき、隣室に三味線の聲して、常磐津が始まる。聲が美しいので何所の美人かと聞けば、東京の御客樣で、旦那と御一緒なる五十歳許りの御神さんな相だ。（明治三十九年）

白根山の噴火口

海拔七千尺、上野信濃の二國を境し、去る明治十五年に大噴火して、周圍四五里の間、滿目山野の草木を盡く枯死せしめ、今も噴火口から斷えず熱湯を噴き、地下は鳴動して焦熱地獄を眼前に現する白根山は、此所草津の溫泉から、僅に三里半に過ぎず。一日の中に容易く往復し得ると聞き、折節草津に遊べる余は、松永聽劍氏と學生筒井某氏及び一井旅館主人の弟某氏と共に、八月十二日朝露を踏み分け「ブレモ」の二枚懸けと「イーストマン」の「コダック」との寫眞機二種を携へ、茹で鷄卵と握り飯とを腰にし、脚半、草鞋の結束いかめしく、萩、桔梗、女郎花など、今を盛りと咲き出でたる野分の間を、信州の澁溫泉に通ずる道路に依りて發足したるは、其日の午前八時頃であつた。

最初の一里許りは、坂路も急ならず、朝霧立ち罩めて、日光も激しく照り附けねば

一行何れも元氣よく、之の字形の坂路も、中央の捷路を突貫し、脚半の露に濡るゝを心地よしと樂しみしも暫時にて、野原盡き、左右に枯木のみ骨立する森林に近づけば、噴火の爲に投げ出されたる燒石の巨巖は、其所此所に横はりて、山路漸く急に、歩々次第に艱み、流るゝ汗は脊を浸たし、喉は渴きて、一呼一吸、フー〳〵聲を發す。路は馬の脊の如き山上を過ぎ、其の最も細き所、棧道を以て接續し、一歩を過てば、左右とも數百尋の溪底に落つべし、之を蟻のとわたりといふ。渡りて右方なる溪流の彼方、飛泉巖角に懸りて、直下數十丈なるを望む。常布の瀧と名くとぞ。早速三脚立て、小憩しながら鏡玉の内から覗けば、十丁餘りも隔つる爲に、眼に見ては立派なから、寫眞と爲せば、瀑は小にして針を懸けたる樣なるに失望し、振り返つて蟻のと渡りを望めば、後方から一群の旅客が、坂を登り來る光景、却て趣味あり。之を撮影して、徒勞ならざるを祝した。

再び前進を續くるに、日は頭上から照りつけ、坂路は益〻急に、山は背な白根山噴火の遺物とて、老樹の枯れて白く骨のみを現はすもの、四方遠近に林立して、また露しげき野分の千草の花を見るに由なく、喉は益〻渴くとき、忽ち水聲の潺湲たるを聞き、頓て幅五尺ばかりの溪流が路に横はつて走る。ヤレ嬉しやと駈け寄らんとすれば、一井氏後ろから之を制し、有名なる毒水なりとて、小橋の傍に仆れたる小石碑を指し示すに、近より見れば『此水毒あり飲むべからず、右高野長英先生の說』と彫り、下に松浦武四郎、一井善三郎と誌す。碑古り、半ば割れて横はる。聞けば往年高野長英が、上野から越後に越すとき、此所の山路を過ぎ、喉渴きて此水を飲まんとし、端なく水中に多くの硫黄の混ずるを見、自ら飲むを止めたる上に、俗人の知らずして飲み毒に中るを憂へ、偖は此水毒あり飲むべからずと敎へたるを、後年松浦武四郎氏また此地を過ぎ、長英の訓戒を不朽にせんと、此の碑を立てたるものとぞ。長英、武四郎の二氏、何れも幕末の俊秀なり。二氏なくんば、余の如く渴して此の水を飲み、中毒する者幾百人あるか計られぬ。古人が行旅匆々の間にも、公益の爲に意を用ふるの深

き、眞に感謝に堪へぬ。

折角水聲を聞ても、渴を醫する能はず、飲まんとすれば水から火が燃ゆるといふ餓鬼道の苦痛を眼前に感じつゝ、またも登ること十町許で、始めて清泉湧出するあり櫻清水と呼ぶ。熊笹の葉を曲げて、柄杓に代へ、掬で口に入れゝば、冷たきこと氷の如し。嗚呼甘露々々、漸やく蘇生の思を爲す。此所より後方を望めば、草津の市街は遙の下方に指點せらる。偶ゝ下方から一挺の山駕來る。中に一客一少女を抱く。ソコでまた三脚を立て、駕中の客に囑み、坂路を屈曲する所に憩を憩ましめ、草津の遠望を背景として撮影す。寫し了れば、客は懷中から財布を出しかけ、『時に寫眞屋さん幾何上げれば宜いですか』と、余が擧動が本職らしく見えたものと覺ぼしく、夫子大得意なり。名刺を渡して寫眞を寄贈することを約す。客は三州岡崎の人であつた。

山駕と、前になり後になりて、芳ヶ平の茶屋まで登る。此所から本道を尙ほ登つて岩寥山を越れば、信州澁溫泉に達するので、世に之を澁嶺といふ。が、白根山へは、此所から、左方の山中の枯木林と燒石との間に入るのだ。其の白根山は、最早近く前面に赤裸々の全景を、枯林の上に卓んでゝ見ゆる。少しく早ければ茶屋に入て午餐を喫するに、樵夫二人、茶屋の中で爐を圍み、榾くべて煖をとりながら飯を喫す。日影に靜坐すれば實に衣の薄きを覺ゆるのだ。余等は渴いたる喉を麥湯で醫し、忽ち一と茶釜飲み乾して、お代りを命ずるとき、戸外に牛三頭、信州から米を負ふて下つて來た。是れ見逃してはと、直ぐに飛び出し、茶屋、牛、白根山を混じたる景を二三枚撮ると、丁度また曇に寫した山駕が着く。此れも加へてまた一枚撮た。茶屋は茅葺屋根が半ば朽ち壞れ、棟の上に草が生ひ茂つて、寫眞で見ると、背後の山と屋根との區別が無い樣に見ゆる。

糧食を平らげて、腰の邊りの輕くなりしに勇を鼓し、愈々本道を離るゝと、最早道路らしきものなく、唯だ燒石の崔嵬たる間を踏で進むに、此日は、數日來稀なる好晴にて、他にも登山者數人あり、最早山上より下り來るに會ふ。忽ちにして濃霧濛々

として下方より掩ひ登り、五六間先きは全たく見えぬ。此れでは驟雨が來るか、然らぬとも山上の眺めは出來ざるべしと、一同大いに悄げて、暫らく枯木の根や巨石に腰かけて、動靜を窺ふ間に、濃霧はまた次第に綿をち切りた樣に所々より裂けて、雲間から青空を漏らし、頓て日光も射し來るに再び元氣づき、全山赤裸々にして一草木なき白根山を前面に仰ぎながら、斜めに半腹を攀ぢて枯林の間を行くに、前に一頭の馬あり、若き女馬士が轡を執て立つ。聞けば此所まで西洋人の女客を乘せて來り、客は山上に登り、馬は此所に待つなりと。馬士は年頃二十一二、黑々と齒を涅めて、瀧縞の半天に、盲目縞の股引、新しき手拭被れる姿、仲々趣味あれば、枯樹の下に馬と共に立つ姿を撮影さんと云ふに、『已れア小ッ耻かしい――』とて承知せぬを、一井氏切に說得して、漸く寫すことゝ爲り、馬士は手拭脫で帶に挿み、馬を横にしたる所を、コダックで寫し、斯くて路を螺旋形に取て、前に望みたる山の背後に出づ。

此の邊り、燒石に埋沒れたる小屋二棟あり。此れは十五年の大噴火前、硫黃を取つた所で、噴火の爲に埋もれ、當時工夫は逸早く山下なる萬坐溫泉の方へ遁れて免かれたるも、小屋は其後全たく廢業したのな相だ。小屋の下方に、瓢箪形の小池あり、此れは近く三十年に噴火したる所にて、他は其の以前より存したるも、噴火の爲に形も變はり、水も減りしとぞ。此の池を背にし、潰れたる小屋の背後の急阪を、碎けたる瓦の樣な燒石を踏み締めて、登り盡せば頂上なり。丁度摺鉢を起して二つ並べたる如く、今余等が立てるは、西方の摺鉢で、年代知れぬ最も古き噴火の跡が、今は細長き池を爲し、水色青く、東西五六十間、南北は其の半分ほどである。其の東に隣れるが十五年の噴火口で、同じく池を爲せども、蒸氣は濃霧の如く、斷えず池の面から立ち昇りて、水色を見認めることが出來ぬ。其の彼方の岸の上に登ゆる山は、前に余が女馬士を撮影せし邊りの上方に望みたる頂上と覺し。

余等は今、白根山舊噴火口の西岸なる頂上に在り。一徑糸の如く斜に西南岸の半腹を通じて、新噴火口に達し、湯の花採取の工夫數人、彼方から石油の空箱に入れて

荷ひつゝ上り來る。其の細徑を辿りて、下れば新舊兩口の間、小高き丘を爲して、其間二丁計りを隔て、新口の周圍は、皆な泥土より成り、噴き出したる泥土にて造られたる周圍の岸壁は、宛かも新運河の岸などにて常に見る盛土の如く、岸壁は出入不定なるも、周圍の全形は、立ち昇る蒸氣に掩はれ、明かに知る能はず。池の底は、熱湯の沸騰する音、囂々と轟き亘りて、物凄きこと言ふ可らず。然れども彼等湯の花採取者は、此の岸壁を攀ぢ上り、熱湯に近き邊りまで往來す。會たま彼方の山頂に登りたる學生らしき一團、石を懸崖の上より下し、激しき聲を發して坑口まで頻落するや、工夫等は大いに怒り、高く叫んで『馬鹿奴ッ、其樣な事をすると、山が暴れて大變だぞッ』と。彼等は山上にて惡戯するを甚だしく忌むなり。余は其所から再び舊坑口西岸の頂上まで戻り、更に四方の眺望を縱にせんと、導かれて地藏ヶ岳に登る。

地藏ヶ岳は、白根山の一部で、舊噴火口の西より北に、最も高く聳えたる頂上だ。普通の白根登山者は、新舊噴火口を歷巡する故、其の通行の跡、自然に細徑を爲せども、是より上は、平生全たく人の登らぬ所なれば、何所ともなく滅多登りに登るに、十五年の大噴火で、立ち枯れたる、栂、樅、落葉松などの、皮は盡く剝げ、唯だ幹のみ白く骨立するもあれば、其の幹も倒れて、半ば腐りつゝ地に横はるもあり。地上は、噴出されたる燒石にて、恰かも川原の如く、所々に虎杖の叢生する外は、殆ど青草無れば、足元は案外に心配なく、唯だ大丈夫と信じて踏みしめたる倒れ樹の、脆くも朽ちて、ポックリ脚を踏み外すこと數々なるのみ。漸く攀ぢて頂上に達した。

山を登る間こそ、熱くして汗は背に漲ぎりしも、一たび足を停むれば、冷風は刺すが如く山下より吹き上げ、嚴陰で無ければ堪へられぬ程である。總ての樹は枯れたる中に、此の頂上の崖に沿ひ、五葉松が、地に這ふて、横に伸びたのが二三株ある。其の外は山蜜柑といふ灌木と、千本杉といふ藻の樣な草とが、所々に虎杖の間に叢がる。山蜜柑と千本杉には、何れも黑く熟したる豆ほどの實が附き、採て食すれば、何れも酸味がある。此の高山植物の菓實は、外國人など好みて喰ふとか。一井氏の案內

にて、松永、筒井の二氏が、頻りに之を索むるとき、急ち足元から飛鳥の如く何物か飛び出すに、ビックリしながら一斉に叫んで、『アッ兎！　兎！』

松永氏が着たる蓑を脱で地上に敷き、坐して四方を眺むれば、嗚呼何等の雄大なる眺望ぞ。近く東方に、地獄の針の山の様な枯木林の彼方、白き泥土の間より蒸氣の立ち昇るは、先刻見たる白根山の噴火口にて、其の東方遙かに、青山糢糊として雲際に連なる諸山、比較的に近きは赤城山、其の背後なるは日光の男體山と足尾の庚申山である。更に頭を北に轉ずれば、溪を隔てゝ近く峙つは岩寥山、其の半腹に通ずる澁峠に、罌粟の如く小なるものゝ動くは、山駕と馬とである。駕は先刻山麓の芳ケ平で別れた人達ではあるまいか。其の西方の低地に、遙に白布を曳くが如きは、筑摩川で、長野附近の平野は、其の兩岸に沿ふて眼下に望まれ、其の彼方に、雲を摩して聳ゆるものは信州の戸隱山、其の彼方には信州と越中とを境する大蓮華、小蓮華の諸山まで皆な指點せらる。また近く眼を西方の脚下に運ばせると、山麓の溪間なる緑林の間から、蒸氣の立ち昇るは萬坐の溫泉で、白根の瓢簞池からは僅に三十丁に過ぎぬ相だ。更に身を南方に轉ずると、淺間山は近く御隣り同志といふ風に、白烟を噴きながら、呼べば答へ相にして立つ。其の彼方に、霧れたる日には甲斐の八ケ岳と駿河の富士とが、相駢んで見ゆる相だが、今日は雲に隱れて見えぬ。實にや是れ天地間の一大パノラマ、遠岳近嶺重疊として、大地圖を展げたるが如く、怒濤の起伏するが如く、抑もまた山岳を指揮して大觀兵式を行ふにも似て、壯大雄偉、物の名狀すべきものが無い。

斯かる宇宙の大觀、造化は久しく之を貪ぼり見るを妬むか、忽ちにして一陣の疾風脚下より起れば、山腹より、溪間より、白雲を吐き出すよと見る間に、雲は須臾にして山々を呑み去り、遠眺近嘱盡く白雲の幕に閉され了る。愴惶山を下るに、今は枯木林も、芳ケ平の茶屋も、常布の瀧も、雲に包まれて見えず。蟻のと渡りを過る頃、細雨蕭々と降て來たが、草津の町へ歸れば、空は霧れて、午後五時の時間湯開始を報ずる熱の湯の喇叭が、トットットットット――と響いた。（明治三十九年）

瀧壺探檢失敗記

探檢を思ひ立たる序幕

寫眞道樂を始めて以來茲に殆ど十年間、余は未だ今回ほど苦しい思をし、危險を冒し、而かも甚だしい失敗をした事は無い。其失敗談を自白して、後人の覆轍を踏まぬ樣に警戒とも爲し、且つは同好者の御笑ひ草ともせんと思ふ。で、先づ本文に入る前に、其の失敗地の地理から說明して置かねばならぬ。

參謀本部陸地測量部の二十萬分一地圖中、越後高田の部を見ると、上州草津溫泉から信州澁溫泉に通づる山路、世に草津峠または澁峠とも云ふ線路を、岩寥といふ山の半腹にしてあり、また其の山路に近く、琵琶池といふ湖水も見ゆる。が、實際は地圖と大分相違して、地圖の所謂岩寥山は、上州では三國山（ミックンジャマ）信州では横手山と呼び、實際の岩寥山とて、地圖の北方に、別に聳いてある岩

嘗山が即ちそれだ。また琵琶池も、地圖に示すほどな大きいものでは無い。然れども池は確かに琵琶の形して、山上に瑠璃一碧の鏡面を開き、また其の山路の溪流を隔てて、近く絶壁千仞とも云ふべき燕岩の奇勝が峙ち、溪流は更に下つて澗滿の大瀑布となり、上州信州兩國第一の壯觀を爲す。此の池と瀑とが、實に今回余が大失敗の舞臺である。夏の暑熱を草津溫泉に避け、硫酸と硫黃分の多い熱湯に刺激せられ、股間や腋下の爛爛を生ずるに避易し、去て山轎で澁峠を越す。三里登つた頂上の茶屋に憩へば、山下ではまだ單衣一枚で暑いといふ九月六日、袷襲ねで寒さに堪へかね、圍爐裡に梏さしくべて煖を取る。更に二里半餘りも下つて燕岩に達すれば、角間川の溪流を脚下に望み、溪の彼方は屏風を立てた樣に、懸崖は面に當つて聳え、絶頂には栂、樅など茂るも、巉巖絶壁直立する所、狐狸は更なり、蛇も攀ぢ登ること出來ねば、此の天然の要害を恃みて、古來無數の燕が、絶壁の半腹に巢を營む故、燕岩の名が出來たのである相だ。成程見上れば雲際遙かに、數百の燕群が飛び翔る。如何にも壯觀な

れど、前方の懸崖餘りに近く、此方の道路もまた山腹を穿つて所々に棧道を架たので、幾たび三脚を立てゝも、空と溪とが寫し難く、其内に細雨降り來り終に斷念して止む。其所から更に暫らく下りて琵琶池に達すると、池は地圖とは違つて、路傍に近く一町許りの地から起り、琵琶の形面白相なるも、雨で眺むることが出來ぬ。更に數町下ると澗滿の瀧道といふ榜杭が、路の左方に立てられ、瀧見臺までは三町許りと云ふ。生憎此時雨益ます紛に、股間の糜爛も甚だしく痛むので、遺憾の涙を飲で素通りにし、尙ほ二町許りで沓打の茶屋といふに着いた。此所で雨は稍や霽れて、始めて兩山の間から西方が開け、前面には最も右に妙高山、次に黑姫山と飯綱山とが、其の左に並んで雲表に聳え、左方遙かに戸隱の裏山が、雨雲の去來する間から隱見して、何とも言へぬ眺望である。が、朝來山路を六里ほど上下し、疲勞甚だしければ、是非近日再び登り來るべく決心して、終に鏡玉を使用せず、澁溫泉へ降つた。琵琶池と澗滿溪とを訪ふことは、此時から企てたのだ。

探檢失敗前の小成功

澁溫泉の津幡屋で、體に適した溫度の內湯に入り、草津の熱湯の疲勞が刻一刻に治ると共に、翌々九月八日の快晴を待て、まだ糜爛の局部は痛みを覺ゆるも、勇を鼓して愈いよ前日來の冀望を滿たさんと企て、元氣好き一人の壯丁を案內に雇ふ。幸ひに同宿の浴客東京の川邊某氏と、澁の人山本某氏など、同行すると云ふので、一行總て四人、余は「プレモ」の二枚懸けと、「イーストマンコダック」三號との兩機械を擔はせ、例より早く午發を了して出發す。

澁の市街を貫流する橫湯川の和合橋から、下流を望めば、澁、安代の兩溫泉は、接續して、浴舍長く連なり、上流には、町端の兩岸に、溫泉寺と天川神社との杉林が相對し、其上流には十町許りを隔つる山上に上林溫泉が見上げらる。和合橋を渡れば直ぐに阪路となり、路の兩傍には、澁市街の一部なる萱屋根の浴舍が櫛を並べ、市街は天川

神社にて盡き、暫時は傾斜の緩い石原路も、山神祠前の清き小川の流れから、急に羊腸たる峻坂となる。本來此の邊りは溫泉多く、地を穿てば何所からも湯は出るが、冷水は甚だ少なく、澁の浴舍では、冷水で顏を洗ふことが出來ぬ。口を漱ぐにも冷水は特別に注文して、飲料水から分けさせるのだ。で、山神祠前の清流と云へば、沙漠中でオアシスに會ふた樣に、行人は皆な口に含んだり顏を洗ふたりして喜ぶが例だ。此所から急坂を幾たびも曲り紆つて、之の字形を大約十回ほど繰返し、一里登つて沓打の茶屋に着いた。澗滿溪の觀望臺までは、此所から三町、琵琶池へは十町許である。川邊氏は坂路に弱りて、琵琶池行を斷念し、余等の歸り下るまで茶屋で待つ。

茶屋の前から琵琶池の南岸までは、澁峠の本道から行けるが、北岸には山を一つ越えて往く間道ある故、余等は先づ其道を行く。途中で材木を負ふた牛が、十頭ばかり、山路を登つて來るのに遭ふたとき、背景の連山が、雲の幕を去來させて、甚だ面白い圖と思ふたが、先を急ぐまゝ空しく過ぎ、山の半腹の雜木林を出ると、直ぐに池で、池水は清く澄み、鮒や鰻が游いで居るのも見ゆる。魚は何時から養はれたか知らねど、舟を浮べたことの無い池とて、皆な漁撈の厄を免かれ、安全に繁殖して居るらしい。池の形は全く琵琶に似て、南を頭に北を尾とし、南北最も長き所五町、東西最も廣き所二町餘り、岸にはゴロ〳〵と巨巖横はり、池の中間の狹く縊れたる所は半島を爲し、高さ二三丈の巨巖幾つとなく重なり、傍に老樹の枯死して骨立する所に辨天祠を安置す。岸を繞る樹石は逆まに影を池水に映して、宛ら油繪の如く、更に遠く連なり圍む山々は、去來の雲間から、忽ち見え忽ち隱れ、活動寫眞でも見る樣で、何とも形容し難い趣がある。池の西岸を傳ふて、北より南へ一巡し、大小拾枚計りの寫眞を撮て餘程得意となり、頓て道なき草中を漕ぎ分け、少しく登つて澁峠の本道へ出た。

峠の道路は前日馴染の所、最早脚下の溪底遙かに、鞏鞳と響く瀑聲が聞ゆれども、森林密に、溪深く、覗いて見ることも出來ねば、山腹の坂路を迂回して降ること約八町許りで、前日も見たる澗滿の瀧道と榜示した所へ着いた。此所は沓打の茶屋から二町

許り上だが、茶屋まで降つてまた昇るも徒勞なれば、人夫を遣はして、茶屋に待てる川邊氏に報せ、前に托したる荷物をも持ち來らせ、余等は岐路を二町許り降つて絶壁の上なる觀瀑臺に登る。

愈々探檢失敗の幕

澗滿瀧の在る所は、信州下高井部だ。是が上州、信州兩國第一の大瀑布といふのでは、舊時の領主松代侯眞田氏は、特に此所まで觀瀑の爲に來ることあり。で、此の觀瀑臺は、侯が命じて高地を平らげて設けた所な相だ。瀑は横手山と笠ヶ岳との間から流れ、燕岩の下を過ぎて西に走る角間川の上流で、後に澁溫泉の下で横湯川と合し、星川と名けて千曲川に注ぐのである。其の觀瀑臺から望めば、十町許りの間の溪谷を隔て、兩山の絶壁天を摩して峙つ間から、飛泉直下、高さ三十丈、幅五丈の大瀑、恰かも積雪の崩るゝが如く、また綿を拋つに似て、壯觀言ふべからず。しかし寫眞の鏡玉から

覗けば、距離が遠い爲に、其の壯觀を目で視る樣にはドウしても寫すことが出來ない。去りながら距離は十町許りでも、溪底は絶壁懸崖の下に在て、密林深く封じ、翼なきものはトテも瀑布近く進み難い。時に時計を檢するに正に三時、案内者に聞けば、瀑壺は尋常人は往き難く、道路は無論無い。が、炭燒き夫は時々通ふ故、モー少しく西へ降れば、細徑は有る相だ、といふ。此時日光は背後に在て、瀑を寫すには光線甚だ好い。で、『折角此所まで來て、瀑壺近く踏み込まぬも殘念だ。此所一番奮發して、溪底まで降り、瀑壺に臨まう。ナニ直徑十町、三倍と見ても一里に足らぬ。股間の糜爛は未だ治らぬとも、本來山間で生れた男だ』と、好奇心と冒險心とに驅られて、愈々瀑壺探檢と出懸けたのが抑も大失敗の原因である。此時に『自分はトヲも往けぬ』と斷念して、別れて歸途に就た川邊氏が、先見の明には後に感服の外無かつた。

偖余等三人は、懸崖の緣を傳ふて、暫時西方に降り、辛ふじて山の半腹に人跡を見出し、栢、栗、などの生ひ茂る密林を掻き分け、糸の樣な細逕を二町許下りしに急

ち其の人跡を失ひ、何方向いても密林の中で、瀑が何所にあるか、トンと知れなくなつて了つた。が、脚下に溪川の流るゝ聲が聞ゆるから、溪底まで降りて更に流れに隨て遡つたら、瀑までは往けるだらうと、藪の中を掻き分け掻き分け、ひた下りに下れば、成程溪流に達したが、急湍は巨巖と急巖との間を走り、藥研の底の樣なる流れはトテも岸に沿ふて遡ることが出來ぬ。據なく今は、亂暴にも流れに隨ふて藪の中を掻き分けて遡るに、荆棘叢がり生じて、手も脚も刺に傷つき、血だらけとなり、其の困難は何とも名狀し難い。案内者は先になり、林中の巨巖の上に立ち、彼方此方を眺めては、進路を定め、余は其の後に、山本氏は更に余が後に、三人魚貫して、五歩躊り三歩降り、樹根に縋り、巖角を攫み、餘りに困しいので幾たびか探檢を中止せんとしたが、折角此所まで來て、空しく止むも遺憾なりとて、一時間餘りを此の密林中に煩悶して、漸くして、瀑の上半部を近く山蔭に望み見る所まで漕ぎ着け、ホット一と息し、脚元の熊覆盆子が、深紅に染めて熟したるを摘みて口にし、舌を鼓して賞味しながら、更に進んで愈〻瀑に近き溪流の岸に達した。見上れば澗滿の大瀑布は、銀河の九天より落ち來るが如く、半空より注ぎ下るが、半部から下は、尙ほ前面懸崖の蔭に隱れ、其の瀑壺から再たび屈折して、第二の瀑を爲し、兩岸なる巨巖の間に、また第二の瀑壺を爲し、瀑壺の深潭から、溪流は臥牛の如くに横はる巖と巖との間を奔る。

今は第二の瀑壺の岸に着たが、山本氏は少しく遲れたれば、待ち會はせんと、余は巖上に腰懸け。

『荷を卸して果物でも喰べようでは無いか。』

と言ふても、忠實なる案内人夫は、

『モ一つ懸崖を躋つて大瀑布の下へ往きませう。』

と言ひながら、大小二種の寫眞機を肩に負ひ、余が脱たる羽織と果物の信玄袋とを腰に着け、尙ほ鉈、胴亂などをも身に纏ふて、猿猴の如くに溪流中の石上を渉り、股まで水に沒して彼方の岸に越え、頓がて懸崖を攀ぢ始めたかと見る間に、如何にしけん

足踏み外し、アッと言ふ間に瀧壺の渦卷く潭中に沈んで仕舞つた。南無三――大變が起つたと、手に汗握る一刹那、彼れは幸ひに顏を水上に現はし、早くも急流に押し流されて、前に渉つた巖の間に泳ぎ着き、身は巖上に躍り上がつたが、肩にした寫眞機の革箱は口を開いて、取枠やヒルムが見る間に流れ去るが、之を拾ひ上る暇があらばこそ、先づ〳〵人命に異狀なきに安心し、扶け上げて介抱すると、多少の水を飲だらしいが、元氣なる彼れは、全身濡れながら、殊勝にも、

『イヤ機械を痛めて何とも申譯がありません。』

と陳謝して居る。却々それ所で無い。先づ怪我が無くて結構だと、衣服を搾り、機械を整理し、檢め見ると、機械は勿論一切の附屬物は水に浸され、琵琶池の寫眞も、未使用の乾板も、盡く〳〵廢物となり、取枠とヒルムの外、彼が腰にせる鉈、胴亂、煙草入れなども、皆な流れて了つた。今はモー萬事休す。幸ひにまだ殘つて在る果物を嚙つて腹を慰め、時計を檢すれば最早五時半、日は既に傾いて、是からまた前の密林を攀ぢねばならぬ。況して人夫は全身濡れて、冷氣想像するに餘りあるので、最早大瀧壺を覗く勇氣もなく、ソコ〳〵に歸途に就て、再び荊棘の間に煩悶しつゝも、來りしときの經驗に馴れて、餘程無益の盲動を減じ、辛くも澁峠の本道に出で、例の之の字形の急坂を下れば、最早日はトップリと暮れ、疲れた脚は幾たびも石に躓づき、澁町に近づいた頃、前方から余等を迎ひの二個の提灯に會ひ、漸やく蘇生の思ひして、宿に着たのが午後の八時。

此の失敗の爲に、澁から歸京の道すがら、長野、松本、諏訪、甲府と歷巡しても、機械の破損で、其後は終に一枚の寫眞も撮れなかつた。

（明治三十九年）

巖角や松に抱かれて咲く躑躅　水哉

山水行脚

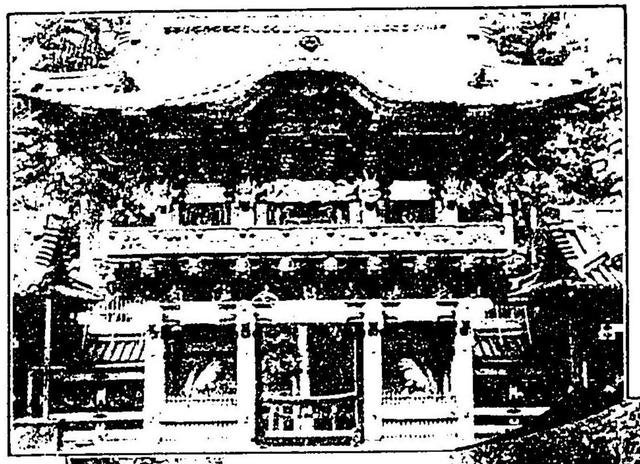
日光足尾記

滿目綠野の汽車の窓

節は梅雨に近く、兎角雨勝ちの天氣も、六月五日の朝から霽れたれば、午後一時の汽車にて上野を發す。道すがら汽車の窓から眺むれば、農夫の忙し相に麥を刈るあり、田を耕すあり、早きは既に早苗を植る者あり。頓て左に赤城妙義の諸山、右に筑波の翠巒を望みながら、利根川を渡りし後は、覺えず華胥の境に入り、睡り覺れば最早宇都宮なり。其所から汽車を乘り替へ、綠蔭幽草の間を北に走ること一時間半、日の西に傾く頃、今市邊りを過るに、老若の女の正しく列を爲し、早苗を植る者多きを見て

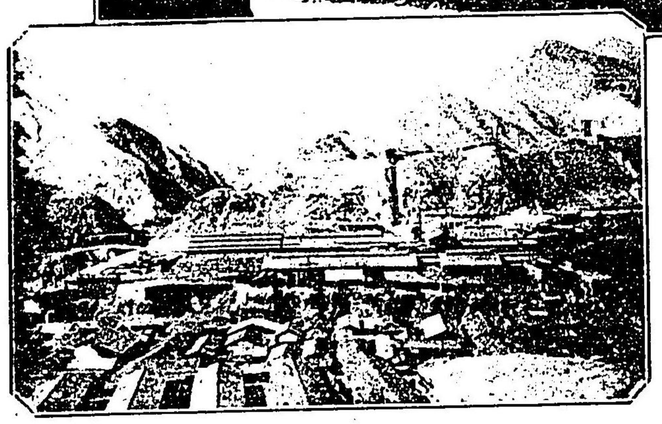
早苗さす母のたつきのせはしさに
乳よぶ兒さへしばしまつらむ

日光と足尾



日光陽明門

日光の神橋



足尾銅山

徹夜聞き明かす日光の杜鵑

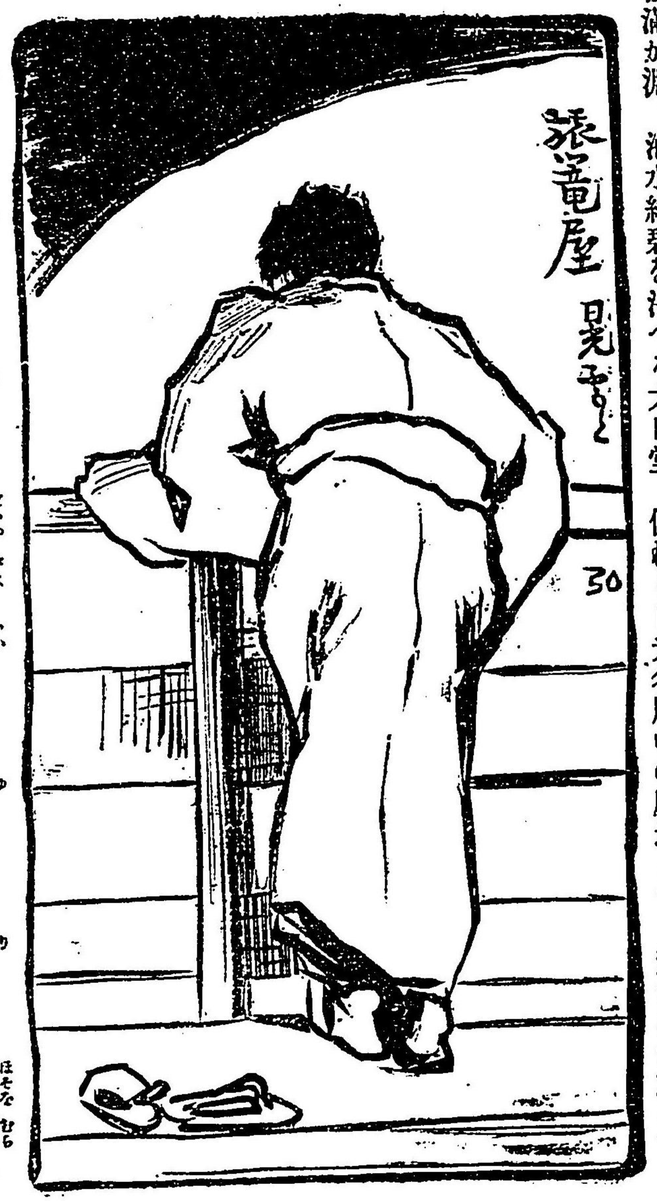
黄昏に日光に着き、小西旅館の別館に投ず。館は神橋の傍なる山の半腹に在り。日光全町を瞰下し、大谷川の清流は石に激して、斷えず驟雨の來りしかと疑はる。此夜市中を散歩するに、町の兩側に引ける家々の水道は、鐵桶の口から清泉を噴き出し、水力電氣に由る電燈は、戸々の樓上樓下に輝き、那邊の酒樓にや、絃歌涌くが如く聞ゆ。宿に歸りて蓐に就けば、一睡の後忽ち溪流の水聲に夢を破る。時に杜鵑頻りに啼く。聞くを樂しんで明け方までまた睡る能はず。

二荒山ふもとの宿に旅寢して
よもすがらきく山ほとゝぎす
大谷川ふけゆく夜半の水の音を
雨かと聞けば啼くほとゝぎす

翌る朝は、中禪寺へ登る客の多きとて、四時頃から雨戸を繰明ける音騒がしく、頓て樓婢は朝湯の沸きたるを報じ來る。今は空しく蓐上に臥すに堪へず。起きて浴し來り、樓欄に凭りて眺むれば、曉色模糊として遠山を罩め、近く大谷川の架橋を渡りて、境内の散歩に赴く者、又は山輿に乘りて中禪寺に登る者、鐵軌の上に曳く牛車の足尾銅山に向けて日用品を送る者、偖は足尾の製銅を運び來る者など、陸續と連なる。

空間を走る鐵索の貨物輸送

日光の結構は今言はずもがな。華嚴、霧降りの瀑布の壯觀も、世間には最早お馴染多し。唯だ足尾の銅山は、鑛毒事件の泉源として、其名既に天下に高きも、足其地を踏む者未だ稀なり。今眼前に其銅山に通ずる鐵軌と、往復の貨物とを見て、元來何所を當てに出たる旅にもあらねば、其の銅山を見んとて、人車に乘て發す。道は大谷川に沿ひ、翠色滴るばかりなる風致林の下、東宮御所の裏門前を過ぎ、奔湍巖角を噬む



含滿が淵、池水紺碧を湛へる大日堂、何れも日光名所中の勝地とて、幾たびか車を下りて賞しつゝ、行くこと一里にして大谷川と別れ、また行くこと一里にして細尾村に

達すれば、當面の山嶺巍然として峙ち、鐵軌は此所に盡きて、足尾銅山の出張所あり。此所から山上まで太さ一握程の鐵索二線を架し、一線は送り去り、一線は送り來り、水力電氣にて斷えず循環し、線は一町許づゝ隔てゝ舊式の鐙に似たる鐵籠を垂れ、籠中に貨物を結び着けて送れば、材木、米、味噌、骸炭等、重量四五十貫目宛の貨物は、半空に吊下りて、見る間に山上に送られ、それと反對に精煉したる銅柱は山上より陸續送り來り、遠く望めば凧の絲を曳いて天半に飛颺するが如し。聞く所によれば、銅山坑夫の中には、此の鐵索によりて山上より山麓まで往來する者ありといふ。若し過つて鐵籠中より脱け出れば、身は數百仞の谷底に墜ち、微塵と爲て碎けるの外無きなり。聞くだに身の毛の立つを覺ゆ。

細尾峠特有の慈悲心鳥

細尾より山上に、人力車通ぜず、行李を人夫に負はせ、徒歩して坂路を攀るに、燃ゆ

るばかりなる躑躅所々に咲き出で、日光名物といふ慈悲心鳥はポポポー、ポポポーと鳩の如くに叫び鶯は谷間に尚ほ老を囀ち、時鳥もまた山を横ぎつて啼き渡り、時は今春なるか將た夏

なるかを疑はしむ。坂急にして呼吸迫り、一歩一喘上ること一里、漸くにして絶頂に達するとき、會〻雨急に來る。携へたる洋傘一本にては、凌ぐ能はず。山上の茶屋にて雨合羽を買ひ、身に纏ふて山を下ること一里、麓なる神子内といふ所に到れば、また銅山の出張所あり、此所にて神子内川の流れを堰して水力の發電所を設く。細尾峠の鐵索は此の原動力にて廻轉するなり。此所から足尾まで二里、また鐵軌を敷設し斷えず馬車を往復す。其れに乘りて赤倉町に赴く。赤倉町は銅山事務所の在る所、本山と稱す。沿道所々に山の背後より鐵索を通じて、貨物を運ぶ。其他にも各出張所の間は、電話を架し、沿道の工場は電燈を點ず。神子内川と渡良瀬川の合流する所、路は三叉形を爲し、上流は赤倉の本山に達すべく、下流の方は足尾町より、通洞、小滝、簀橋の各坑場に赴くべし。此邊各地に散在する部落は、皆な銅山の爲に山間の小都會を爲し、古河政府の版圖に屬する別天地なり。

山中の別天地足尾の銅山

稱して足尾といふも、其の内には神子内、赤倉、足尾、澤入、小滝等の部落に分れ、中に足尾町最も古く、往昔の鑛業は此所のみなりしも、近世古河市兵衛氏の所有に歸して以來、赤倉なる有木の坑場最も盛大となり、其所を本山と稱し、事務所、倉庫等を置く。事務所は庶務、調度、工務等の各課に分つ。近來鑛毒豫防の設備を嚴にし、各坑場の製煉所も其所に集めたれば、赤倉の繁昌は足尾本町を壓し、市街は赤倉、上間藤、下間藤、向間藤等に區劃し、小學校、病院、銀行、出張所、寺院、劇場等盡く備はる。山間とは云へ、日用の必要品、一も缺くる所無し。事務所には知友稲田周之助、大神壽吉、清田貞吉等の諸氏あり。導かれて先づ本山の坑場に採鑛、運搬、選鑛、製煉等の作業を視、更に鑛毒豫防工事を見る。工事は山腹の崩壊を防ぐ土砂捍止あり。流水に混ずる鑛毒防止の爲の沈澱濾過の兩池あり。烟突より飛散する鑛毒を防

止する脱硫塔あり。鑛石の破片と、沈澱池中の汚泥とを棄つべき堆積場あり。何れも規模の壯大に驚かる。翌る日はまた導かれて馬車を驅り、通洞と小瀧との兩坑場を視る。採掘、選鑛の順序は、各地とも大同小異なるも、小瀧は最も新式の機械を具へたり。

坑場の設備は、一言以て之を蔽へば、世界最新式の機械と技術とを應用し、坑中より掘り出す石塊は、運ばれ、碎かれ、淘汰せられ、精煉せられて忽ち銅柱と爲るなり。而かも其壯觀は、壯絶快絶と言ふの外なし。之を細說するは專門の技術に屬し、門外漢の能くする所にあらず。

滿山禿赭の鑛毒の慘狀

足尾と云へば早くも鑛毒と解せらるゝほど、世間に名高き山內の流毒は、近來嚴重なる鑛毒豫防命令出で、其れに由る設備の整頓によりて防止するに至りたるも、過去に於る鑛毒の飛散と、山林の濫伐との爲に、見渡す限りの山上山下とも、盡く草木を絶ち、土砂崩壞して空しく骨立する有樣は、恰かも人身の皮膚剝がれ、血肉脫落したる髑髏の如く、一見慘鼻に堪へざらしむ。是れ精煉の爲に空中に飛散する炭煙は、中に硫黃の毒を含み、四方に散布して植物を枯槁せしめたるものといふ。況して精煉用の燃料として、總ての樹木を濫伐したる結果、益〻山野を不毛と爲し、爲に一朝猛雨ある毎に、忽ち氾濫の害毒を逞くせり。近年農商務省は、此等の硫毒を防ぐ爲に、煙の飛散を禁じ、土砂の崩壞を防ぎ、礦石淘汰後の汚泥は、一々洗滌濾過して淨水と爲すにあらざれば流下せしめず、故に今後はまた前日の如き慘害を防止し得らるべきが如し。

足のある達磨の跋扈

足尾山中に棲息するもの、鑛業の事務員坑夫を併せて約一萬人、之を目的として各

種の商賣を營む者また約一萬人、而かも祖先より子孫に傳へて、此地に永住の計を爲す者は甚だ少なし。其中に、足尾本町には、十數棟の土藏あり、また稍〻壯大なる旅館妓樓等あるも、赤倉町は、創設未だ久しからねば、家屋は皆な粗末にて、多くは一時凌ぎのみ。幸ひに冬間も積雪稀なる故、一時の出稼ぎ人には之にて足るべきも、其の出稼ぎ人の大部分は、男子は坑夫、女子は達磨と呼ぶ賣淫婦なり。而して坑夫の働くは多く彼等達磨を買はんが爲なるを思へば、足尾の鑛業は達磨にて持つと云ふを得べし。余戯れに歌ふて曰く

足のある達磨の多き足尾町
溜めし御足は皆なお賽錢

實に數千の坑夫は、日々勞働の報酬を達磨に投じ、達磨もまた其の得たる錢を懐ろにして鄕里に歸る者稀に、多くは別に情夫を設けて其れに費やし、足尾の通貨は轉々して永く足尾の外に出でず。是れ何れの所の鑛山にも普通の事ながら、淺ましとも淺ましき境遇なる哉。

愚なる哉寫眞禁斷境

足尾鑛山を一巡したる歸途、山を越れば直ちに湖水に棹さして中禪寺に詣づべきも、雨に妨げられて果さず、再び細尾峠を越えて日光に歸り、翌る朝東照宮と二荒神社を拜す。案内者を賴みて一々説明を聞かば、陽明門の構造や、眠り猫の彫刻にも半日を費すべけれど、豫ねて知りたる境内とて、散歩がてらに巡廻しながら、二三の寫眞を撮らんとするに、神社も、寺院も、拒みて寫さしめず。是れ境内の尊嚴を減ずるが爲にもあらず、また秘密の漏るゝを憂ふるが爲にもあらず。畢竟錢を出せと云ふのみ。此地の如く世人の多く來り遊ぶを望むの勝區は、寫眞などにて世間に紹介せらるゝこそ絶好の廣告なるべしと思ふも、拒まれては詮すべなく、匆々歸りて裝を理め、直ぐに汽車にて東京へ歸る。其間の往復時間、總て三晝夜なり。（明治三十二年）

房總キザ栗毛

燒くが如き日々の暑熱に、煮らるゝ樣な思ひして、何所か風の冷しい靜かな所へ、一二泊がけの旅行をと心懸け、八月四日の朝まだき、寢床の中で新聞を見ると、此頃から房州館山灣内に、數百頭の鯨が入り來り、漁夫は其の退路を塞ぎて、毎日數十頭づゝ捕獲すとの記事あり。之れは妙だ、余も出張して二三頭捕へ、硝子瓶の中へ入れて東京へ土産に持ち歸らんとの大志を起し、幸ひ今日は土曜で、兩國に川開きの花火がある筈、それを見てから直ぐに房州通ひの汽船に乘らんと、朝から準備に取りかかる。博文館の同僚諸子から『君は鯨を金魚と間違へて夢を見て居るので無いか』と笑はれたが『ナンの僕はピン〳〵と跳ねる鯨を鏡玉の中に入れ、寫眞にして持て歸るのだから、夢に鯨鯢を撮てピンと聲ありとでも云ふて僕が意氣込みを壯んなりとして呉れ給へ』と、法螺と駄洒落で出懸けぬ先から、キザ氣澤山。之をキザ栗毛の發端と

爲す。

夕暮から兩國の方で斷えず打揚げる花火の開く音、ポカンとして編輯局の樓上から眺めても、魂は既に房州に在て此に在らざれば、見れども碌々目に入らず、旅行案内と頸ッ曳きして、午後十二時に出帆とあれば、附近の茶屋で一ト眠りと、九時過る頃車を走らせ、越前堀なる東京灣汽船會社前の旅店に着くと『入らッシャイお泊りですか』『否、僕は船に乘るのだ』『それでは向ひで今出る所です』『ナニ十二時出帆だらう』『イ、エ十時です』。と言はれて一ト度はショげ、一ト度は喜ぶ。ショげたるは旅店にてへこまされしが爲にて、喜べるは汽船に乘り後れざるが爲なり。

切符を買ひ、艀に乘り、大川を漕ぎ出で本船に移る。上流からは今や川開きを濟ました屋根船が、花提灯を舷側に吊し下げ、新橋邊りの藝者を伴れしと覺しく、絃歌を乘せて囃し立てるは、之ぞ眞正の浮かれ騷ぎと言ふなるべし。それ等を見向かぬ所は大人らしけれど、常より多き乘客の老若男女、鮨を押した樣な中に、汚れた洋服を着

て寫眞機を横たへ、上下なしの室内で、人先きに高所の一隅に陣取たるは、榜から見たらば余ながらキザな奴と思はれたらう。

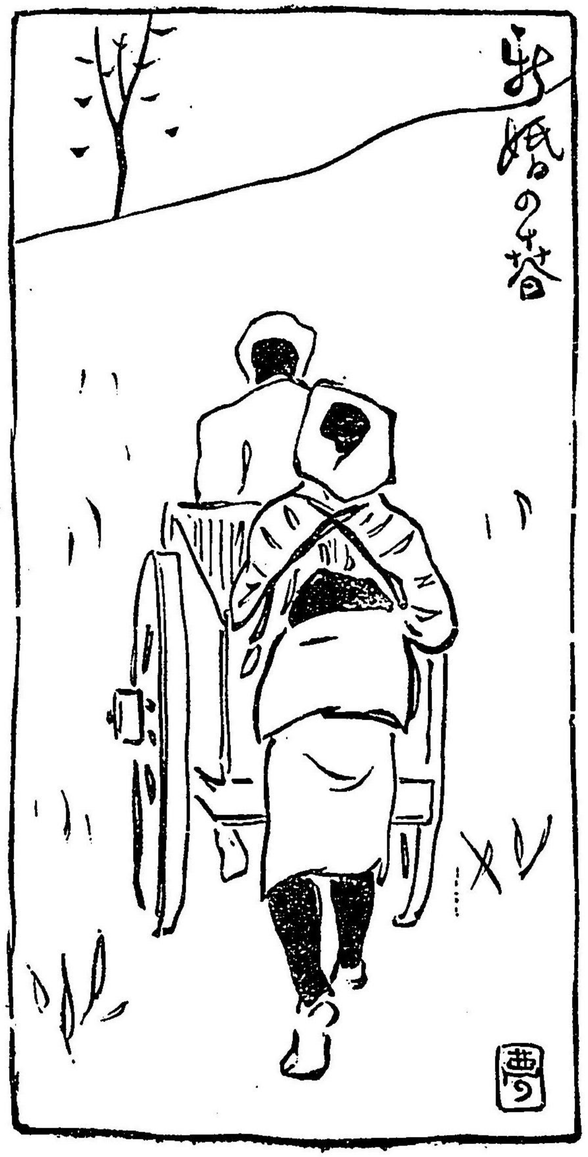
蒸し熱き上に込み合ふて、まどろむ間さへ夏の夜の、蚤蚊の襲撃に困しめられ、彼方へゴロリ、此方へゴロリと、轉顛反側する間に、夜は早くも明けて、金谷勝山邊の沖からは、陸上の山も樹も岸邊の岩も明かに見ゆるに、モウそろ〳〵鯨が見え相なものと、新たに乘り込だ客に聞けば『成程鯨は此頃夥多く這入て來たが、昨日までに殘らず捕り盡しました』と云ふに、オーヤ、オーヤ、と落膽して暫らく開いた口が塞がらないが、兎に角汽船の進行に任せ、那古、北條の町々を、船中から眺め、館山に上陸して海岸の一小樓に登り、朝飯を喫べながら亭主に尋れば『樓前の灣内に入り込んだ鯨の數は、總て四五百頭で、毎日波の上に頭を出して跳ね廻るのを、片端から捕て捕て昨日までに殘らず捕り盡しました。見なさい、彼れも鯨、此れも鯨』と、海岸の砂原や、舟の中に切り刻んだ黑き物を指さし示し『まだ切らない全形の鯨は、向ひの小屋に澤山あります』と言ふに、樓を下りて其所に行けば、成程有る有る。丈け九尺位で、鮫の兄弟分位の槌頭鯨と云ふが、數十頭、小山の如くに積み重ねられ、腹は割かれ、腸は抉り出され、臭氣紛々、久しく見る可らず。此れが鼻はだしいと云のだらうと、ソコソコに遁げ歸る。

偖此れだけでは折角此所まで來たのがどうも割に安房ぬ、出立前の大言に對しても何か房州を、イヤサ報酬を得なければならぬとは、恰かも膓を鯨らるゝが如く、何所までもキザ氣澤山の駝洒落に心を困しめたり。

全體鯨を取るなどゝ、希望が大き過ぎたればこそ山は外れたれ。余は本來山を樂む仁者にあらず、去りとて水を樂む智者でも無けれど、名も水哉といふ向ふみず、世間見ずの子供の時から、後先見ずの今日まで、水には緣の離れぬ身、何でも水から獲物を捉へ、鰕で鯛を釣る樣な旨い仕事を。オッと其鯛で思ひ附たり、同じ房相の外海つづき、小湊の誕生寺に鯛の浦といふ名所がある、人を見ると船ばたまで鯛が集まつて

來るといふ、日蓮上人の舊蹟なれば、鯨の代りに鯛を取るもまた一興なり、此れこそ往き鯛、見鯛、捕り鯛と、此所に房總海岸一巡の鯛望を企て、人車を雇ふて館山を發す。館山町と北條町は、安房の國では都會と云へど、町の長さは按摩の杖ほどゝは、按摩り酷な批評ながら、敏捷ならぬ車夫の足も、暫く間に通り越し、安房半島を横ぎつて、早くも外海岸に出で、南三原で茶屋に憩へば、巡査一人出張して、頻りに何やら審問中なり。聞けば昨夜此家へ窃盗這入り、店先の賣溜錢と、賣物の菓子を攫つて去りしとぞ。此れも何かの材料と、密と手帳を出して、余は村の名を書留めるを巡査は不審な顔して注目するは、余を何人と疑ひけん。さりながら寫眞屋と泥坊は、何れも暗い所で取るといふ似た商賣、警官の怪しいと見るも無理ならずと、車を急がせて此所を立ち、和田といふ所にて車を改む。

此邊總て海岸の漁村、鹽風に吹かれてお臀の眞ッ黑な男女のみながら、人氣は質樸相にして仲々質樸ならず、重き寫眞機械を荷厄介にする余が足元を見て、車賃は方外に高價を吹きかけるも、余は之を拒むの勇氣なく、言ふが儘に約束して乘り出せば、



此の車夫感心の學者にて、語る所一々興味あり。日は午に近くして焦げるかとばかり

に照りつけるにも屈げず、詳かに沿道の風景を案内し、『彼方の海に浮ぶ無數の小舟は「コマセ」とて鰯を釣る餌を捕るので、其の鰯はまた魚松を釣る餌にするのだ。また御覽なさい今海中へ飛び込む人がありませう。彼れは、サイホウ船だ。サイホウとは、手偏に野菜の菜の字の艸冠を除た採ると云ふ字とホウは鮑といふ字で、鮑採り船だ』と念入りの説明を面白く聞て居れば、車夫は更に話頭を進めて『鮑採りは彼の通り長い時間海中に潜る樣だが、あれで一分間が普通で、百秒間潜る者は滅多に無い、あれで十五尋位の底に下ります。肥前の天艸の漁夫が日本では鮑採りの第一で、五十尋まで深く潜る、それで前年ノルマントン號が沈沒した時、遙かに天艸から潜水夫を呼んで海底を探らせた相だ』と、雄辯滔々と説明し、また頭上の電線を指さし『此の電話線は、此の海岸の南の端なる野島ケ崎の海岸望樓から、各警察分署に通じ、其所の望樓の望遠鏡で覗けば、伊豆の大島は人家の屋根瓦の續ぎ目までも判然と見えます』と流るゝ汗とゝもに辯舌も流るゝ如く語る。

此邊の海岸一帶に、山腰削るが如く、海に臨みて峙ち、水邊には奇巖怪石庭苑の如くに散在して、寄せ來る濤の爲に、忽ち呑まれ忽ち吐かれ、巨巖に激する怒浪は、碎けて雪を噴き、砂礫を舐る細波は、連つて布を曳く。其中に浮ぶは例のコマセ船に採鮑船、沖に走るは松魚釣船、眸を放てば烟波渺茫として遙に水天に接す。江見、浪太等の風景殊に勝れたる蜑村漁落を過ぎつゝ、彼の學者の車夫は、更に説明を續け『此の浪太村は、岡浪太と浪太島との二ッに分かれ、浪太島は仁右衛門島とも呼び、其昔源の頼朝が相州石橋山の戰ひに敗れ、此の房州へ逃れ來て、島の郷士平野仁右衛門の家に隱れたので、爾來今日まで平野の家は、連綿と續いて頼朝の用ゐた枕などが、今も殘つて居ます。で、此の地方の門閥だから、島の名も俗に仁右衛門島と呼で居ます。』

此んな話の間に阪路にかゝると、阪は山の腰を切り開いた樋の如き所で、忽ち艸の中から一疋の鼬が飛び出すと、毫も隱れ場所が無いので、元氣の車夫は面白がり、車

を曳きながら石を拾ひ、彼方此方へ追ひ廻しゝが、鰍も巧みに遁れ、終に足元を潜つて阪下へ走る。時に一陣の臭氣鼻を襲ふ。車夫曰く『ヤア最期屁を放りました。』

山を一つ越て鴨川といふ、一寸賑やかな市街で、午餐を喫べ、學者の車夫と別れて車を乘り替へ、砂原道を行くに、日は益ます熱く、昨夜船中に安眠せざれば、車上で頻りに眠りを催ほし『旦那御帽子が落ちます』と注意せられて氣が附けば、口端に滴つた涎に塵埃が雜り、それが乾いて何だか頤の邊りが引ッ釣る樣なるに、余ながら容貌の麗はしからざるを耻ぢ、其時は手巾で顏を拭ふてもまた何時となく華胥の境に遊んで、天津といふ町を半睡半醒の中に通り過ぎ『御客樣だヨウ』と威勢よく曳込れたのは、小湊の誕生寺を眼の前の海を隔てゝ望む內浦の見晴らしと云ふ茶店なり。

茶店は粗末ながら、眺望甚だ宜し。此所から誕生寺まで、海灣の沿岸を陸で行けば十八町、海を渡れば十丁、其の渡り舟を待つ間、茶屋の押入を借りて寫眞の乾板を入れ替へ、茶屋から正面の小湊村を望むの景を寫し、頓がて此方の岸に着きたる小舟に乘り『オイ船頭、鯛の浦は何所だ。』と尋ねると『彼所に見ゆる誕生寺樣の後ろの突き出た鼻陰で、岩が散らばつて居る間の洞の中に住で居て、機嫌の好いときには何百尾と無くゾロ〳〵と出て來ます』『では今往ても鯛は澤山出ようか』『ヘエ居ることは居ますが、見ゆる時と見えぬ時があります、信心の良い方は多く見ますが、惡るい方には見えません、また汚れた身體の婦人衆などが往ては、迚も見ることが出來ません、それは爭はれないもので、私の知て居る東京の人が、彼方へ見に往て、舟べりを叩くと何十尾となく鯛が浮て來て、手を水の中へ入れますと、指の先に吸ひ着いて戯むれるので、糸の先へ鈎に餌をつけて一尾釣り上げました。私どもはそれはイケない飛だ祟りがあると云ふて直ぐ放させたが、其夜から其人は大熱を起し、口が曲つて湯水が飲めなくなりまして、驚いて誕生寺樣で占ふて貰ふと、明神樣の怒りに觸れたので、其の口の傷が治らぬ間は、此方も治らぬといふので、種々の御詫をしたが、トウ〳〵二三年は治らなかつた。』と眞面目になつて話すので、偖は鯛も取ることが出來ぬらしい、

性來口の好くない余が、此上口が惡くなつては、それこそ鯛へンと云ふものなりと、俄かに怖氣つき、兎も角も誕生寺へ御詣りの後と、舟を彼岸に着け、山門を入りて本堂に上りしも、何と言ふて拜めば宜きか分らねば、唯だ鰐口を鳴らし、掌を合せて拜みたる後、日蓮上人一代記を描きたる多くの額を眺め、本堂の前の景を二枚寫し去らんとするとき、遙に汽船の笛の聲が聞ゆる。傍の人に彼れは何かと聞けば、今下り汽船が此所へ寄て、勝浦へ行くのだと云ふ。然らば此の汽船に乘れば鯛の浦も見らるゝかと聞くに、海だけならば船中より見らるゝと言ふ。どうせ信心好き余にあらねば、鯛を見ることは六かしかるべく、假令鯛を見ても捕へられねばせん方なし、之れから東京へ歸るに、勝浦までは是非今日中に往かねばならぬ。是れ屈强なり、是れも先刻御參りをした日蓮大菩薩の御利益ならめと、直ぐに小湊の汽船會社出張所にて切符を買ひ、丁度今内浦灣内へ這入て來た汽船に乘る。

灣内を出で小湊の岬を巡れば、陸は往昔海嘯の爲に崩れたる所とて、屏風を立てた

様な絶壁、其の下に巨巖は庭中の飛石の如くに連つて、中に烏帽子の様な形で松を冠りて居る小島が二ッあつて、其の飛石に圍まれたる烏帽子形の巖の下が、鯛の群がつて居る所だと、甲板の上で同舟の人に聞いて居る間に、アヽラ不思議でも何でも無けれども、夕に近づいて風俄かに起り、怒濤は山の如くに頽れかゝり、小形の蒸汽船は右に左に傾むきて、果ては激浪甲板上に打ち上げ、恐ろしきこと言ふ計り無し。往昔日蓮は博多浦で大風を起し、元の大軍を海底に沈めたことは、先刻誕生寺の繪額でも見たが、幾ら今日一日日に燒けたからとて、余を蒙古人と間違へ、此の大風を起して困しむるとは何事ぞ、否や日蓮大菩薩とも言はるゝ者が、左様な粗忽のあるべき筈なし、之れは余が先刻捧げた御賽錢を納受ましく、艱難汝を玉にする御趣意で、余を立派なる海國男兒に養成せんとするか。其の御心配ならば最早御無用、鯨を捉へんとさへ企てた剛の者にて候と、虚勇を衒ふても居溜られず。マゴ〳〵せば鯛の浦の鯛の餌食となり相ゆる、辛くも甲板を下つて船室に入る。中の人笑ふて「トウトウ逃げま

したね』余曰く、『イヽエ敢て怖れたるにあらず、氣が進まざるなり』と孟子反ならぬ申譯も、遁辭は余其の窮するを知る、此所にもキザ男の批評を免かれざらん。小湊から房總の國境、海上三里計りを乾轉坤旋の浪の上に困められ、興津の岬を廻り、日の暮れ際に、歌に聞く、東上總の夷隅の郡、勝浦町の灣に入り、漸やく人心地つきて上陸す。

昨朝家を出でしより、昼夜着通したる洋服は、汗に穢れ、砂に汚れ、襟もカフスも濡れ紙の如くに破れたる上に、肩に寫眞機の箱を懸け、洋傘と三脚を携へて上陸したるは、鬼界が島の俊寛を今様にしたるボンチの畫題とも見らるべし。其の扮裝にてポクポクと、二三丁歩み、豫め聞て知たる幸善樓と云ふに到る。余が此の容姿では、無理も無いが、最初は店頭に近き床の間もなき座敷に通し、外にまだ氣の利いた座敷は幾らも明いて居る樣なれども、御約束があるといふて其所に入れず、此家本來料理が本業で、一人旅の客などは喜ばぬといふ風に見ゆ。此所でグッと癪に觸り、キザと言はれても旅の恥と、妙に敵愾心を發し、藝者が居るかと聞けば、『ハイ七人居ます』と云ふ。『其の中二三人呼で來い。麥酒を冷やして來い。此邊は鮑が採れるだらう、水貝を持て來い』などゝ大きな面をして置て、偖て湯に入て來ると、作戰幸ひに其圖に當り、座敷は改められ、今まで碌々挨拶もしなかつた女中が、『妾共も皆な東京です』などと云ふて、五六人交はる交はる座中に侍べり、余を東京の寫眞屋と思ひ、明朝寫眞を撮て呉れと賴む樣になりたり。暫らくにして座敷へ現はれたるは、南瓜の如き面に冬瓜の如く白き物を塗りたるは、何れ野菜に縁ある代物と、突然にお前の扇は何所だと尋ねしに、彼方は答へに躊躇するを、傍の女が引取て『三ちやんも矢ッ張り東京です』と、因て之れが三何と云ふ藝妓なることを知りぬ。之れでは藝妓よりも女中の方がまだ餘程價値あるなり。余は其の藝妓の何やら歌ふを二ッ三ッ聞いて、且つ飲み且つ食ひ、終に疲れて寢に就きしが、他の座敷には此時近き邊りの若旦那とか呼ばる數人の人達が女中を對手にして散々に騒ぎ、終に此家に泊ることになり、彼等女中

連が、皆な藝妓以上の手腕を揮ふを縞かに傍聽し、十二時頃までも眠る能はず。

勝浦から房總鐵道の終端なる大原停車場までは、道程四里なるも、道路極めて險惡に、人力車よりは乘合馬車が優ると聞き、夜前より馬車を命じ、翌る朝は明るを待ち、家人の未だ起きざるに寫眞機携へて家を出で、町端れの高丘に登つて、海に向ふ風景を數葉撮影し、宿に歸るも女中等未だ起きず。余は旅裝に改むる間に、乘合馬車は喇叭を吹いて、早くも宿の門前に來りて待つ。此時女中連は眠た相なる眼を擦りながら起き來るを促がして、ソコ〳〵に朝飯を掻込み、今朝撮影の約束は、先方の粧飾が出來ざる爲にお流れとせり。實は斯くあらんと察し、先刻乾板の有りッ丈けを撮り盡くしたるなれば、機械を疊んで直ぐに馬車に乘り、此日は陰曆盆の十二日、草市の爲に雜沓する市中を、十人乘りの一輛に九人詰め、群集を漕ぎ分けて駈け出す喇叭の聲、トテトテトー

御宿といふ立場に馬車の着きしとき、二十歳許りの怪性の婦人一人乘る。馬丁と馴馴しく語るを聞けば、此の邊りの茶屋々々を稼ぎ廻るが娼賣にて、小澤の何とか云ふ茶屋までとて、凡そ一里足らず乘て居る間は、乘客の視線盡く其れに注ぎ、萬綠叢中の一點紅と見えしが、降りるときに幾らかと聞くと、馬丁は二貫だと云ふ。女は言ふ通り拂ふて去る。後で馬丁は馭者と相顧りみて笑つて曰く『彼奴等の錢は幾ら取ても宜いのだ。女郎には定つた値段があるが、彼奴等には値段が無い、行く先々の茶屋へ巣を懸け、近傍の蜻蛉虫を引かける蜘蛛だ』と。成る程さう聞けば手も足も多さうな女なりき。

馬車は大原の停車場前に着く。場の待合室へ入て見ると、東京上りの三番列車にはまだ三十分時程の餘裕はあるが、此所から十町許りといふ八幡崎の海水浴場へ往て見る時間無し。また二三驛を隔てたる大東ケ崎も、眺望に富むと聞けど、今は寫眞の乾板も撮り盡くし、且つ此所らは東京から汽車の便ありて、三四時間で來らるゝ所なれば、今日に限りたるにあらず、何れ再遊のお樂しみにと、心を殘して待つ間も無く、

下りて來りし汽車に乘り、先づ安心と横になれば、千葉までは夢を乘せて走り、千葉から總武鐵道線に乘り替へ、發車時刻の迫りし爲に、切符を買ふの暇無く、其儘本所へ到着すると、此所では乘車切符の無いので、面倒なる審問を受け、賃錢を拂ふまでに十分時間餘を費やしたるは、前々夜東京灣汽船會社で、乘込みに時間を間違ひたると、前後照應の失敗なり。それから人力車で博文館まで歸りしは、六日の午後二時にて、出發から此時まで前後四十一時間、總房兩國を匆忙の急旅行、其のまた道中記を總房イヤ匆忙中にザッとかくなむ。（明治三十四年）

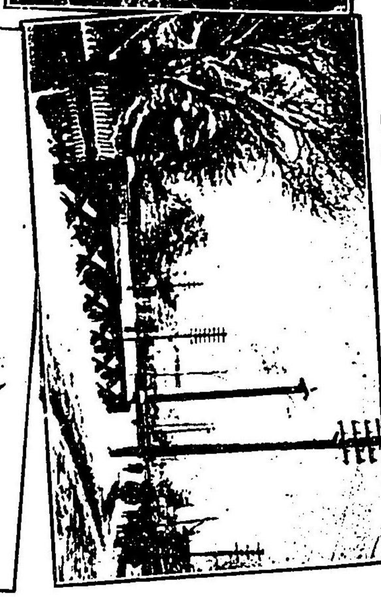
夏季混題　（六の字結）

蝙蝠や湯屋から戻るお六櫛　一水哉

紙に持た六孫王が扇かな　同

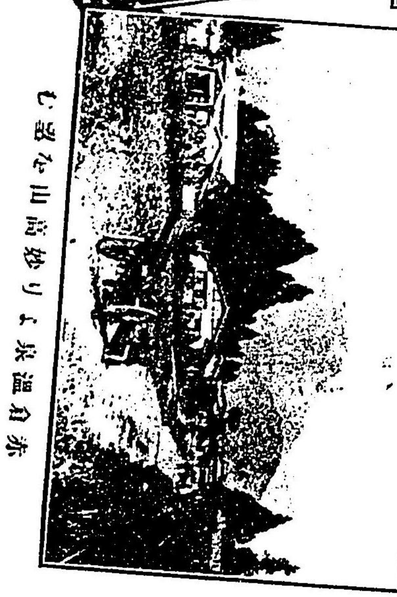
どぶ六の機嫌の胸を團扇哉　同

荒油石の近所岸柏



色紙島の國公山白滝新

り踊盆の妓藝湯新



ヒ望な山高妙りよ泉温倉赤

北國めぐり

招待受けたる避暑旅行

北越柏崎の日本石油會社、去年以來其の所有の長峰坑から夥多しく噴出して、日夜汲み切れぬ盛況に、今期の利益配當は、四割に上るとて、祝宴を催して遙かに東京まで案内し來るに、折しも避暑の好時節、日本海の岸に立ち、西比利亞の平原から吹き來る風に袂を拂はせるもまた快なるべしと、頃は八月五日の正午に、洋傘一本帽一個、小革鞄一個を荷物として、東京上野を出發し、暑い最中に關東の廣野を横ざり、高崎から汽車を乘りかへ、碓氷の隧道を過る頃は、氣候頓かに變じ、前刻の汗全たく引込みて、唯た洋服の襟のクチャクチャに濕れたるを名殘りとするのみ。車中同乘の客が携ふる所の氣壓計にて、碓氷の半腹は海拔二千七百尺、輕井澤は二千九百尺なるを知

り、涼いのも無理は無く、數百の外國人が此の山上に一部落を爲して居るのも道理なりと悟りぬ。此時風と氣がついて淺間山を見れば、裾を輕井澤より起して、腰から上は雲に蔽はれ、近頃は烟を噴くこと殊に多しと聞くも、それかあらぬか知るに由なし。

上田を過る頃、日は次第に暮れ、彼の霜臺公が鞭聲肅々夜河を渡りし、川中島の下流を、今は輪聲ゴロ〳〵と轟ろかして夜橋を渡り、長野に着て其所に泊る。

善光寺如來と米山藥師

長野は善光寺參りの婆さん達を第一の得意とする所とて、客が門前に在る間は、口を極めてチャホヤ言へども、一旦座敷へ通して後は、呼べど招けど容易に應せず、番頭の話によれば、手前の本店は先頃某侯爵の御旅館となりたり、某やんごとなき貴顯も、弊店に御滯在ありしなど云ふも、九時に到着したる我々が、蓐に就くとき最早十二時とは、隨分氣の長野縣と言ひたし。終夜蒸し熱くして眠られず、枕頭に蟋蟀を聞く。

翌る朝は未明に起き出で、一番列車にて發す。官設信越線は直江津にて盡き、北越鐵道は荒川の對岸に止まり、兩線未だ連絡せねば、直江津から下車し、人力車を走らせて荒川橋を渡り、春日新田から北越鐵道の汽車に乘る。車窓より望めば、鐵道は北海の岸に沿ひ、一路平坦の砂原を走り、海上漁舟の往くもの來るもの、其向ふには佐渡が島の翠黛を水雲接する所に彩どるもの、風景絶佳、畫もまた及ばぬ趣あり。米山の麓を過る頃、一面は巉巖峭立して所々に簾の如く飛瀑懸り、風に揉まれて右に左に霧を噴き、飛沫の車窓に入り來るあり。一面には日本海の怒濤岸を打て、海中に横たはる巖を弄び、或は吐き、或は呑み、時には山の如き狂瀾山腹に頽れかゝれば、忽ち碎けて一團の白雪と變するなど、夏の暑さも此所ばかりは知らぬらしし。米山藥師に詣でんとする者は、此所の青海川驛より下車して登山すべし。辨慶力餅の古跡や、上杉景虎甕割坂の古戰場は、皆此近所にあり。

北越名物美人競進會

柏崎にて下車すれば、市中は宛もお祭りの如く、到る所に綠門は設けられ、國旗は家ごとに樹てられ、煙火を打揚げる、風船を放つ、奏樂の聲も聞ゆれば、爆竹の音も轟くといふ大騷ぎ、此は是れ日本石油會社が、今日の大宴會の餘興なり。來賓の接待には、北越の三大都會なる柏崎、長岡及新潟の各地より、藝妓の粹を拔て集むといへば、其華やかなる未だ見ぬ先より想ひやられて先づ嬉し。柏崎、停車場前の一茶店に小憩し、更に車を驅て會場なる町端れの西光寺といふに赴けば、式は既に始まり、來賓は農商務省の藤田次官、同く田中鑛山局長、本縣の勝間田知事、警部長、郡長、偖は東京及當國の旦那樣達、其數無慮一千名ばかり。演說あり、祝辭あり、お目出度し、祝着に存ずる、地方が富む、國が富む、と、あらゆる賀辭を述べ盡くして、偖其後が餘興に移り、來賓は銘々に折詰料理を開いて、記念文字入りの大盃を傾けると、寺の庭中に設けたる假舞臺にては、愈〻越後名物の美人競進會は始まりたり。先づ最つ先きは柏崎藝妓の三番叟、引拔きて祭り、何れも土地の尤物を選みしなるべく、次が長岡唐津屋のすぎ、たま二妓の鶴龜と、粉名屋のつる、しゆん、はるの三人が、松竹梅の踊り。容姿から、踊りから、衣裳まで、柏崎に比ぶればまた一段に立優りて見ゆ。續いて新潟藝妓吉田屋よし、水上屋たい、大崎屋じゆん、會津屋くに、吉田屋ちえ等、七八人の、新作「今日の御祝ひ」は、同く新潟の老妓大崎屋むつ、同ひで等の地と相待て、其の手ぶりの婉に、聲曲の妙に、容貌、服裝まで、さすがは北國第一の狹斜巷とて、都人士の喝采は此時始めて起りたるが如し。最後に柏崎藝妓百人ばかりの三階ぶしの踊り、是ぞ當日第一の壯觀、何れも揃ひの衣裳に花笠を冠り、廣き庭內を輪狀に列なり、老妓數人列の外に立ち、太鼓を叩いて音頭をとり、石油會社の祝意を寓めたる新作の唄と、舊來の唄とを取合はせ、聲爽やかに歌ひ出せば、一百の嬌喉二百の纖手、之に和して歌ひ且つ踊る。聲は谷の戶出る鶯の春を告ぐるに似て、踊

りは春風に飄へる乙鳥の、柳の蔭に舞ふが如く、「アーエ魔閻前なる茶屋の嗅ア」と一齊に手拍手打て踊り出すとき、觀る者また覺えず調子を合せて飛び出し相なり。唄の一二を書けば、

「根埋り地藏や立地藏、佛に似合ぬ、魚の番像なされます

「閻魔前なる茶屋の嗅、アレを地獄へやらぬとは、去とは閻魔も得手を引く

「柏崎から椎谷まで、間に荒濱あら砂、芥多の渡しがなかよからう

「狹い小路に一寸と出逢ふた、話せや語れや、胸中あること皆話せ

何れも古來人口に膾炙し、猫も杓子も唄ふものとぞ。根埋り地藏、立地藏、閻魔堂、皆な柏崎名所、椎谷、荒濱、皆な海濱の隣り町なり。

佐渡に横たふ天の河

石油會社の宴會後、余は東京及地方の新聞記者諸氏と共に、同地の料理店阿部樓に招かる。此所にも先刻見たる各地の藝妓、酒盃の間に周旋す。柏崎名物の「おけさ」踊り始まる頃、匆々に辭して歸れば、翌る早朝、また石油會社の案内に、柏崎より三里ばかりを隔つる長峯の石油坑を見る。坑は山上に在りて、日夜斷えず滾々と噴き出る石油は、鐵管を地下に伏せ、柏崎まで引き來りて精製するなり。長峯山下まで人力車、其所から歩して山に登るに、恰も昨日頃より新たに噴き出せしといふ一坑は、宛が水煙火を揚ぐるが如く、空中高く二十間餘り噴き上げ、近傍一面に溢るゝ壯觀は、正に是れ黄金の沸くといふべし。斯かる坑は尚ほ其邊りに幾つもあり。長峯山上一日の出油量は優に一千石に上るといへば、一夜に二三合の石油を消費する家々のランプなどに思ひ比べると、壯んなりと言ふの外なし。腰折れ歌數首を得。

汲めど〳〵いやわきいづる油こそ
　つきせぬ御代の姿なるらめ

越路なる油の泉みなきりて

あふるはかりに國とさすらん

歸路はまた佐渡を右方に望みながら、海岸の小砂利道に車を走らす。三階ぶしに所謂「柏崎から椎谷まで、あいの荒濱、荒砂、あくたの渡りが無かよからう」とは此の邊りなり。北陸道の縣道ながら、荒濱町と柏崎町の間、砂原に車輪を沒し、車の歩み甚だ遲く、日は午に近くして暑熱幾くが如し。覺えず苦吟すらく、

日盛りや車のおそき小砂利道

雲の峯わくや碧りの佐渡ケ島

此の邊りの村々、民家の戸に赤き紙を貼るもの多し。是れ近頃赤痢病大流行にて、赤紙は患者ある標識なりと聞き、急に怖くなり、また一句も出ず、出るものは唯だ汗ばかりなり。

追分ぶしに樽きぬた

新潟と云へば先づ美人といふ觀念の浮ぶは、青梅と聞いて酸いものを連想すると相似たり。其の新潟に對し、港が淺くて船が入らぬとか、鐵道が通せぬで、橋錢を取るのが不便だとか、何故に婦人にも産業を授けぬとか、理窟を言ふものは抑も野暮なり。公園は遊ぶ所、工場は働らく所、各人は皆な働らかなければならぬとも、働らくのみが人間の目的にあらず、能く働らいて能く遊び、能く集めて能く散ず。兎角世間は此れで持つたもの。新潟は工場にあらずして公園なり。世界各國の人が日本へ遊びに來るは、其の氣候の身に適し、風景の耳目に快きが爲にて、日本全國の人が、新潟に來るは、また其の佳人に富み、遊趣に饒かなるに由る。醉ふては枕す美人の膝、醒めては握る天下の權、其の政治家の大臣大將、偖は豪農紳商、文士政客、何れも新潟へ來れば遊ぶ所と思ひ、平生紛々たる俗務に疲れたる腦髓は、此所で一ト洗濯と思はざるものなし。實に新潟は日本の一大公園なり。世人が命の洗濯場なり。此所で濫りに生産を論ずるは、公園の眞ン中へ煉瓦の烟突を立てんとするに同じきなり。そんな野暮な

人は、新潟人必ず嘲つて『此の衆は利いた氣な、大嫌ひだワ』と言ふや必せり。

昔から既に新潟は北越全州人の爲に、公園として賞でられし所、然るに今は對岸まで鐵道通じ、萬代橋を渡れば東西二京から大阪までも、汽車の車室に腰かけたまゝ往來せられ、新潟は全たく日本全國の大公園と爲り、他國人の此地に遊ぶ者引きも切らず。余が新潟に着したるときにも、比志島陸軍少將、安田善次郎氏、農商務省の藤田次官、田中局長、學者としては天野法學博士、坪内文學博士、阪田工學博士（貞一）、井上文學博士（圓了）、文學者として尾崎紅葉、武島羽衣等の諸氏、一時に落ち合ひて、驥尾に附たる余が如きすら、舊友多く待ち受け、歡迎會やら、懇親會やら、朝から晩まで、飲む、騒ぐ、狂ふ、といふ始末なれば、大小の佳人は年々に殖え、舊知の老妓は年を經れども色香毫も衰へずして、妙齡の新進は、何時の間にか皆な他の豪傑紳士を手玉にとるの手腕に長ず。恰かも是れ雪消え後の越路の野の如く、梅花未だ香を失はざる間に、櫻花、海棠の一齊に開くに似て、香を賞づる蜂、色に迷ふ蝶、皆な前後應接に暇無きが如し。鍋茶屋の鰻、行形屋の鼈、庖丁の利、割烹の妙、能く都人士をして舌を鼓せしむべく、古町の鶴揚樓、新開地の金澤樓等、日夜歌吹の海を沸かし、以て第二次會を開くに足り、更に街々衢々に散在する大小の待合は、處として淺酌微吟の第三次會に適せざるなし。其れから以往の事は、余輩の未だ窺ひ知らざる所なり。

一夕坪内逍遙、尾崎紅葉等諸氏と共に、土地に名高き「追分ぶし」の踊りを鍋茶屋に見る。彼の『松前のズット向の、蝦夷地とやらは、朝の別れが無い相だ』をイツソイ、イツソイの囃につれ、七八名の長袖蹁躚として舞ふとき、其の優美婉麗なる成る、程天下の豪傑を吸ひ寄せる一種の魔力は、夫れ此邊にあるかと思はしむ。また同樓にて盆踊りを見る。踊りは一種の甚句、櫓を打て音頭をとるもの。櫓には紅葉山人が

短か夜の夢ならさめな櫓きぬた　十千萬堂

の句を題したるを、カンカラ、カンカラと調子面白く、胴と蓋とを打ち鳴らしつゝ、「アーレ、月の出あひと約束すれば、月は早ふ出て杜の中」、など、數十の妓群輪を爲

して踊る。輕妙にして瀟洒、また柏崎三階ぶしの比にあらず。是ぞ北國第一の名産、六ケしく言へば、北辰其所に居て、衆星之に向ふの原動力は、全たく此所にあるなるべし。

新潟三百の藝妓中、余が此行中に於て見しは、姉さん株にて、大崎屋むつ、同ひで、吉田屋よし、小川屋やす、等にして、客姿才藝を以て流行ッこなるは、庄内屋八重、同はな、水上屋たい、大崎屋じゆん、會津屋くに、同しま、五泉屋まち等、また妙齡中に頭角を現はしゝは、庄内屋ふえ、吉田屋ちえ、金澤樓みす、同つな、甲斐屋かつ等と爲す、之を他の同行諸氏に聞くも、十目の視る所、月旦略ぼ同じ。知らず後年再遊の日、彼等が如何に番附を上下するか。

船中より見たる富山の大火

新潟を去り、汽車にて直江津まで同じ道を歸り、同所より越中行の汽船に乘りしは、八月十一日の夜なり。北國地方は概ね一ケ月遅りの暦法を用ゐ、八月十五日は盂蘭盆の節に當るとて、越中より越後、信州、上州邊りへ商用または出稼ぎに出でたる者、皆な一時に歸り來りて、船中の混雜言ふばかりなく、會たま此夜風強くして浪高く、纜を解きて間もなく、最早船に醉ふて、吐く聲、呻く聲、聞くごとに心を痛めしに、頓がて夜半を過ぎ、越中の國生地の岬を過る頃、西方に當りて一道の火光天を焦がすを見出したり。此の風に此の火事、場所は何所、魚津か富山か將た高岡かと、乘客は皆狂氣の如く、悶え苦しむ樣は一層甚だしく、既にして魚津沖を過ぎ、火事は愈〻富山と知れしも、火勢益〻熾んにして、何時熄むべしとも見えず。聞けば同市は去る二十年に全燒の大火あり、今また全燒の外無らんとて、家に老人や病者を遣したりと云ふ者は、海中を泳ぎてなりと驅け着けんと焦れど、舟行は情無くも風に妨げられ、却て常よりも遲く、富山附近の神通川口なる東岩瀬に着きたるは、十二日午前十時頃なり。今曉一時頃より燃え出したる火は、未だ熄まざれば、最早全市の大半は燒けて、

縣廳、裁判所、學校、病院、偖は櫻木町の遊廓まで、總て烏有と爲りたりとの確報を得、余は本來此所に上陸の意なりしも、俄に方向を轉じ、同じ船にて能登國和倉溫泉に行くことゝし、伏木港にて午餐の爲に暫時上陸したる外は、終日越中と能登の沿海を航行して、夕陽の未だ海に沈まざる前に、七尾港を過ぎて和倉溫泉にと着きたり。

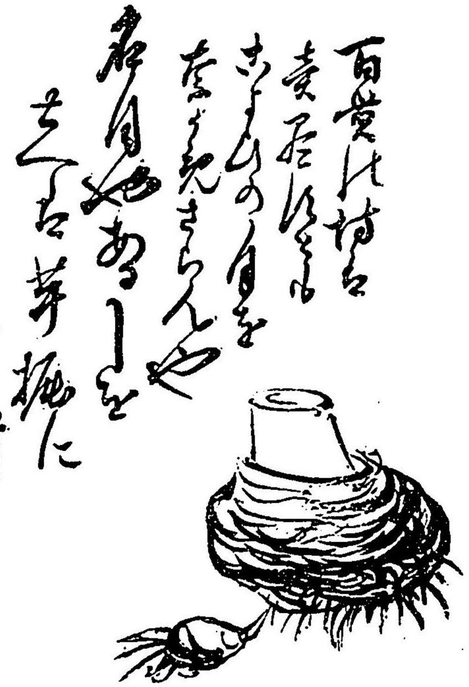
海中から鑛泉の和倉

和倉は元と湧浦と呼ぶ。海中に溫泉の湧き出るとて名づけたるもの。後に海を埋めて浴舍を設け、家々に浴槽を造りて溫泉を引く。地は能登灣の南端に斗出し、能登灣は焜爐の下口の如く開け、灣內の能登島は、蝙蝠の翼を張りたる如くに橫はり、其の頭と尾の邊に、南北西の三大灣を爲し、和倉は西灣の一角にて、越中通ひの汽船は、浴舍の窓外まで漕ぎ着けるなり。灣內濶くして浪穩かに、四圍の丘陵は屏風の如くに連なり、上には皆な稚松を被り、大島小嶼其間に點綴して、奥の松島の規模を更に大にしたるに似たり。唯だ彼の如き老松の島嶼を被ふものなきを憾とするも、和倉の小公園なる辨天島に佇て、袂を北風に拂はせながら、白帆の去來するを望めば、三伏の炎熱も何のその、羽化して登僊するとは、此邊にて言ふ事ならんと思はる。此地は溫泉宿三四十戸あり。樓は多く海に面し、建築又壯麗に、和歌崎某、小泉某、多田某等を巨擘とす。余は和歌崎に赴くに、良室皆な塞がりしとて、其の親族小橋某に誘ふ。湯は熱鑛泉にて、溫度は華氏百八十度、無色清澄にして異臭なく、之を味へば鹽がきのみ。一浴して酒を呼べば、魚最も鮮かに、其味舌を刺さんとす。此浴、此酒、此の魚肉を備へては、獨酌も興なしとて、妓を呼ぶ。妓は概ね金澤產にて、藝も衣裳も語るに足らねど、面の美なるは北國の名產なり。小鶴、小金、染十、小りう、など此地の粹といふ。線香は一時間を三分し、一本を一枚と云ひ、一枚を十錢と稱す、即ち二十分ごとに小婢は姉さん一枚だと云ふて通知するなり。矢釜しいから還すまで默つて居れと叱りつくれば、小婢は驚いて歸りたるものゝ如し。藝妓一人一時間三十錢、

長く留め置けば割引あり。新面の客、勿論纏頭などは一切なし。後にて聞けば、徹宵留むるには、別に線香二十枚位の相場なりとか。今は七尾までの鐵道が、往く〳〵和倉を經て、穴水まで引くと云ふ。何時出來るか知れど、幸ひに其事成らば、將來都人士の暑を避くるには、最も適當なる地の一となるべし。

福井の月見亭に月見の小宴

和倉から二里にして七尾町、能登第一の都會なり。今後開港場と定りたる地なるも、余は早朝に通り過ぎたれば、風俗は委しく知らず。速力甚だ遲き七尾鐵道にて、加賀國津幡町にて下車し、半里餘りを人力車にて走り、更に官設鐵道に乘りて金澤市に下りたるも、兼六公園の壯觀や、九谷燒の効能は、今更珍らし相に管なれば記せず。即日再び汽車にて福井市に赴き、月見亭といふに投宿す。此家本來割烹店と旅店を兼ね、樓は足羽川の流に臨み、簾を卷て對岸を望めば、山あり、翠綠滴らんとす。川には遊舫を浮ぶべく、空を仰げば陰曆十日ばかりの弦月は、半天に懸りて老松の影を坐間に印す。月見亭の名命け得て妙なり。浴後膳に對ふとき、忽ち絃聲を載せたる遊舫の、軒下より漕ぎ出すあり。指を啣へて傍觀するも意苦地なしと、余も書を送りて迎ふれば、氏は在らざりしも、同姓竹四郎氏在り、直に記者須永金三郎氏を



また大小二妓を聘す。妓は殆ど西京風にて、脂粉の氣は西京より少きを覺ゆ。會〻友人の代議士、三田村甚三郎氏新たに新聞を此地に創めんとするあり。

伴ふて來り訪ふ。須永氏また余が舊友なり。乃ち更に數名の妓を呼び、大に飲む。おゆう、駒井、奴、等の老妓、能く座を持ち、小ます、花枝等の少妓、舞技は感心する程ならねども、姿色は尤物と稱するに足る。此等は皆な此地の產、天然の地質、美人を產するに適すれば、他方より入り來るも顏色なく、久しからずして皆な去り、全市二百有餘の歌妓中、殆ど他地方の人なしといふ。宴を撤したるは夜半を過ぎけん。翌る朝、福井新聞創刊の祝辭一編を草して、鴻爪の痕を留め、樓主に停車場まで送られて東歸の程に上る。

敦賀港內の入船出船

福井を辭してまた汽車に乘り、窓から遙かに藤島神社を伏し拜みつゝ西に走れば、一時間餘にして北海第一の良港と聞ゆる敦賀港に着く。敦賀灣の水は、湖水の如く周圍の山に圍まれ、外海風浪の險しき日も、灣內は恰も疊を敷きたるが如く、一萬五千の人口ある市街は、灣の南端に、海に沿ふて橫はり、東は金ケ崎神社より、西は松原公園まで、左右の手を伸ばして灣を抱き、金ケ崎神社境內の高所より眺れば、敦賀の町は眼底に在て、富豪の多き蓬萊町、美人の群る新町や、北陸東海の兩道より、貨物を送り來り送り去る金ケ崎貨物線の汽車、丹後の宮津や若狹の小濱へ斷えず往來する汽船、または遠く內外各港より來り泊する商船軍艦、何れも箱庭の如く見下され、更に最も高き所に登りて金ケ崎宮を拜すれば、是なん延元の昔、後醍醐天皇第一の皇子尊良親王、皇太子恒良親王とゝもに北陸道鎭撫の爲に下向し給ひ、數々賊軍と戰ひ給ひしも、官軍振はずして遂に勝たず、果敢なくも此地に薨じさせ給ひしを、今は官幣中社として祭らせらるゝ古戰場なり。往時を追想すれば、誰れか一掬の涙を灑がざるを得んや。そを拜して阪を下り、更に氣比神宮を拜するに、此れはまた往昔神功皇后三韓を征伐し給へる砌り、先づ此の地にて笥飯大神に祈らせ給へる舊蹟とて、今は仲哀天皇、神功皇后を併せ祭りて、官幣大社に崇め、日本有數の靈地たり。御手洗の水

清く噴きて、流るゝ汗もいつしか止み、梢を拂ふ松風は、塵に汚れたる耳も、徐ろに清みけん樣に覺ゆ。更に市街西端の松原公園に至れば、方八町餘の松林、小波寄する白砂の上に日光を遮ぎり、松は皆な老幹槎枒として、直なるあり、曲れるあり、下は一帶の平地、砂上草なくまた埃なく、恰かも珠を敷けるが如く、松の根に腰かけて、瑠璃の如き海面に、白帆の往來するを望む所、眞に是れ天下無双の景なり。舞子、須磨に比べ、青松白沙は稍や似るも、境内の濶きは、此地遙かに彼れに勝さる。此所は維新の前に、水戸の名士武田加賀守、藤田小四郎等、五百餘人が、勤王の衷情を天聞に訴へんと欲し、萬難を忍んで進み來り、戰敗れ力盡き、加賀藩の軍門に降り、盡とく首を斬られたる地、其の靈魂を祀り、今は松原神社といふ。此等歷史上の遺蹟と、眼前の絶景とに對しては、半日の眺望、詳かに之を說くに堪へず。

此れより後、東海道の汽車中は、書くべきほどの事無れば止む、斯くして新橋に着きたるは、八月十五日午前十時なりき。（明治三十年）

北越遊記

妙高山腹の赤倉溫泉

『柏原ッ、柏原ッ、十五分停車ッ、便所へ往く時間がありますッ』

是は七月二十七日の朝七時頃の事。昨夜上野から新潟行の夜行汽車に乘た余は、今此所まで來て、停車の間、車室の外へ出ると、直ぐ西側に近く聳ゆるが黑姬山、向つて左りの飯綱山、兩山の間に稍ゝ遠く聳ゆるが戸隱山、以上は何れも信州で、黑姬山の右に峙つのが越後の妙高山だ。余は今信越の國境に近い所に在るので、次の田口驛から先は越後である。其の田口驛に近き赤倉溫泉は、實に妙高山の麓に在ると聞けど、未だ訪ふた事が無いので、今度北遊の序でに、立ち寄て見ようと云ふ念が急に起つた。

頓かて汽車は走り出し、信越兩國を境する山脈の隧道を一二度過ぎ、冬時積雪の害

を防ぐ雪避け小屋の中を數回潜つて、田口驛に着くや否や直ぐに飛び出し、二人曳の人車で赤倉へと出懸けた。一里許りは國道を西に往き、其後一里許りは、妙高山を仰いで、ヒタ登りに登る。坂路極めて峻しく、車夫二人でも中々困難なれば、途中から車を降り、行李だけを積ませて、徒歩するに、三伏の炎天は頭上から燬くばかりに照りつけるので、喘ぎ〳〵急坂を攀れば、流るゝ汗は瀧の如く、忽ちにしてシャツも上着もビツショリ濡らした。が、左右の雜木林には、晩蓋と蟬とが頻りに啼いて、野原には、桔梗、苅萱、女郎花など咲き出で、春、夏、秋を一所に集めた樣なるが面白く、況して妙高山は、峻峭の翠黛を天半に抽んで、來れ來れと招ぎ迎へる如く、黑姫山は名の如く優しく左方に侍べり、右方には遙かに日本海を望み、眺望の雄大言ふ可らざるに勇氣を鼓し、幾たびも立ちながら憩ふて、漸く目指す赤倉に達した。村落は坂路の左右に沿ふて、一直線に縱に檐を連ね、共同浴場は道路の中央に二棟あり。下端の左方は東京の某紳商の別莊、右方は此地旅館の巨擘なる香嶽樓で、其の上方に旅舍十戸許りある中に、現今巨室を新築中なるも見ゆ。余は香嶽樓に入た。

山に對する樓上に通さるゝと、先づ嬉しきは海拔二千五百尺の高地とて、日本海から吹き來る風は、肌膚を刺すかと疑はるゝほど涼しく、今までの汗は忽ち收まつて、着かへた浴衣一枚では、實際薄きに過ぐ。況して妙高山は、手の達くばかりに近く窓外に在て、右の方日本海の沖には、佐渡ケ島の青螺が、有るか無きかの如く水烟中に浮んで見ゆ。各室ともに浴客未だ稀に、寂寞として人無きが如く、直ぐに浴室に往けば、溫泉の量は極めて豐かで、方九尺許りなる湯槽の底一パイに、廂髮の美人の半身像を畫いてある。最初は故さらに斯かる模樣を底の板に彫つたのかと疑ふたが、自ら湯の中に入れば、脚の底に觸る所、忽ち白き湯の花は剝げて、黑き底を現すので、何者か沈澱したる湯の花を利用して、戯れに畫いたことを知つた。其れにしては却々旨く出來て居る故、定めて浴客が自慢の戯れと思はれたが、余が槽中で起たり坐つたりしたので、無慘にも皆な踏み消して仕舞ふた。此時不圖浴しながら室外を眺むると、

例の日本海に對し、近く山麓の溪間には、今しも信越線の汽車が、烟を噴いて直江津の方に走り、新井、高田、などの市街は、指點して望まれ、其の彼方に、米山の奇峯が、天を衝て聳え、山は築山の如く、海は池に似て、汽車は庭中に遊ぶ小蟲かと見らる。

風清く、境靜かに、海山の眺めは雄大で、之に加へて豐富なる溫泉あり。余は何とも言へぬ愉快で、此日終日此所に留まり、上方の村端れなる遊園地といふに遊び、其所の湯瀧にも浴したが、此夜蓐上珍らしくも水鷄を聞き、面白きまゝ起き出てゝ窓外を眺むれば、折から滿月は黑姫山の上に昇つた。

翌る朝は、豫め約束したる人力車にて、田口驛へ戻り、恰も昨朝乘りしと同じ時間の列車にて、直江津まで往く。其所で北陸線と乘替へるに、發車までにはまだ二時間餘ある。ヨシ去らば、其の時間を利用して、春日山に上杉謙信公の遺蹟を訪はんと、行李は烏賊屋旅館の支店に託し、兼ねて晝食の準備を命じ、直ぐに人力車を西に走らす。

春日山の故城址

海面なる砂山の松の間、高き竿の先に何やら旗の飜へるもの二三あるは、何れも海水浴場の招牌だなどゝ、車夫が走りながら語るを聞きつゝ、頓がて左方の傍路に入り、村落の間を半里ばかりにして、林泉寺に着く。寺は春日山と呼び、實に謙信公の菩提寺で、舊城址の春日山は、其の南方に近く、寺の背後なる庭の彼方に見ゆる。寺は小規模で、境内極めて靜かに、門内の池には、紅白の蓮花のみ盛に香を發つ。寺の寶物を觀るには、一人でも數人でも、一回金二十錢なれば、一人では無益なりと、正直の車夫は諫むるも、折角來たものなればとて、和尚に請ひ、奥の座敷に通されて見るに、謙信公自畫讃の幅、同筆の額などを首として、陣中守護佛として携へたりといふ觀音などは、何れも一見の値あり。德川家光の息女が、越後少將忠直の夫人として、高田

へ輿入れの時に携へたりといふ梨子地蒔繪に三葵の紋章ある膳椀は、勿論正確なべきも、謙信公常用の食器なりとて、同じく梨子地に桐と澤瀉とを蒔繪したるは、餘りに立派にて、疑はしき節多く、川中島の激戰に、謙信公自ら武田信玄の本陣へ斬り込だる時の、小豆長光の太刀などは、最も首を傾むけさせる。和尚殿は一々調子を附けて緣起を述べるも、余は急ぐまゝに皆まで聞かず、隨意に太刀を引き拔て見て居ると、『後で委しく見せますから、マア緣起を御聞きなさい』との一喝を受けた。

寺を辭して所謂春日山に登る。此所は元と蜂ケ峰の城と稱し、謙信公の居城で、北陸街道、信州街道、並びに越後全州の三方に通ずる咽喉を扼し、如何にも形勝の地で、謙信公は此所に居て、兵を南方信州に出しては、川中島に數〻龍驤虎踞の活劇を演じ、西の方越中能登の邊りまで押し出せば、越山併得能州景など〻歌ひ、向ふ所前なく蹂躪したる勇ましい事蹟が、皆な成程と首肯かれる。で、今は山の半腹を平らげて、縣社春日山神社を建て、長へに公の英靈を祭る。英雄逝て最早三百三十餘年、見上れば天守閣のありし邊りには、數株の老松長風に吟じて、僅に當年の面影を留む。

石油と米田の沃野

直江津へ歸つて、ソコ〳〵に午餐をすまし、今や將に發せんとする汽車に乘る。今二三分遲れんには、首尾惡るく乘り外す所なり。荒河の鐵橋を渡つてから、日本海の岸に沿ふて柏崎まで二十二哩餘の間、數〻松林の間を走り、米山の腰を過るときは、八個の隧道を出沒し、鯨波の海岸には、數多の男女が海水に浴するをも見、風景中々に凡ならざりしが、中にも驚きたるは、鐵道沿道の各地が石油業の盛んなることにて、直江津、柏崎などは、製油工場の大建築が、棟を連ねて建てられたる外に、往來の汽車は、幾多の油槽車を連結して走り、更に高田や長岡附近の山々は、石油採掘の樓櫓が所々に天を指して聳え、路傍には、石油の輸送鐵管が幾條も通じ、汽車中の一二等室は、多く石油談にて滿たさる。實にや身邊に石油の臭氣なき者は、人の前で幅が利

かぬといふ風だ。

石油業勃興の爲に、長足の進歩で、一昨年から市制を布かれた長岡の停車場を過ぎて、汽車は北越の平野を走るに、左右の水田は、滿目の綠りたる稻の葉末に微風を戰がせて、田の草とる男女は、氣候の順なるに今年の豐作を期して、何れも喜びの色を顏に現はし、車中の客は、言語漸く蒲原の訛りを示して、最早余が鄕里の近けるを知らる。三條町を過れば、頓て加茂山に靑海神社の鬱蒼たる老杉の社と、遙かに其の東方に粟ケ岳の翠黛とは、早くも余が目に映じ始めた。岳の西、杜の東、加茂町は、實に今十年目に歸省したる懷かしき余が鄕里である。

十年目の歸省

『加茂ッ、加茂ッ、十七分停車――』

車を出れば多くの先輩諸君と親族とは、プラットホームに迎へられたが、久しく逢はざりし爲に、前日の少年は壯者と爲り、壯丁は老人と爲り、名を聞て始めて驚き、『之れは之れは』と手を額にしながら、久濶の情を述べたり、健康を祝したる後、準備せられたる車を驅ること一里餘りにて、久し振りに生家の內の人となつた。

余は今加茂町に就て微しく語らうと思ふ。地は三面に山を繞らして、西方のみ平野に臨み、一水東より西に流れて、市街は水の兩岸にあり、水を加茂川と呼び、橋あり、所々に流れを橫ぎつて架けらる。斯く言ふだけでも、其の地勢が京都に肖て居ることが知らる。況して川水は淸くして、四時木綿を河磧に洒し、其水は源を東の方粟ケ岳に發し、下流の信濃川に注ぐは、京都の鴨川の澱河に注ぐと同じく、上流の粟ケ岳、猿毛山など、連なり聳ゆるは、彼の比叡山や鞍馬山と髣髴す。西より來りて北に走る鐵道の停車場は、七條驛に類し、近來機業の盛んなるは西陣のそれにも比すべく、縣立農林學校、同羽二重精練所、町立圖書館など、頻りに設けらるゝは、京都帝國大學、高等工藝學校などの設備に似たる所あり。市街の大小は元より比較にならねど、總て

の光景は、京都を縮寫したる模型と云ふも誇言でない。中に縣社青海神社が、高きに據て數千株の老杉に掩はれ、三つの池には、常に無數の魚族泳ぎ、境内幽邃にして閑雅なるは、彼の上加茂、下加茂の祠に比するも多くの遜色を見ない。

老いたる母上は門に待ち、同胞の兄妹は堂に集まり、十數人の甥や、姪や、或る者は自家の邸内より巴旦杏を摘みて運び、或る者は川より香魚を漁し來り、心盡しの饗應に酬いて、余もまた近くは東京博覽會の話から、遠くは滿洲の從軍談まで、右に左に語り續け、興味津々として盡る期なく、夜の更くるまで樂しみ興じ、明くる一日も、故き友や郷黨の先輩に往來して暮しつ。次の日は汽車にて新潟へと赴きぬ。

新潟名物の美人

東京博覽會の演藝館へ押し出して、檜舞臺の上で、下駄穿きの盆踊りが大評判となり、滿都の士人を狂喜せしめて、越後女の技倆に一段の光彩を添へしめたる新潟の藝妓連は、遠征軍隊が大勝利の月桂冠を戴いて凱旋する樣に、今日しも同勢五十餘人の一行、新潟に歸り着くとて、市民の一部は歡迎の準備に忙しき日、余は信濃川東岸の停車場から人力車を驅て萬代橋を渡れば、延長四百間の長橋は、宛から虹霓の如く、是れだけでも全國第一として誇るに足るに、況して國自慢の雪をも欺むく白き膚に眼晴涼しき美人の本場、東京へ出稼ぎに往つた連中などは、俳優ならば名題下、角力ならば幕下位の所のみと、

土地の人々が誇る所の美人本位の一都會に着いた。

博覽會演藝館の盆踊りは、何時も大入り客止めで、多くの人は空しく歸ると聞き、終に見るの機會を得なかつた余は、此夜友人に伴はれて酒樓の巨壁なる鍋茶屋に赴き、所謂名題の藝者、幕の内藝者も數人見た。また久し振りで追分節も聞いた。其の音聲の涼しさ、其調子の流暢さ、例の忍路高島を長く長く喉も裂けるかとばかり聲を延ばして歌ひ出れば、神韻縹緲として宛ながら仙樂を聞く樣で、梁上の塵も落るかと疑はる。道理こそ、此時小さき羽蟲も感に堪へでや、頭上の電燈に夥多しく群がつて來た。藝者は若狹屋のおかく、金澤のおたか、今川屋のおはつ、吉田屋のおみすなど、曾て十年前曾遊の頃から名の賣れた老妓も居る。成程此の聲では、地方の旦那樣達の腸を九廻せしむることも出來よう。イヤ其中の或る者の容色の爲に、東京の去るやんごと無き方も、一日御滯在を延ばし給ひしこともありとぞ。實に新潟は美人の港、假令其の港口は深からず、大汽船の碇泊には不便なりとも、また商工業の見るべきもの少なくと

箱根巡り

我兄弟の墓

箱根神社

宮ノ下温泉

玉垂れの瀧

關所の址

も、そんな事で新潟を論ずるは野暮の至りだ。此所は本來美人本位の地、是だにあれば、以て土地の繁昌を維持するに足る。此所の人々は、男子を生むを賀せず、女子を生むを賀するとは、固より當り前だと、頻りに感心して居ると、庭を隔つる別席で、所謂東京からの凱旋隊が、樽を叩いて盆踊りの大騒ぎを始め、何者の客やら、聲はり揚げて歌ふて曰く、

アーレー盆だてがんネー茄子の皮の雜炊だアー

（明治四十年）

秋季混題（八字結）　水哉

秋立や八百屋の鋏が鬣の先
八千艸や鈴蟲松蟲くつわ蟲
八重むぐら秋や相馬の内裡跡

箱根めぐり

湯本

頃日から降り續きたる雨の霽れ上るを待ち、八月半ばに箱根溫泉巡りにと出懸る。箱根巡りの振り出しは、古來相場の定まつた湯本。東海道の往還、溫泉場の入り口、箱根細工の發賣元、今は電車鐵道の發着地、東京までは電信もあれば電話もある。交通の機關が十分なので、東京からは一寸大きな庭中を散歩する位なもの。昔時天下第一の要害と云はれた箱根の關所も、今は世界各國人の遊び場所となり、一人も客の多く來る樣にと、あらゆる往來の便利を備へて待つ時節とて、往年箱根草を書いた瀧亭鯉丈などに、現今の狀況を見せたらば、時勢變化の急なるに驚き、眼を廻して氣絶するであらうと思はる。電車鐵道の停車場を出れば、早川の對岸に有名なる福住樓は、川

に臨んで和洋兩種の建築を構ひ、先代の主人は二宮尊德門下で、文墨の交友は天下に多かつたのと、樓舍は華麗、什器は古雅、之に加へて古今朝野諸名家の揮毫に富み、名代の舊家なるが、余輩書生には些と貴族的に過るのと、餘り入り口で、山の中へ入た樣な氣もせねば、余は最初から初日は塔ノ澤の鈴木へと志ざし、電車停車場前の鈴木の支店で、手荷物を若い者に渡し、寫眞機だけは自分で擔ぎ、テク〳〵歩行を始むるに、前日の暴雨にて、早川の溪流は溢れて橋を損じ、福住樓外の福住橋は、繩を横に張りて車の通行を禁じ、其の上流なる旭橋も、荷馬車の通行を危險とし、橋上丈けは空車にして過ぐ。彼岸此岸の荷の積替は、馬夫の困却思ひやらる。橋の西岸、右は塔ノ澤から各所の溫泉道、左りは箱根宿へ往く東海道。

途すがら鈴木の若い者の話に、今年は箱根も毎日雨ばかり降り續き、土用の中も、浴客は平年の半分に上らず。湯本も塔ノ澤も、其他の山上の各溫泉も、何所でも閑寂としたものだと聞き、如何に山中が寂しくとも、關所から東に怪物無しとは昔時から定

まつたもの、然るに近年は成金や藝人といふ人間の怪物現はれ、大きな面して騒ぎ廻るので、我々の眞人間は、何時も片隅に小さくなつて氣息を殺して居ねばならぬが、今年は僥倖にも手足が伸ばせる哩と、心に悦こべば、足の進みも早く、湯本から塔ノ澤まで、タッた五丁許りの途は、早くも入り口の玉ノ緒橋に到着せり。

塔ノ澤

塔ノ澤の溫泉場は、S字形なる早川の溪流に沿ふて二橋を架け、入り口なるが玉の緒橋、奥なるが千歳橋。其の玉の緒橋の右方の山が、前日の暴雨で崩れ落ち、路傍の藝者屋を半潰れにして　大小五六匹の山猫は危ふくも川中へ押し流さるゝ所を、夜間ながらもまだ寢ない前とて、幸ひに怪我も無く遁げ出したりと。若しも之れがお客の所爲ならば、三味線棹を踏み折られても、却々高い賠償金が貰はれように、天災の悲しさ、家を潰されても三文の無心をも言ふ能はざるは、不景氣の中で、泣面に蜂なるべし。イヤ前年までは一人も無つた藝者が、近頃は十人も出來たといふので、山の神が燒餅を燒き、斯くは暴ばれたのかも知れぬ。

塔ノ澤の溫泉宿は、鈴木、玉の湯、清凉館、福住、新玉の湯、一の湯と、合せて六軒の中に、鈴木と玉の湯は、何れも橋側の溪流に臨み、眺望も宜く、建築最も壯麗なり。余は豫ねて志す鈴木に着き、二階の廣やかな一室に伴はれ、先づ借り浴衣に着かへて一浴すれば、久しく紅塵萬丈中に汚れたる身體は、紛々なる俗務の爲に惱みたる腦髓とゝもに、洗ひ清められて、恰かも澆季の俗世界を離れ、清淨無垢なる太古の別天地に入つたかと思はる。此れは其筈で、鈴木の一名環翠樓は、前年稀代な神代杉の大木を獲て、裏手の三階樓は其の材木で建築し、之を神代閣と呼び、家屋が既に神代の遺物な上に、召使ふ女中は、何れも岩戸神樂の鈿女命以上の神々しく、大蛇退治の稲田姫にも劣らぬが多ければ、八股の大蛇ならずとも、浴客は皆澤山酒が飲めるなるべし。オッと此所も湯本と同じく電氣燈の耀やく所、今ごろ提灯を持つ必要も無れば、樓外

の風景を寫眞に取る方がまだしもなりと、機械を肩にしてブラリと出かける。

『其れは私が持て上げます』と、宿の老番頭殿が走り出て、寫眞の機械を持ちながら案内して呉れるまゝ、塔ノ澤から湯本の間で、數葉撮影して、更に湯本を通り越し、須雲川を渡つて玉垂滝に往く。滝は今某華族の所有と聞けども、一人につき拾錢づゝの入場劵を賣て縱覽せしむ。湯坂山の半腹に懸りて、高さ十間幅五六間、崖から落ちる水が巖に觸れ、下るに隨ひ次第に廣がり、前から望めば水晶の簾を垂れたる如く、石を打ち、風に揉まれ、飛沫は四邊に散て霧と爲り、暫時にして衣袂皆な濕ふ。暑熱などゝ謂ふは何の事か、此所では意味を知らぬ位なり。撮影後、元と來た途を歸り、晩餐を了して枕に着けば、耳を澄ます溪流の聲は、數しば驟雨の來たかと疑はれつゝ、夢は尚ほ玉垂滝の邊を徘徊す。

宮ノ下

東京から塔ノ澤までは、一路平坦、まだ山中らしく無ければ、外國人の箱根へ遊ぶ者は、大抵は宮ノ下か箱根宿へ往く。で、余も翌日午後山上に向つて出懸けた。塔ノ澤から宮ノ下まで、一里十五丁の坂路は、前年來新道開け、馬も轎も人力車も自由に通ひ、その坂路の右方には、斷えず早川の溪流を脚下に眺め、遠く望めば一段の白布を展げたるが如く、近づけば水聲玉を響かし、耳目の樂しさに坂路の苦を知らず。途中で大平臺の村落を過ぎ、愈〻宮ノ下に達すれば、最早海面より高きこと一千百二十尺。早川の岸より高きこと五丁、鷹巣山の半腹に、西洋風の建築が巍然として聯び立ち、壯大目を驚ろかす許りなり。其中で最も大なるが富士屋と奈良屋で、道の兩方に向ひ合はせ、些しく坂を下つて龍雲館あり。宮内省の御用邸や、郵便電信及電話交換局、古今美術品陳列販賣所等あり。寫眞屋ばかり三軒あるにて、其他の繁昌が察せらる。電話は坐して東京横濱と談ず可く、中にも富士屋ホテルは、自宅内に電燈を設け、客室の數は百餘あり、箱根十二湯中で、最も多く内外貴紳の來り遊ぶ所と稱せらる。此

の山中に此の大ホテルあるかと、怪しまるゝ位なるが、客の大部分は西洋人で、日本人が來ると彼等が厭やがる故、多くは斷わるといふ次第なれば、宮ノ下全體が殆ど居留地に入つた樣で、家々の看板、路傍の廣告まで、皆な英文で書き、車夫も轎夫も異人さんを第一の顧客として喜べば、何れの家もバタ臭き感じがする故、余は其所を素通りにし、軒端續きの底倉なる梅屋といふに飛び込んだり。

底倉

底倉は宮ノ下と續き、宮内省御用邸を隔つるのみ。蛇骨川が西から流れて、溫泉宿は其の兩岸に跨がり、中間に架するを八千代橋と呼ぶ。梅屋と仙石屋は南岸に、蔦屋は北岸に相對し、橋は溪流の上七八間の空中に懸る。橋の上流一丁許りの山の腰に太閤の石風呂あり、石で畳んだ巖窟の中、廣さ僅に一人を容る。坐して岩の間から噴き出す湯氣に蒸さるゝなり。此れは豐太閤が小田原征伐のとき、來り浴したる所といふ。底倉から小涌谷又は蘆ノ湯を經て、箱根宿へ往くには、八千代橋を渡らずして、直に石風呂の背後なる西方の山路に登る。また木賀、强羅、仙石原、姥子等の溫泉へは、橋を渡つて往くなり。箱根湖より仙石原、宮城野村、木賀を經て流れ來る宮城野川は、八千代橋の下で、蛇骨川と一つになり、其所から下流を早川と呼ぶ。

堂ケ島

堂ケ島は宮ノ下の谷底なる早川の岸に在り。擂鉢の底の樣な薄暗い所なれば、此地をこそ底倉と名けるが適當と思ふ。溪流軒を繞り、四面盡く青山、白雲は世間と境を隔て、水聲は斷えず琴瑟を奏す。宮ノ下の俗氣紛々たるに比べて、別天地の觀あり。浴舍には近江屋と大和屋の二戸あり、調べの瀧、白糸の瀧など、山光水色の眺めに富む。

木賀

底倉から、蛇骨川の八千代橋を渡り、早川の上流なる宮城野川に沿ふて遡ること六町にして、木賀溫泉がある。溪流の兩岸に、綠なす山々が屏風の樣に連なり、水は其間を奔りて、中に横はる巖石、大なるは丘の如く、小なるも臥牛に似て、其數幾つとも數へ切れぬ。水は、其等の石に激し、散ては雪と爲り、懸つては瀧を爲し、跳つては怒れる獅子の如く、巖を嚙み、岸を搏ち、壯絶快絶なり。木賀の溫泉は、龜屋、仙石屋の二軒ぎりて、大厦高樓なきも、溪流に面し、他に類の無い眺めに富む。余は此の風景に見惚れ、底倉から朝夕兩回出懸け、雲烟去來の狀を撮影し、最後には激流の巨巖に激する景をと、尻端折て水に入れば、深さ膝を沒し、水底の砂礫が、一つづゝ見分けられる淸き流れは、氷の如く冷やかに、久しく立て居られなかつた。

木賀から川に沿ふて更に遡ること五六丁、其所に宮城野の村落が農家五六十戸、田圃の間に散在す。湯本以來、稻田を見るは始めてなり。村の中間なる橋の傍に、名物の蕎麥屋があるも、蕎麥は急の注文では出來ぬといふ。橋の下流に水車が茅葺屋根の下に運轉して、天然の水彩畫を爲す。近傍各溫泉の浴客が、散歩には至極適當の地なり。

小涌谷

底倉の梅屋から、仙石屋の軒先を通り、蛇骨川の上流に架けた小橋を渡り、山路を登ること十五六丁で、右方の山腹に小涌谷溫泉がある。此所は元と小地獄と呼び、冠岳の陰の大地獄と同じく、地下より常に湯氣を噴出して居るが、前年　今上陛下行幸の砌り、地獄といふ名は妙で無い爲大涌谷小涌谷と改めしめ給ふたる名所だ。其の地下に涌く溫泉を導き、三河屋と云ふが出來ると、其所は海拔一千七百餘尺の高地、夏は涼しき上に眺望もあり、宮ノ下や蘆の湯へも遠からぬので、內外の浴客急に輻輳し、增築また增築と、漸次に擴張して、今は一戸ながら其の構造は頗る廣く、西洋料理も、玉突臺も、備はり、却々盛んなる三河屋ホテルと爲た。此のホテルの二三丁下なる山腹には、千筋瀧といふ瀑布もあり、今は宮ノ下から箱根まで、新たに開鑿せられたる路

傍と爲て、便利は益〻加はり、山下には人力車も馬車も通ず。

蘆ノ湯

小涌谷から更に坂路を登ること一里餘で蘆の湯に達す。舊時の箱根溫泉は、湯本、塔ノ澤が一區、宮ノ下、底倉、堂ヶ島、木賀が一區、蘆ノ湯はまた別に一區を爲して、溫泉の性質も、下の二區は鐵礦泉だが、此所は硫黃泉で、全く異つて居る。余は底倉から轎で登つて二時間かゝつたが、後に徒歩すると、一時間半で充分だ。此所の溫泉宿は、松坂屋、紀伊國屋の二軒だが、松坂屋は舊時五軒あつた同業を買收したので、全家十數棟、客室は百二十餘あり。外客の爲には洋館を設け、食堂の構造や飲食品など、些しも不便が無い。日本食料品も魚類は三島と小田原の兩方から來るので、伊豆、駿河、相模三ヶ國の鮮鱗を、朝夕喰べ比べることが出來る。箱根湖水へは一里八丁、宮ノ下へは一里半、湯ノ花澤へ五丁、小涌谷へ一里といふ位で、遊歩の區域も甚だ廣い。で、毎年盛夏には、五百人餘の浴客集まり、其中に外客が五六十人ある相だ。其の天候が朝晴暮陰、變化定まり無き所が頗る妙だ。

蘆ノ湯と限らず箱根各溫泉では、客の待遇に伺ひと見計ひの二種あつて、伺ひとは、毎食前に材料を報じて、客の嗜好を問ひ質すもの、見計ひとは、宿の見計ひで供給するのだ。が、今は大抵伺ひとして居る。其外に蘆ノ湯では、室料、夜具代、炭油代、茶の代と、一々盡く消耗品の代價を書き立てゝ請求す。其れは甚だ便利だが、既に斯くする以上は、茶代も全く廢止し、若し必要があらば席料や其他の費用を最つと高く取ても宜からうと思ふ。箱根中で、茶代廢止は湯本の福住と、底倉の蔦屋だけと云ふ。

湯ノ花澤

蘆ノ湯から松坂屋の背後の山を五丁登ると、駒ヶ嶽の麓は、近年開けた溫泉場で、浴舍は花の湯唯だ一軒。鑛泉は硫黃で、其の名の如く多く湯の花を採て乾燥し、遠方

へ賣り出すのだが、閑靜の上に物價も廉いとて、浴客には外客もある。勿論行き止りの地で、蘆ノ湯か、小涌谷へ下る外は、駒ケ嶽へ登るだけで、他に見るものは無い。

二タ子山

蘆ノ湯旅館の客室から、窓を開けば眼の前に聳ゆる二タ子山は、山麓から絶頂まで八丁餘、遊覽の爲に之の字形に幾多の屈曲したる坂路を設く。絶頂には巨石重疊して草木無く、所々に黄楊と躑躅とが天然に生ひ、人工を加へざる一大庭園を爲す。石に腰かけて遠く眸子を放てば、晴れたるときは、近く小田原、國府津の海岸から、三浦三崎より、遠く房總の諸山を雲烟縹緲の間に望み、一方には箱根湖の瑠璃色なる明鏡を、群山繞り圍む中に眺む。然ども氣象の變化急なる爲に、忽ち四方に雲涌けば、咫尺の外は濛々として一物を見ず。身は天上に仙人と化したかと疑ふ。其の奇景は下界の想像が及ぶ所で無い。また蘆の湯から箱根湖まで、一里八丁の間は、坂路も急ならず、路傍に曾我兄弟の墓、多田滿仲墓と稱するもの、自然石に彫刻したる二十五の菩薩、同く巨石に彫り附けたる大地藏などあり。往昔此邊は箱根別當奥の院の舊跡で、隨つて就て見るべき物は甚だ多い。山轎に乘る人、安樂椅子に棒を添へて昇かする人、偖は靴の上に草鞋を穿いた婦人など、内外の遊客を、最も多く見るは此邊だ。

元箱根

箱根には、元箱根と箱根宿との二部落がある。ともに箱根湖（一に蘆の湖）の岸に沿ふ。湖は山中第一の絶景で、其の南岸なる賽の河原から、湖岸に沿ふて東方の一村落は、箱根の權現祠と箱根別當跡とを併せて、元箱根と稱す。鎌倉幕府時代に、箱根別當が相模の大部分を領した頃、鎌倉へ參勤する諸大名は、皆な別當の邸に宿泊した位で、今も賽の河原の湖岸に散在する巨石には、佛像又は佛塔の破片が多いに徵しても、其の盛時が想像される。物變り星移つて當時の繁昌は見るに由なきも、駒ケ嶽の